熊本県文化財調査報告　第135集

岡　　田

――県営菊池うてな台地地区畑地帯総合改善事業に伴う埋蔵文化財発掘調査――

1993

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第135集

岡　　田

――県営菊池うてな台地地区畑地帯総合改善事業に伴う埋蔵文化財発掘調査――

1993

熊本県教育委員会

口絵　岡田遺跡空中写真

序　　文

本県教育委員会では平成４年５月に鹿本郡鹿央町に熊本県立装飾古墳館を開館することができました。現在、２年目を迎えようとしているところでありますが、すでに五万人の入館者を迎えることができております。古代ブームと申しましょうか、古代の歴史文化に対して興味をもたれる方々が非常に多いことに驚かされるところでございます。

さて、この県立装飾古墳館でも紹介してもおりますように菊池川流域は非常に多くの古代遺跡が存在しているところであります。今回、この菊池うてな台地地区に県営畑地帯総合改良改善事業が行われることになり、その取扱には慎重な対応が求められました。地元関係の方々はもとより関係当局の方々とは現況で極力保存することを原則として協議を重ねてきましたが、事業の施工上やむなく記録保存で対応せねばならないところが生じてきました。これらの遺跡については工事に先立ち発掘調査を実施し、出土した遺構や遺物の整理をおこない報告書を刊行する、いわゆる遺跡の記録保存を行うことで相互のご理解をおはかりしてきたところでもあります。

このような中、ここに報告いたします岡田遺跡は菊池郡七城町に所在する遺跡です。菊池平野を見下ろす絶好の場所に位置しており、縄文～弥生時代それに古代にかけての貴重な生活跡や墓域を検出することができました。とくに、縄文中期は今より4,000年も昔の世界でありますが、この遺跡から出土しました土器は明らかに瀬戸内地方、とくに岡山県倉敷市船元式土器と非常に類似するものであることが判明しています。縄文時代の人々が瀬戸内海をとおしてさかんに交易を行なっていたことをものがたるもで、今日の私どもの想像をはるかに越えた彼らの積極的な行動を見ることができます。

最後になりましたが、発掘調査の実施に当たりましては地権者をはじめとした地元の方々や、多くの関係各位の多大のご協力をいただきました。また、多くの専門の先生方のご指導がありました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成５年３月31日

熊本県教育長　道　越　　温

例　　言

1．本書は熊本県営畑地帯改善事業「菊池うてな地区」に伴い熊本県教育委員会が昭和63年５～８月及び平成２年８～12月に発掘調査を実施した菊池郡七城町岡田遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書に使用した地形図は熊本県耕地課作成1,000分の１図を原図として使用し、調査による平板測量図を加筆し作成している。また、遺跡位置図は七城町役場作成の5,000分の１七城町図の提供を受けた。

3．縄文関係の遺物分布図は模式化し掲載している。これらの分布状況の検討・把握作業を行うまでに至っていない。また石器類も一部の報告にとどまっている。後日、作業を行いその報告が課せられているものである。

4．出土遺物は熊本県文化財収蔵庫に整理・保管を行っている。

5．発掘調査及び報告書作成における作業は下記により行っている。

〈測量・実測〉江本　直　丸山伸二　中岡　昇　高宮京子　中村幸美
本山千絵　山下志保　松村真紀子

〈製　　図〉江本　本山　坂田朋子　山田大介　木下春千代　椎葉博昭
山下　松村

〈写真撮影〉江本　丸山　中岡　白石　巌

〈執　　筆〉江本　山下　松村　本山

6．本書の編集は熊本県教育庁文化課で行い江本が担当した。

目　　次

序　　文……1
例　　言……2
第Ⅰ章　序　　説……8
　第1節　調査の経緯と経過……8
　第2節　遺跡概観……9
　第3節　調査地について……11
第Ⅱ章　調査結果……15
　第1節　縄文時代包含層の調査……15
　　(1)出土状況……15
　　(2)出土土器……15
　　(3)出土石器……53
　第2節　縄文晩期甕棺墓・弥生中期甕棺の調査……67
　　(1)全体出土状況……67
　　(2)各遺構について……67
　　出土状況・出土遺物……67
　　(3)まとめ……83
　第3節　住居跡・掘立柱建物の調査……88
　　(1)遺構出土状況……88
　　(2)住居跡……88
　　(3)掘立柱建物……88
　　(4)出土土器……92
　第4節　墓壙の調査……93
　　(1)出土状況……93
　　(2)基壙……93
　　(3)出土土器……93
　第5節　その他の遺構・遺物……96
　　(1)集石遺構……96
　　(2)土壙遺構……96
　　(3)溝遺構……96
　　(4)柱穴群……96
　　(5)土壙群……96
第Ⅲ章　ま と め……104

図 版 目 次

口　絵　岡田遺跡空中写真
第１図　岡田遺跡位置図……10
第２図　岡田遺跡地形図……12
第３図　岡田遺跡全形図……13
第４図　調査区全体遺構図……14
第５図　Ｂ－３・４グリッド遺物分布図……16
第６図　Ｃ－３・４グリッド(上層)遺物分布図……17
第７図　Ｂ・Ｃ－２グリッド遺物分布図……18
第８図　Ｃ－４グリッド遺物分布図……18
第９図　Ｃ－３・４グリッド(下層)遺物分布図……19
第10図　Ｄ－４グリッド遺物分布図……20
第11図　Ｃ－５グリッド(上層)遺物分布図…20
第12図　Ｄ－４・５グリッド遺物分布図……21
第13図　Ｃ－５グリッド(中層)遺物分布図…22
第14図　Ｄ－５グリッド(上層)遺物分布図…22
第15図　Ｄ－６グリッド(上層)遺物分布図…23
第16図　Ｂ－６グリッド遺物分布図……23
第17図　Ｄ－５・６グリッド(下層)遺物分布図……24
第18図　Ｃ－５・６グリッド(下層)遺物分布図……25
第19図　Ｃ－６グリッド遺物分布図……26
第20図　Ｄ－６グリッド(中層)遺物分布図…26
第21図　Ｄ－６グリッド(下層)遺物分布図…27
第22図　Ｅ－６グリッド遺物分布図……27
第23図　Ｇ－６グリッド遺物分布図……28
第24図　Ⅰ類土器実測図……29
第25図　Ⅱ類土器実測図(１)……30
第26図　Ⅱ類土器実測図(２)……31
第27図　Ⅲ－Ａ類土器実測図(１)……33
第28図　Ⅲ－Ａ類土器実測図(２)……34
第29図　Ⅲ－Ａ類土器実測図(３)……35
第30図　Ⅲ－Ｂ類土器実測図(１)……36
第31図　Ⅲ－Ｂ類土器実測図(２)……37
第32図　Ⅲ－Ｃ類土器実測図(１)……38
第33図　Ⅲ－Ｃ類土器実測図(２)……39
第34図　Ⅲ－Ｃ類土器実測図(３)……40
第35図　Ⅲ－Ｃ類土器実測図(４)……41
第36図　Ⅲ－Ｃ類土器実測図(５)……42
第37図　Ⅲ－Ｃ類土器実測図(６)……43
第38図　Ⅲ－Ｄ類土器実測図……43
第39図　Ⅲ－Ｅ類土器実測図……44
第40図　Ⅲ－Ｆ類土器実測図(１)……44
第41図　Ⅲ－Ｆ類土器実測図(２)……45
第42図　Ⅲ－Ｇ類土器実測図(１)……46
第43図　Ⅲ－Ｇ類土器実測図(２)……47
第44図　Ⅲ－Ｈ類土器実測図(１)……48
第45図　Ⅲ－Ｈ類土器実測図(２)……49
第46図　Ⅲ－Ⅰ類土器実測図……50
第47図　Ⅳ類土器実測図(１)……52
第48図　Ⅳ類土器実測図(２)……53
第49図　出土石器実測図……53
第50図　出土石器実測図……54
第51図　出土石器実測図……55
第52図　Ｂ・Ｃ－７グリッド(北側)実測図…68
第53図　Ｂ・Ｃ－７グリッド(南側)実測図…69
第54図　Ｃ・Ｄ－８グリッド実測図……70
第55図　Ｄ・Ｅ－７グリッド実測図……71
第56図　弥生中期甕棺配置図……72
第57図　第１号甕棺墓出土状況実測図…72
第58図　第２号甕棺墓出土状況実測図…74
第59図　第３号甕棺墓出土状況実測図…74
第60図　第４号甕棺墓出土状況実測図…74
第61図　第５号甕棺墓出土状況実測図…77

第62図　第６号甕棺墓出土状況実測図…77
第63図　甕棺墓状遺構出土状況実測図…78
第64図　弥生中期甕棺出土状況実測図…78
第65図　甕棺墓出土土器実測図(1)……79
第66図　甕棺墓出土土器実測図(2)……80
第67図　甕棺墓出土管玉実測図……81
第68図　弥生中期甕棺実測図……82
第69図　Ｂ・Ｃ－４グリッド実測図……89
第70図　第１号住居跡実測図……90
第71図　第２号住居跡実測図……91
第72図　古代土器実測図（１～３）……92
第73図　第１号中世墓壙実測図……94
第74図　第２号中世墓壙実測図……94
第75図　燈明皿実測図（１～７）……95
第76図　集石遺構実測図……97
第77図　土壙実測図……97
第78図　Ｂ－２グリッド実測図……98
第79図　Ｃ－２グリッド実測図……98
第80図　Ｂ－３グリッド実測図……99
第81図　Ｃ－３グリッド実測図……99
第82図　Ｂ・Ｃ－５・６グリッド実測図……100
第83図　Ｃ－５・６グリッド実測図……101
第84図　Ｄ－５グリッド実測図……102
第85図　Ｆ－５グリッド実測図……102

表　目　次

表１　出土遺物観察一覧表(No１)……56
表２　出土遺物観察一覧表(No２)……57
表３　出土遺物観察一覧表(No３)……58
表４　出土遺物観察一覧表(No４)……59
表５　出土遺物観察一覧表(No５)……60
表６　出土遺物観察一覧表(No６)……61
表７　出土遺物観察一覧表(No７)……62
表８　出土遺物観察一覧表(No８)……63
表9　出土遺物観察一覧表(No９)……64
表10　出土遺物観察一覧表(No10)……65
表11　出土遺物観察一覧表(No11)……66
表12　出土石器観察一覧表(No１)……66
表13　甕棺墓・甕棺一覧表……67
表14　出土管玉一覧表(No１)……85
表15　出土管玉一覧表(No２)……86
表16　出土管玉一覧表(No３)……87

写　真　目　次

写真１　上：岡田遺跡調査風景
　　下：岡田遺跡調査風景
写真２　上：Ｄ－６グリッド縄文石器出土状況
　　下：Ｄ－６グリッド縄文石斧出土状況
写真３　上：Ｃ－２グリッド土壙出土状況
　　下：Ｃ－６グリッド集石遺構
写真４　上：Ｄ－４グリッド縄文石斧出土状況
　　下：Ｂ－６グリッド黒曜石原石群
写真５　上：黒曜石原石出土状況
　　下：甕棺墓群
写真６　上：甕棺墓群出土状況
　　下：第１号甕棺出土状況
写真７　上：第２号甕棺墓出土状況
　　下：第２号甕棺墓出土状況
写真８　上：第３号甕棺墓出土状況
　　下：第３号甕棺墓出土状況
写真９　上：第３号甕棺墓出土状況
　　下：第３号甕棺墓出土状況
写真10　上：第３号甕棺管玉墓出土状況
　　下：第４号甕棺管玉墓出土状況
写真11　上：第４号甕棺管玉墓出土状況
　　下：第４号甕棺管玉墓出土状況
写真12　上：第５号甕棺墓出土状況
　　下：第５号甕棺墓出土状況
写真13　上：第５号甕棺・小型壺墓出土状況
　　下：第５号甕棺管玉墓出土状況
写真14　上：第６号甕墓小型壺出土状況
　　下：第６号甕墓小型壺出土状況
写真15　上：Ｂ－７グリッド甕棺墓出土状況
　　下：中期甕棺出土状況
写真16　上：中期甕棺出土状況
　　下：中期甕棺出土状況
写真17　上：Ｃ－13グリッド中期甕棺出土状況
　　下：掘立柱建物出土状況
写真18　上：古代住居跡出土状況
　　下：古代住居跡出土状況
写真19　上：中世墓壙出土状況
　　下：中世墓壙出土状況
写真20　上：中世墓壙出土状況
　　下：中世墓壙内木炭出土状況
写真21　上：中世墓壙群出土状況
　　下：中世墓壙内木炭出土状況
写真22　上：縄文Ⅰ類土器(表)
　　下：縄文Ⅰ類土器(裏)
写真23　上：縄文Ⅱ類土器(1)(表)
　　下：縄文Ⅱ類土器(1)(裏)
写真24　上：縄文Ⅱ類土器(2)(表)
　　下：縄文Ⅱ類土器(2)(裏)
写真25　上：縄文Ⅲ－Ａ類土器(1)(表)
　　下：縄文Ⅲ－Ａ類土器(1)(裏)
写真26　上：縄文Ⅲ－Ａ類土器(2)(表)
　　下：縄文Ⅲ－Ａ類土器(1)(裏)
写真27　上：縄文Ⅲ－Ａ類土器(3)(表)
　　下：縄文Ⅲ－Ａ類土器(1)(裏)
写真28　上：縄文Ⅲ－Ｂ類土器(1)(表)
　　下：縄文Ⅲ－Ｂ類土器(1)(裏)
写真29　上：縄文Ⅲ－Ｂ類土器(2)(表)
　　下：縄文Ⅲ－Ｂ類土器(1)(裏)
写真30　上：縄文Ⅲ－Ｃ類土器(1)(表・裏)
　　中：縄文Ⅲ－Ｃ土器(1)(表・裏)
　　下：縄文Ⅲ－Ｃ類土器(2)(裏・裏)
写真31　上：縄文Ⅲ－Ｃ類土器(3)(表．裏)
　　中：縄文Ⅲ－Ｃ土器(3)(表)
　　下：縄文Ⅲ－Ｃ類土器(3)(裏)

写真32　上：縄文Ⅲ－C類土器(4)(表)
　　下：縄文Ⅲ－C類土器(4)(裏)
写真33　上：縄文Ⅲ－C類土器(5)(表・裏)
　　中：縄文Ⅲ－C土器(5)(表)
　　下：縄文Ⅲ－C類土器(5)(裏)
写真34　上：縄文Ⅲ－C類土器(表・裏)
　　中：縄文Ⅲ－C土器(表・裏)
　　下：縄文Ⅲ－C類土器(表)
写真35　上：縄文Ⅲ－E類土器(表)
　　下：縄文Ⅲ－E類土器(裏)
写真36　上：縄文Ⅲ－F類土器(1)(表)
　　下：縄文Ⅲ－F類土器(1)(裏)
写真37　上：縄文Ⅲ－F類土器(2)(表・裏)
　　中：縄文Ⅲ－F土器(2)(表・裏)
　　下：縄文Ⅲ－F類土器(2)(裏・裏)
写真38　上：縄文Ⅲ－G類土器(表)
　　下：縄文Ⅲ－G類土器(表)
写真39　上：縄文Ⅲ－H類土器(1)(表)
　　下：縄文Ⅲ－H類土器(1)(表)
写真40　上：縄文Ⅲ－I類土器(表)
　　下：縄文Ⅲ－I類土器(裏)
写真41　上：縄文Ⅳ類土器(表)
　　中：縄文Ⅳ類土器(表)
　　下：縄文Ⅳ類土器(裏)
写真42　上：甕棺墓書土土器
　　下：甕棺墓書土土器
写真41　上：甕棺墓書土管玉
　　下：甕棺墓書土管玉
写真42　上：弥生中期甕棺
　　下：弥生中期甕棺

第Ⅰ章　序　　説

第１節　調査の経緯と経過

熊本県営畑地帯改良改善事業の実施計画にもとずく施工予定地内の埋蔵文化財の取扱については担当の県耕地整備課と文化課との事前協議がかさねられているところで、前者からの依頼を受けた場合、文化課では既刊されている埋蔵文化財包蔵地一覧表を基礎資料としながら、現地踏査や試掘調査などの基礎作業を行い、施工予定地内における文化財の有無を調べ、発掘調査の必要な範囲を図示するなどの作業を行いその結果を通知している。この通知をもとにして県耕地整備課では地権者の賛同を得ながら、盛り土工法や設計変更などにより埋蔵文化財が現況で可能な限り保存ができるような検討が重ねられている。

以上のような経緯をへながら、工事計画上やむなく削平され埋蔵文化財が壊されてしまう所については、事前の発掘調査を行ったうえ報告書を刊行する、いわゆる記録保存を行う方法がとられてきている。

菊地うてな台地地区においては慎重な協議が進められてきたものの、莫大な改良改善工事面積に加えて菊池川中流域という非常に古代遺跡が密集する地域であり、事前に発掘調査を行った遺跡は、岡田遺跡のほか、うてな遺跡　流川遺跡　一本松遺跡　岡田野寺遺跡　水次遺跡など数多い。

発掘調査の終了をまって直ちに工事が施工されるのが通常的であり、この地区は平成４年度のうてな遺跡を最後として、その後に行われた整備工事によって作業は順調に完了している。

一方、発掘調査が終了するとその年度もしくは近い将来に発掘調査報告書の作成・刊行を行うのを原則としているが、県内では調査を急ぐ地区が非常に多いため、やむなく報告書作成をあとにまわして発掘調査を先行させているのが現状である。

以上のような状況を改善し、調査の終了後極力早い時期に報告書の発行するという原則的な措置がとられなければならないが、その一歩として、今回岡田遺跡の報告書の刊行が計画されたものである。大変重要な遺構や遺物が発掘調査されており報告書の刊行が強く要望されていたものでもある。

岡田遺跡の発掘調査は第一次調査平成元年５月～９月、第二次調査平成元年11月～12月、第三次調査平成２年９月～12月にわけて行なっている。なお、水路の予定地だけの調査となった岡田野寺遺跡は昭和63年５月に始まり同年11月に終了している。

報告書の作成は平成４年４月から熊本県文化財収蔵庫で行っている。

以上、下記の調査組織のもとで調査及び報告書作成作業を実施している。

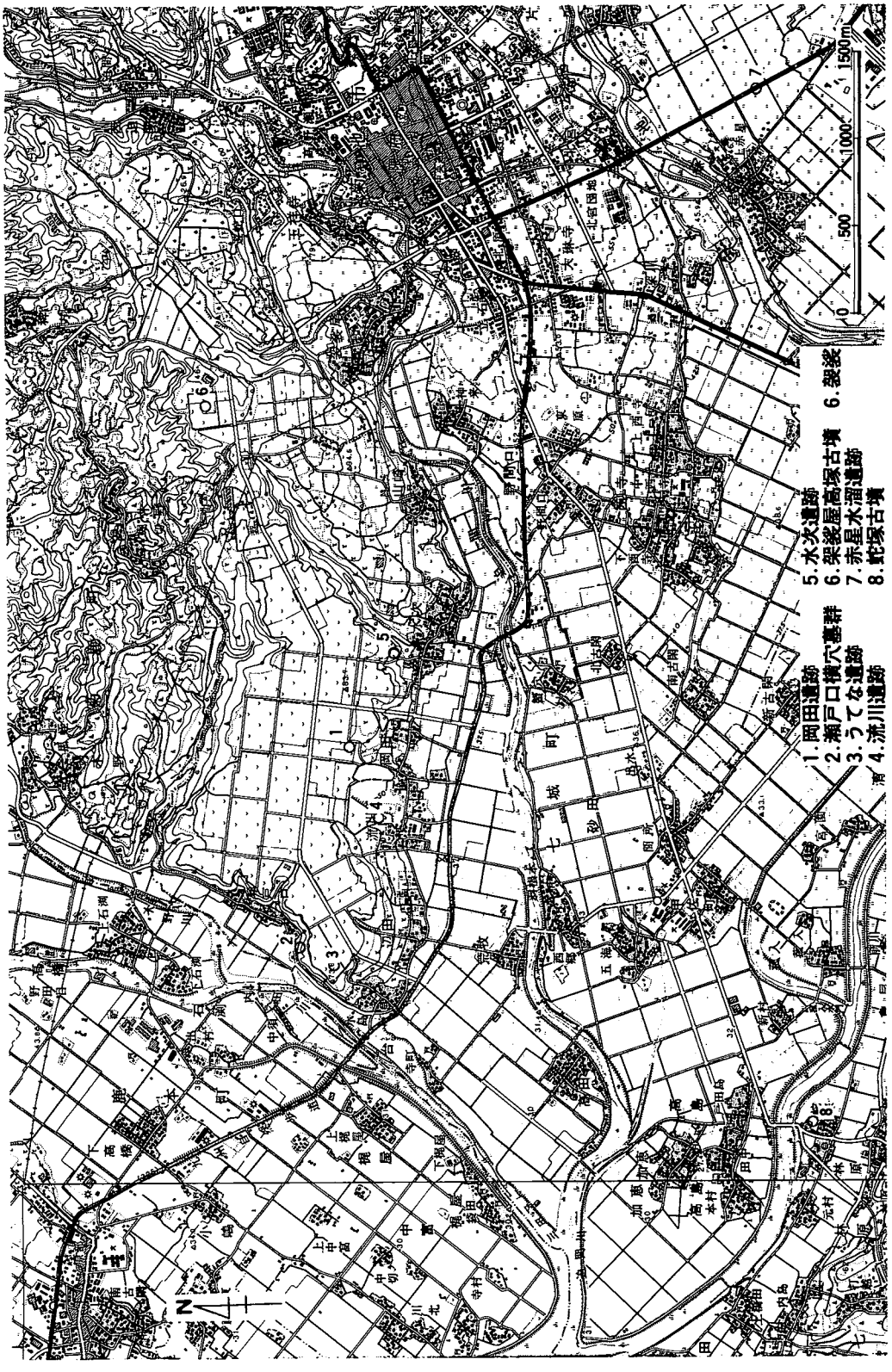
調査の組織

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	大塚正信（首席教育審議員・文化課課長）
	江崎　正（前文化課課長）
調査総括	島津義昭（主幹・文化課文化財調査第１係長）
	松本健郎（主幹・前文化課文化財調査第１係長）
調査主査	江本　直（文化課参事）
	中岡　昇（文化課文化財保護主事）
	丸山伸治（文化課文化財保護主事）
専門調査員	三島　格（肥後考古学会会長）
	甲元眞之（熊本大学文学部助教授）
調査指導及び協力者	小田富士雄（福岡大学文学部教授）武末純一（福岡大学文学部助教授）緒方勉（日本考古学協会員）山崎純男（福岡市教育庁文化課）水ノ江和同（福岡県教育庁文化課）徳永貞紹（佐賀県教育庁文化課）盛本　勲（沖縄県教育庁文化課）菊池高校考古学クラブ　七城町教育委員会　園木馨（熊本県文化財保護指導委員）
調査事務	熊本県教育庁文化課　隈　昭志（教育審議員）松崎厚生（課長補佐）木下英治（主幹・経理係長）高浜保子（参事）相馬治久（参事）
作業者〔発掘調査〕	村上新一　村上博明　前田広見　村上高子　牛島政子　中原実幸　池部民子　愛垣慶一　愛垣峰子　松岡トミ子　歌丸静代　横枕千春
〔整　　理〕	江島園子　水本寿美子　小山正子　塚本博子　塩田喜美子　吉田律子　竹村理佐　米倉五月　重永照代　勝田智子　河野智子　後藤ちづ子　大塚磯子　上村孝子　後藤直美　山元友子　宇野玲子

第２節　遺跡概観

岡田遺跡は熊本県菊池郡七城町大字岡田に位置している。ここ七城町は中央を菊池川本流が西流し、一帯は広い菊池平野を形成している。菊池川の中流域であり追間川、内田川、合志川の合流点にもあたっている。菊池川の上流域には菊池市隈府の市街地が形成され、下流域には鹿本郡鹿本町来民と山鹿市街がつづき、やがては玉名市街を経て有明海に注ぐことになる。

平野の北側は広い台地であり「うてな台地」と呼称されている。以前飛行場建設の候補地


1. 岡田遺跡
2. 瀬戸口横穴墓群
3. うてな遺跡
4. 流川遺跡
5. 水次遺跡
6. 架裟屋高塚古墳
7. 赤星水溜遺跡
8. 蛇塚古墳
0
500
1000
1500m

第１図　岡田遺跡位置図

にあげられたほどで、起伏の少ない平坦地が続いている。

この台地南縁に沿って山崎、水次、岡田、流川、辺田、台などの集落が営まれ、前（南側）に生産性の高い水田地、北側背後に大きな畑作地を持つという、大変に恵まれた農村地帯が形成されている。

恵まれた自然環境のなか、周辺に重要な遺跡も多い。北側にそびえる八方ケ岳（800m）の南麓には、古代の山城の鞠智城が著名であり、袈裟尾高塚、水次ハヤマ古墳、うてな城古墳などよく周知され、瀬戸口横穴の規模も大きい。最近の調査で、うてな遺跡には弥生時代の大規模の環濠集落の存在が明らかにされ、方形周溝墓群や古代の住居群の存在も大きい。水次集落の背後には、礎石を持つ十蓮寺廃寺跡や弥生前期から中期にかけての甕棺群も貴重である。

さて、岡田遺跡は岡田集落から北側台地の台地縁及び傾斜面に位置する遺跡である。斜面は山林で杉の植林と雑木林で、小規模の近代の墓地が設けられていた。台地縁での高さは75mを測り、集落との比高差は約25mである。

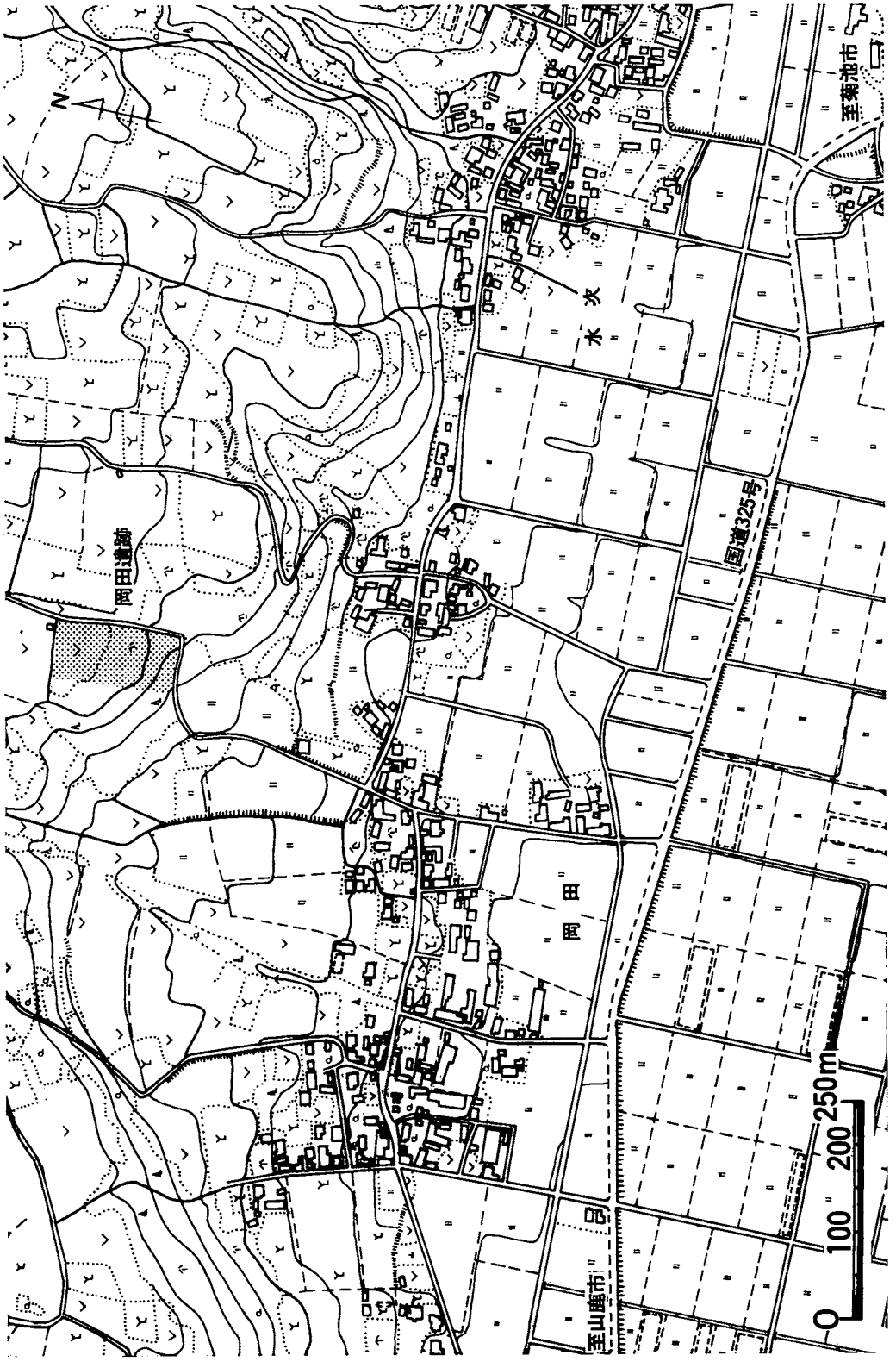
第3節　調査地について

岡田地区においては事前に実施した試掘調査によって、土師器片や須恵器片などの遺物を包蔵する場所が広い場所にわたって確認され、住居跡などの遺構が存在しているものと推定された。

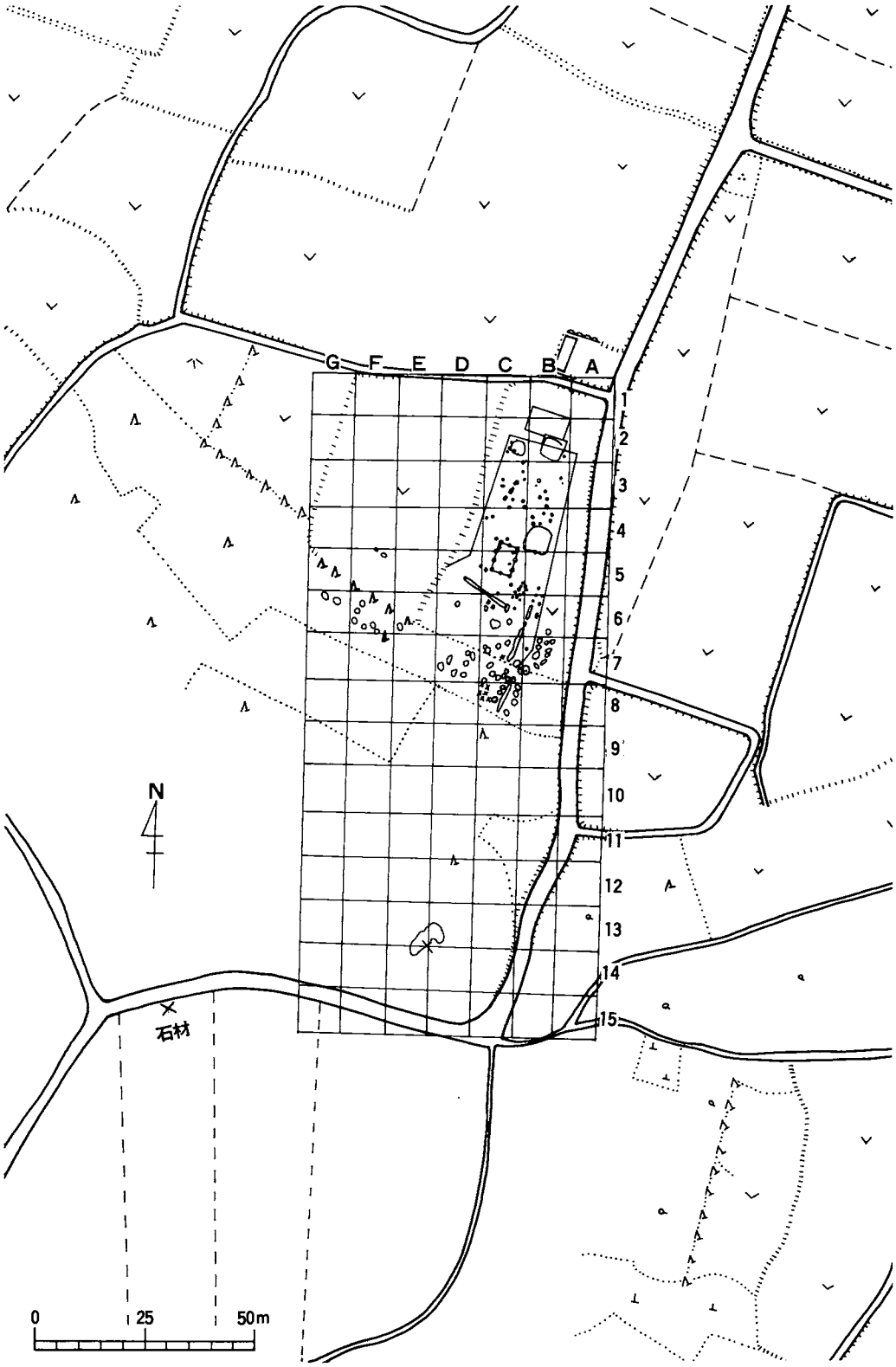
遺物が出土し発掘調査を必要とする範囲から、施工計画と照合作業を進め、盛土などで遺跡の破壊が免れる場所を除外していくと、調査の必要な場所はA地点約400m²、B地点約4,000m²がであることが確認された。

調査は面積の少ないA地点から開始し、全面の表土剝ぎや遺構検出作業を進めると、土師器片や須恵器片が僅かに出土する状況に止まり、遺構の検出はなく以後の調査は不要であることが明らかとなった。一方、B地区は全面の表土剝ぎ作業の結果、南側の急傾斜地には遺構は認められなかったものの、北側の平坦地はほぼ全面にわたって、それに南端にも弥生時代の甕棺が顔をのぞかせている状況であった。経線を磁北に合わせ、遺跡全体をおおってグリッドの設定を行って調査を進めた。経線東から西方向に向かってA～K、緯線は北から南方向に向かって1～29までで全体を網羅することができている。

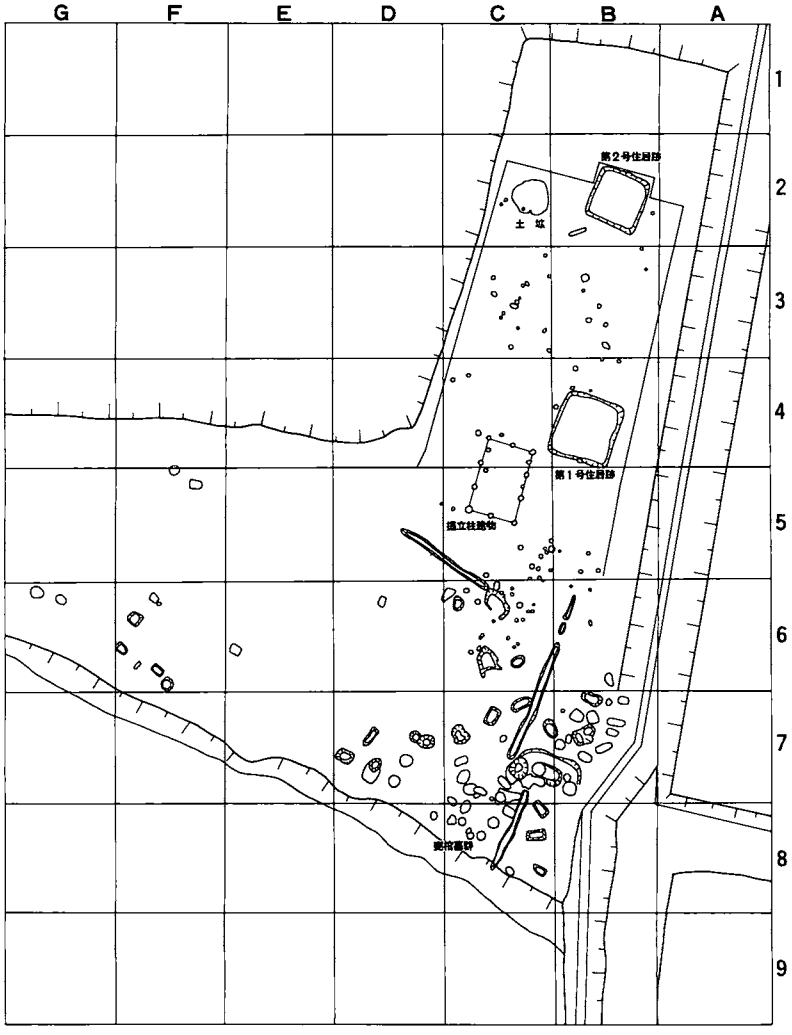
（江本）

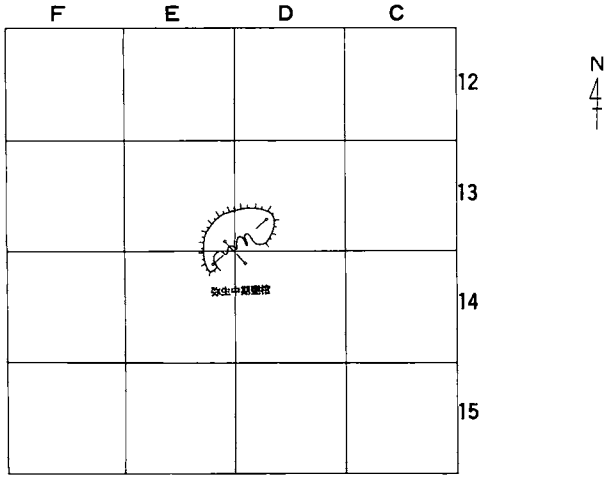


第２図　岡田遺跡地形図



第３図　岡田遺跡全体図





第４図　調査区全体遺構図

第Ⅱ章　調査結果

第１節　縄文時代包含層の調査

(1)出土状況

今回の調査においては遺構検出面までは全面にわたる表土剝ぎ作業を実施しており、表土や遺構の検出面から弥生時代や古墳時代の遺構や遺物に混じって縄文時代早期や前期の遺物が存在することを確認できた。検出された遺構以外の場所では縄文時代の遺物包含層の調査が可能であると判断できたため、調査グリッド及び残存する包含層に従い可能な限りの調査を実施することとした。付近一帯は縄文時代の火山灰の堆積は薄く、縄文時代の包含状況を層位的に明確に把握できるような状況には恵まれてはいないが、表土を除去した遺構検出面から原則的に５㎝づつ掘り下げていく方法をとることとした。

この表土を除去した遺構検出面が一般にいうアカホヤ火山灰を主調とした黄褐色土層であり、この下に黒褐色粘質土があるのを原則的とするが、ここでは両者を重ねても10㎝に満たない所や起伏や削平などが多くもあり層位的に恵まれた状況ではなかった。面的にはＢ・Ｃ－２～６グリッド及びＤ・Ｅ－５・６グリッドでの調査を行い、それぞれの遺物の出土状況は第５～23図に示すとおりである。これらの出土状況図に示されるようにＣ・Ｄ－５・６グリッドに遺物の集中する所が見られ、この地域を中心とした生活空間が想定される。

(2)出土土器

採集遺物と出土遺物を加えるた土器片の数は細片を含め500点を越えている。その中で実測や観察が可能であった166点を選びⅠ類からⅣ類に分類して報告していくことにしたい。

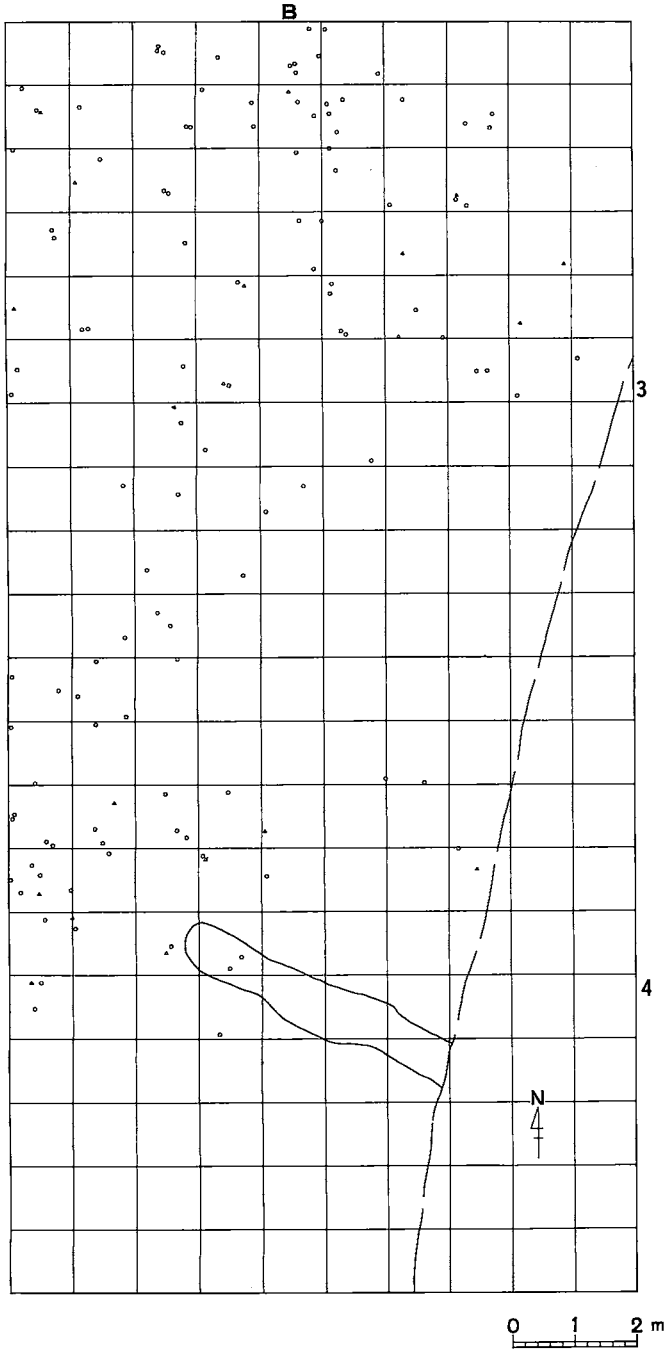
Ⅰ類土器(第24図)

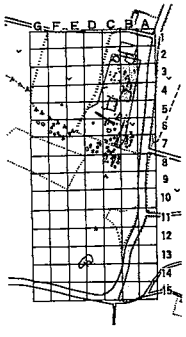
山形押型文が施文された土器をⅠ類土器とした。６点の土器片は口縁部片４点と胴部片２点である。いずれにも山形押型文が施文され、口縁部は両面に行われている。器形は口縁部がかなり外反することから胴部の膨らむ深鉢かと思われ押型文を施した手向山式土器と見ることができよう。

Ⅱ類土器(第25、26図)

(A)～(E)類に細分できよう。

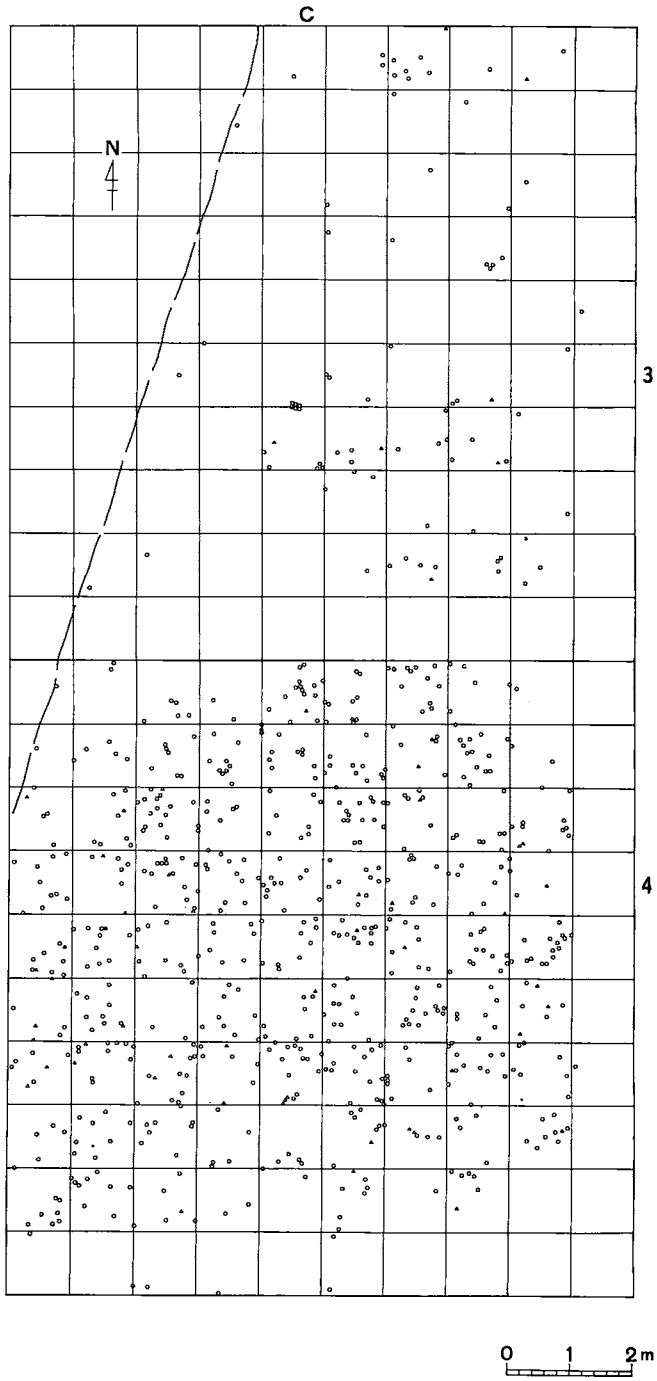
(A)類は内面に条痕文が明確に残されることを大きな特徴とするものである。土器片２点を取り上げているが、双方とも器形は深鉢である。１は内外面に条痕文があり口唇部に刺突文、

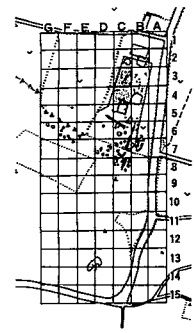




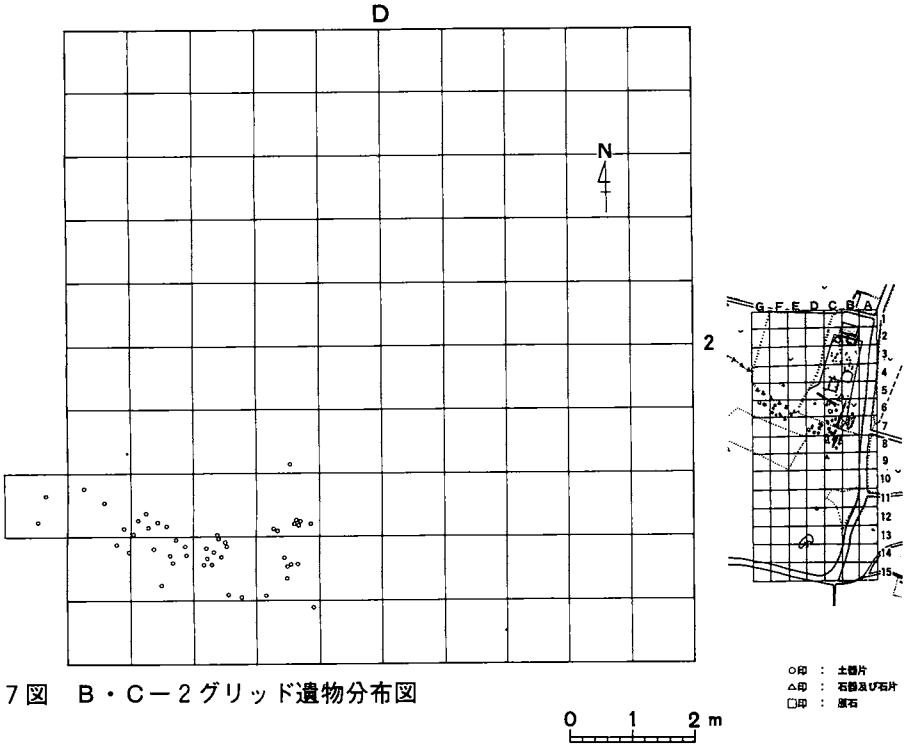
○印　土器片
△印　石器，剝片
□印　石核，原石

第５図　Ｂ－３・４グリッド遺物分布図

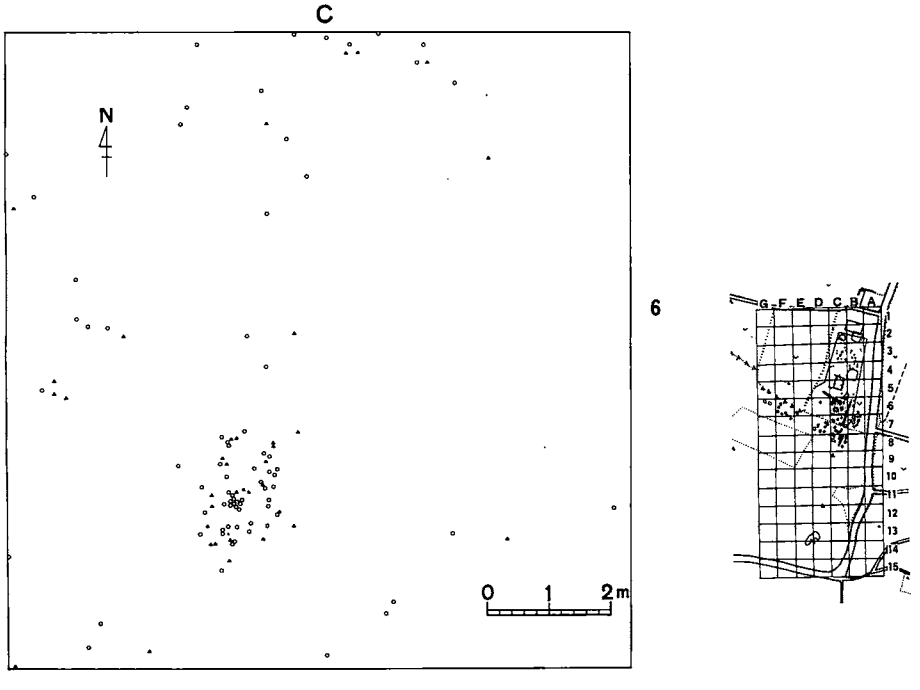




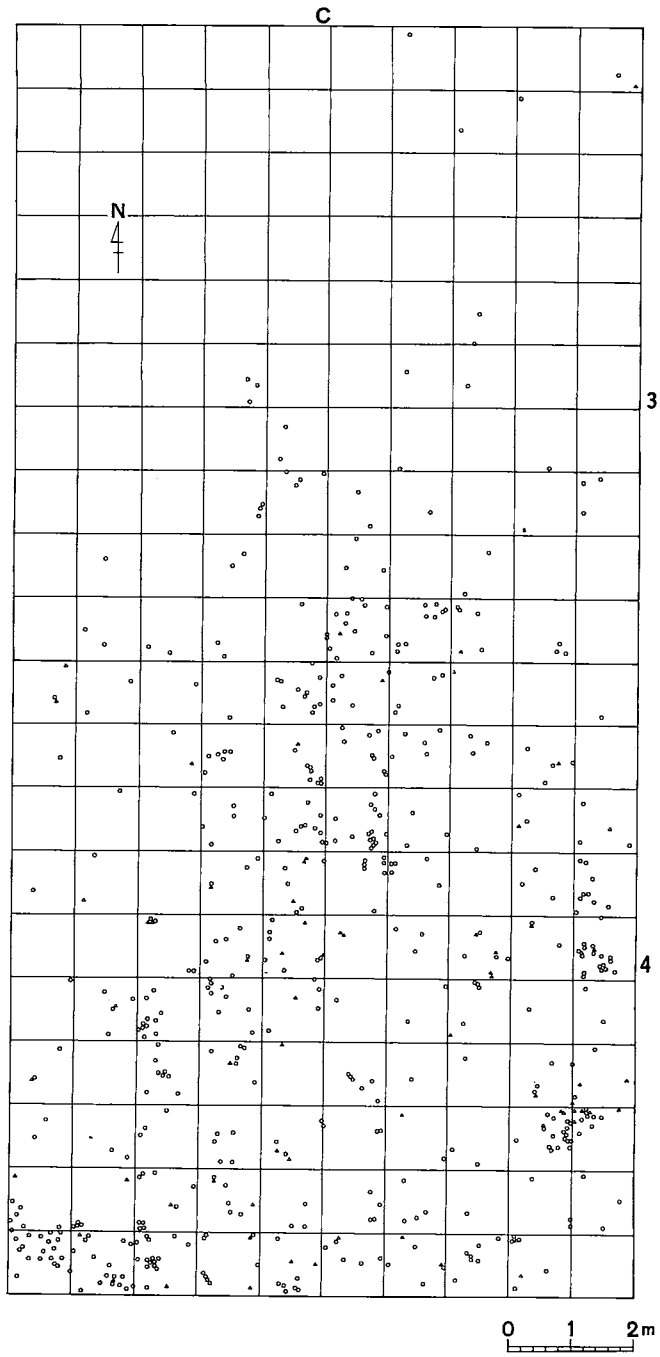
第６図　Ｃ－３・４グリッド(上層)遺物分布図

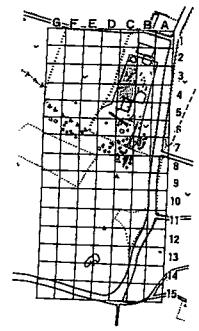


第７図　Ｂ・Ｃ－２グリッド遺物分布図

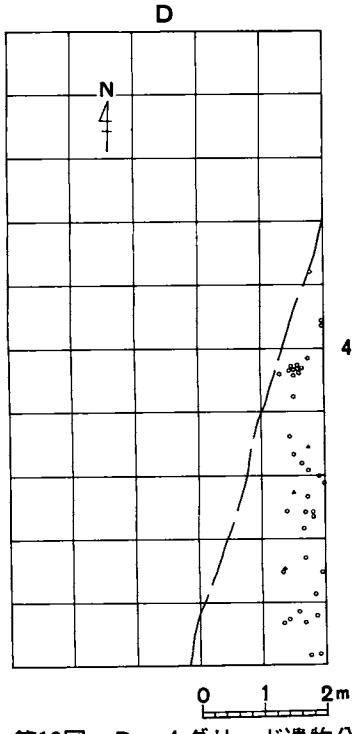


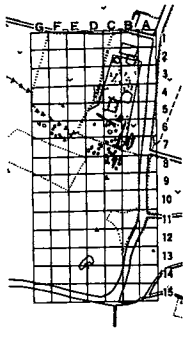
第８図　Ｃ－４グリッド遺物分布図



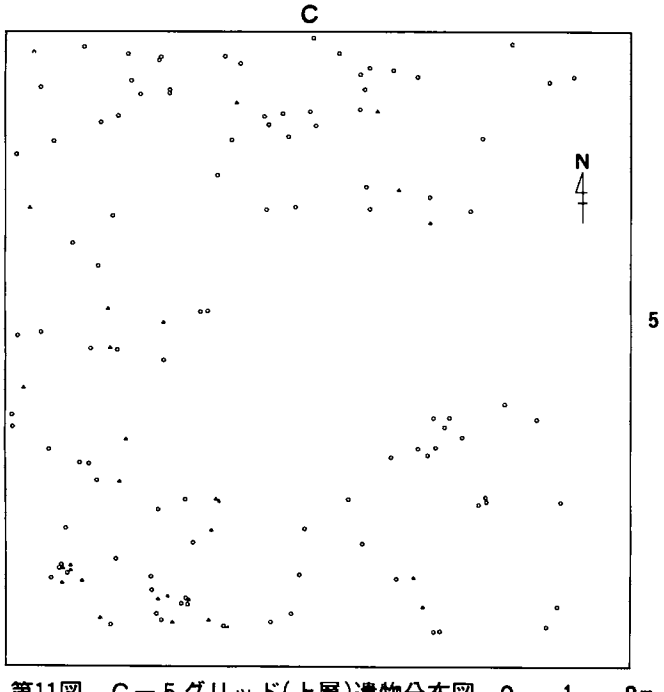


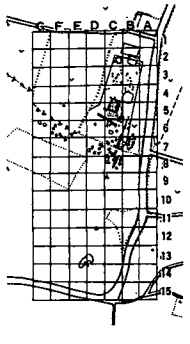
第９図　Ｃ－３・４グリッド(下層)遺物分布図



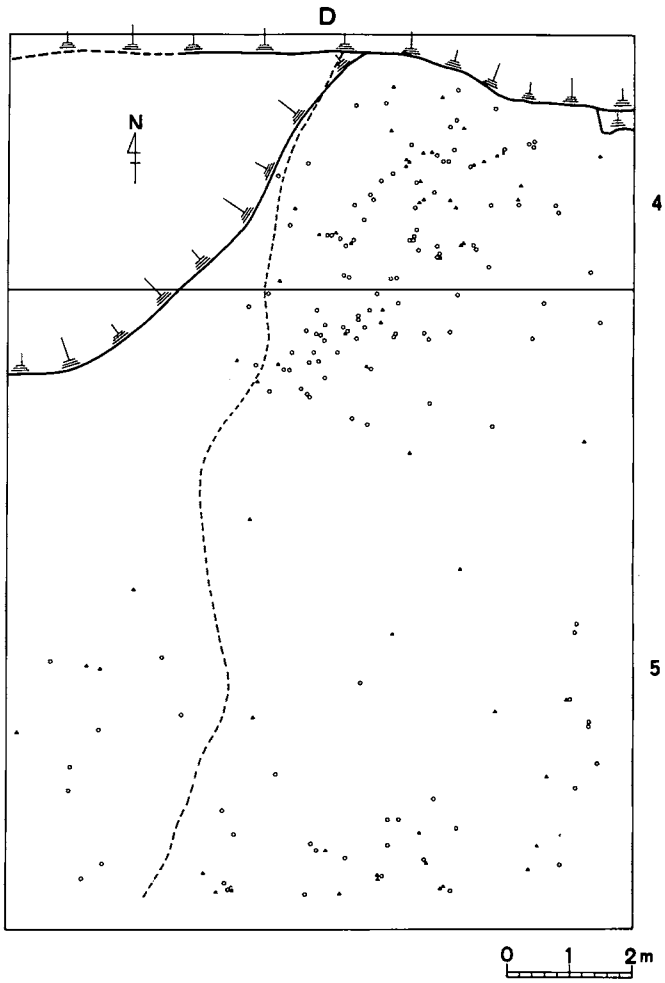


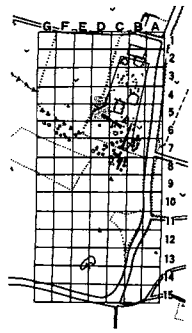
第10図　D－4グリッド遺物分布図



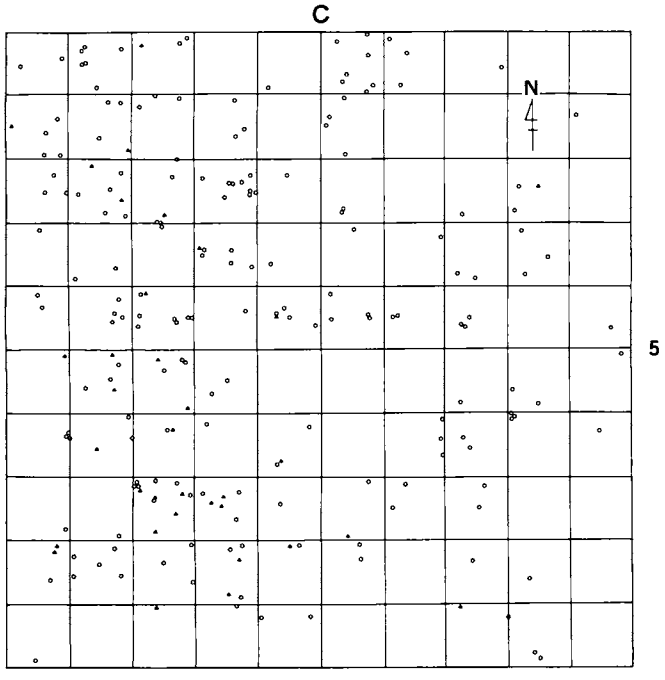


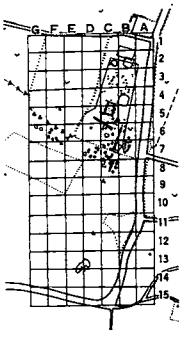
第11図　C－5グリッド(上層)遺物分布図



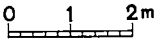


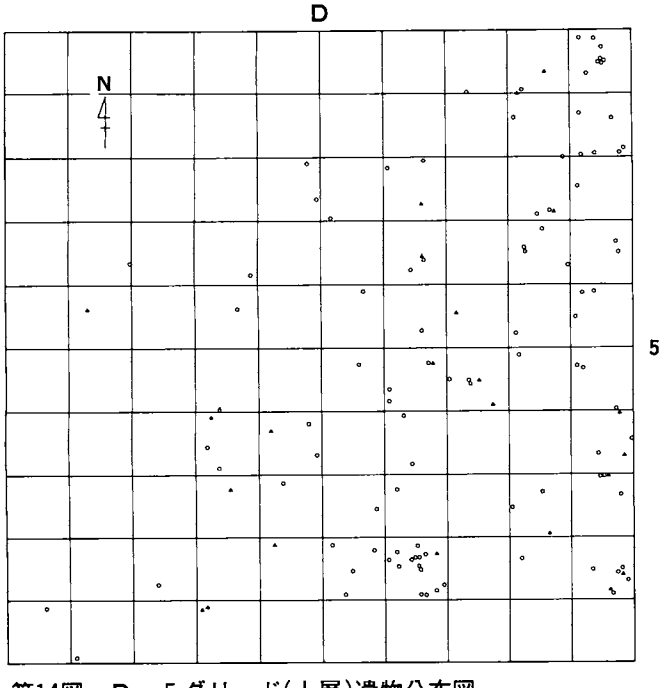
第12図　D－4・5グリッド遺物分布図

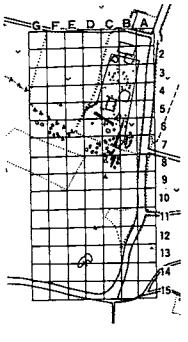




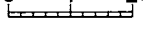
第13図　C－5グリッド(中層)遺物分布図

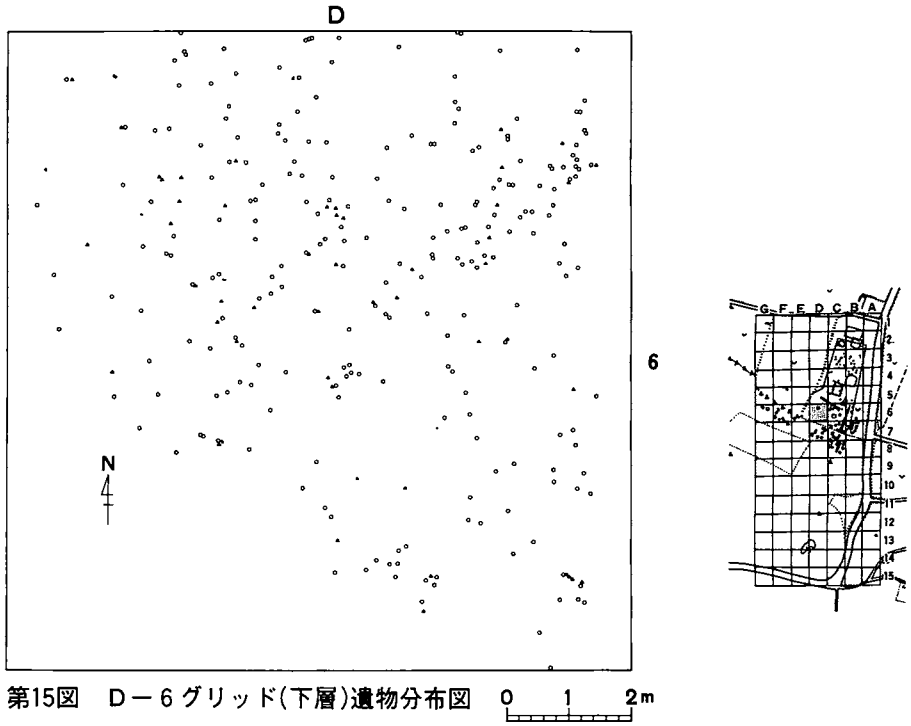




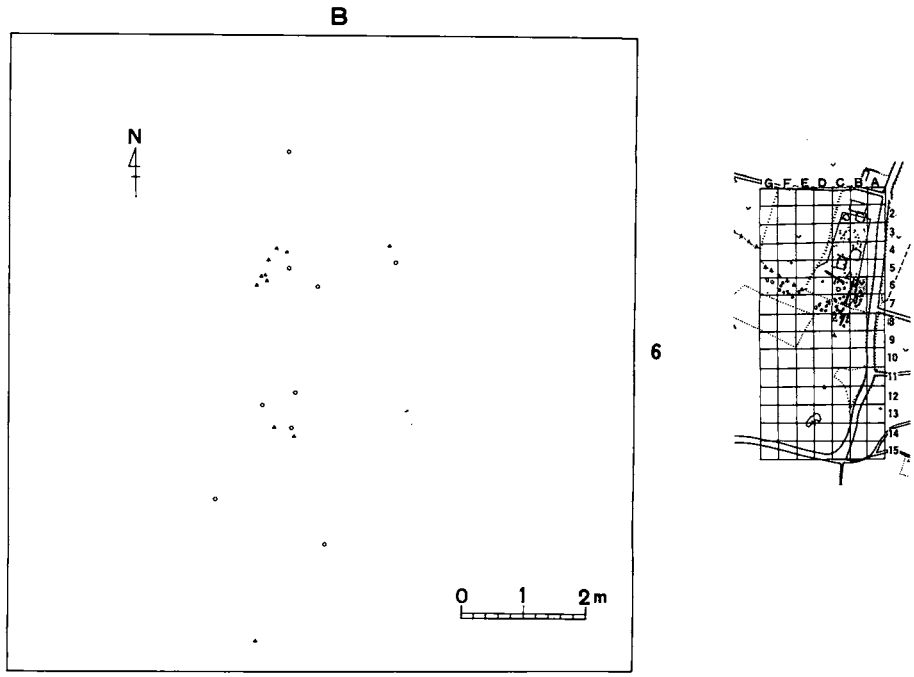


第14図　D－5グリッド(上層)遺物分布図

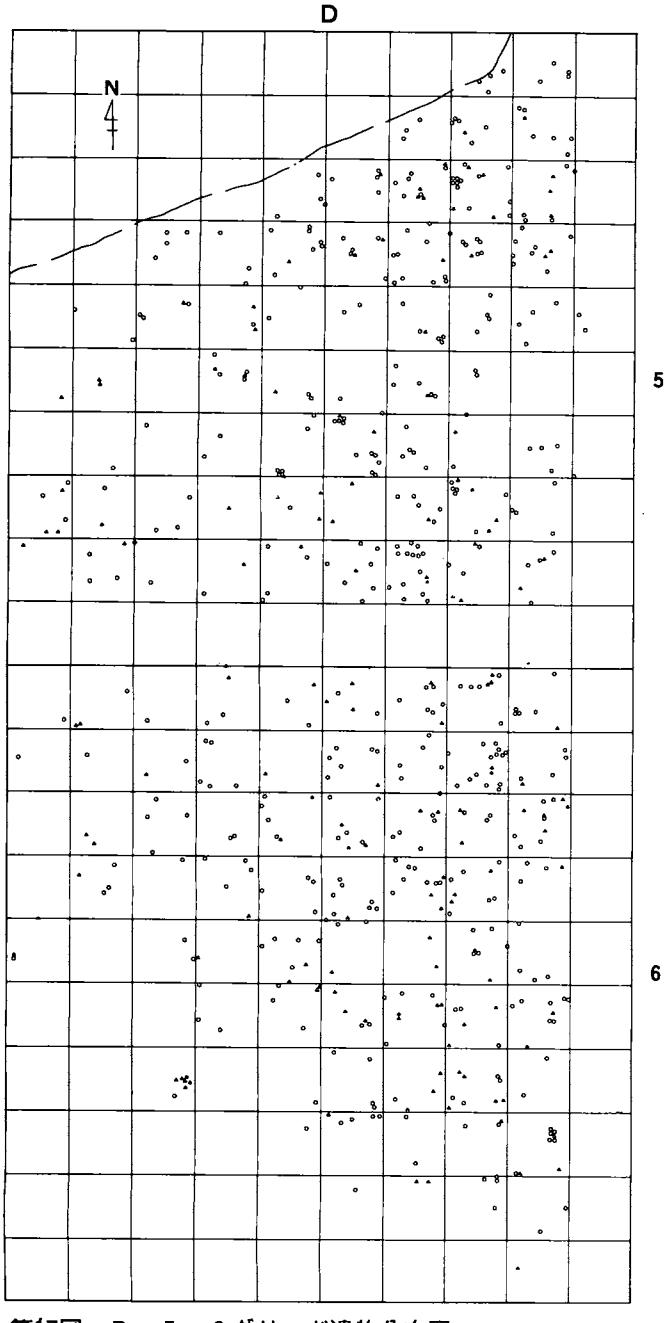


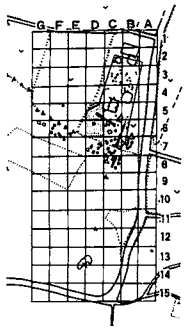


第15図　D－6グリッド(下層)遺物分布図

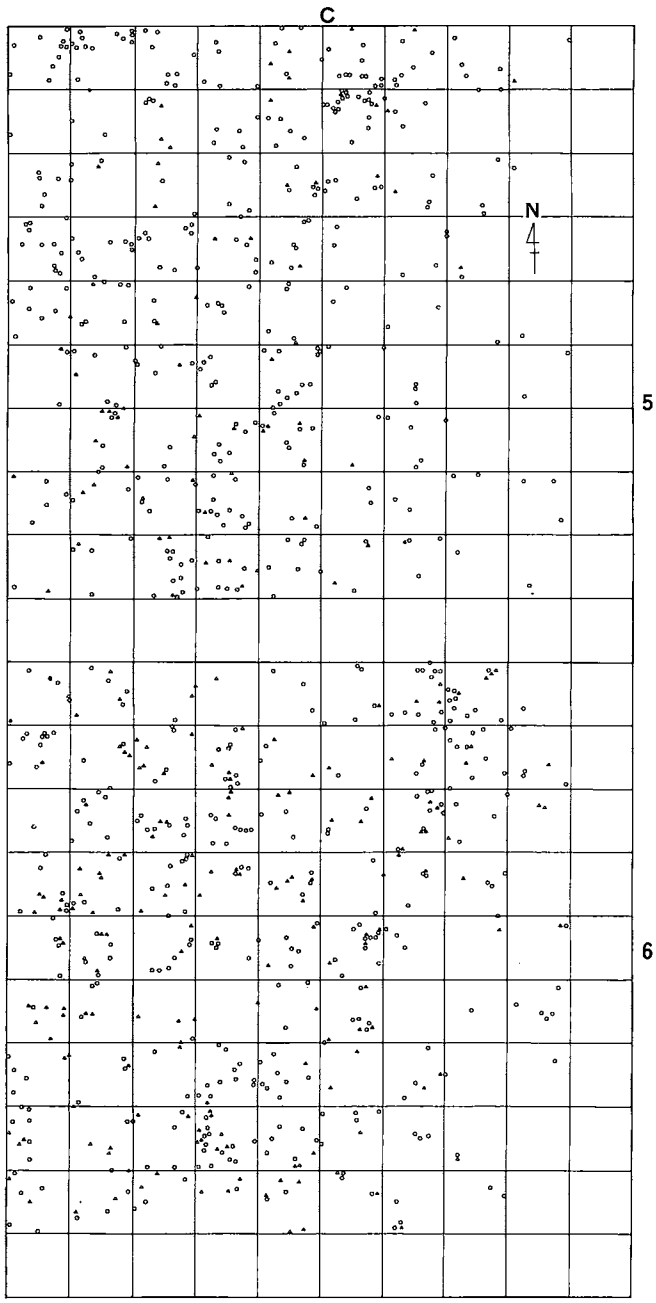


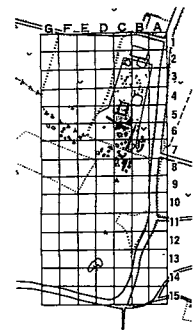
第16図　B－6グリッド遺物分布図





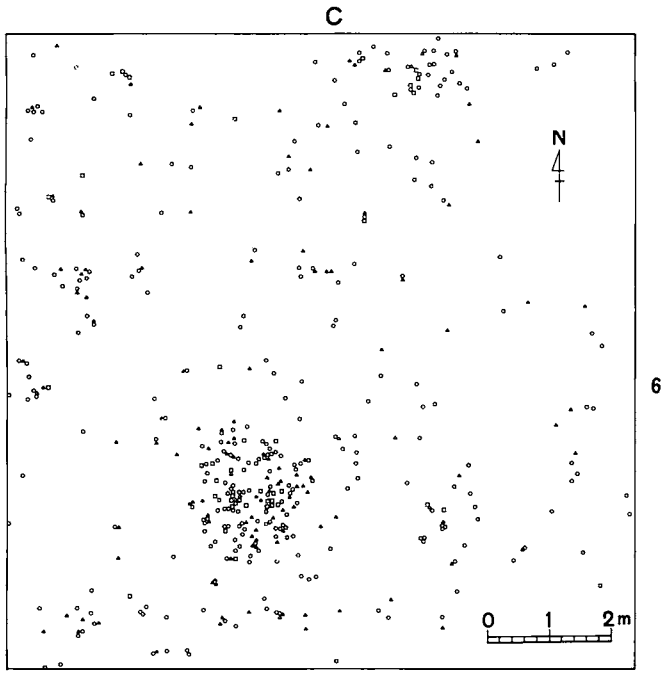
第17図　D－5・6グリッド遺物分布図　0　1　2m

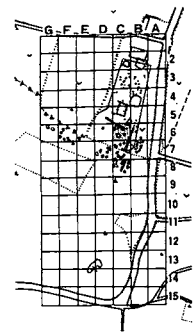




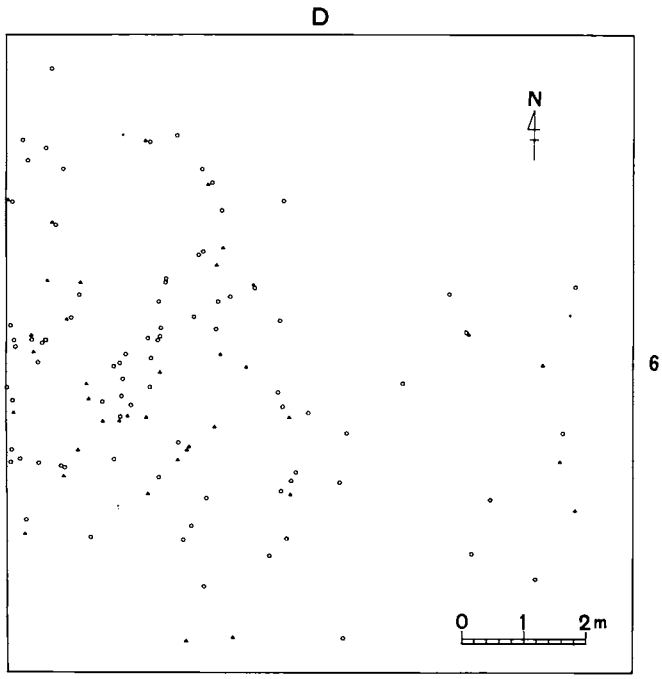
第18図　C－5・6グリッド(下層)遺物分布図

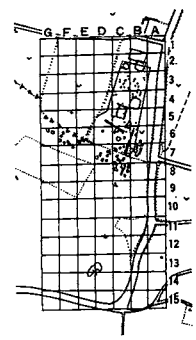
0　1　2m



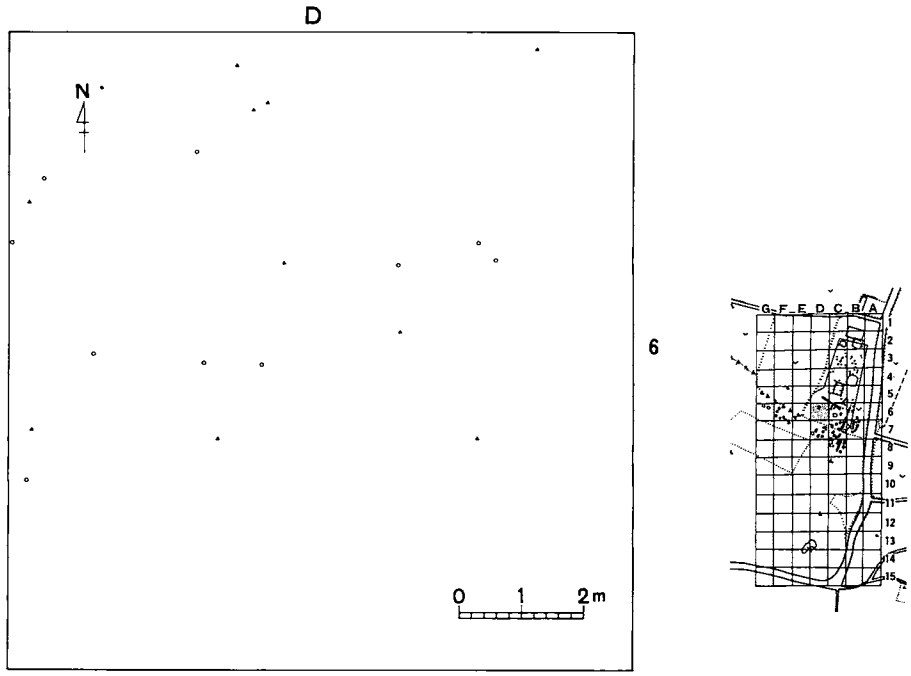


第19図　C－6グリッド遺物分布図

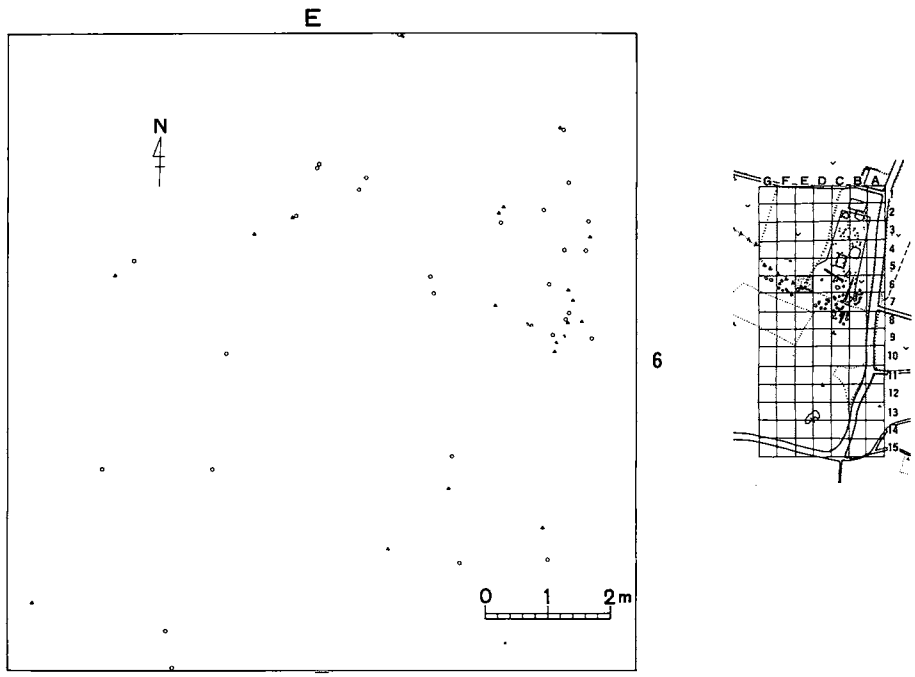




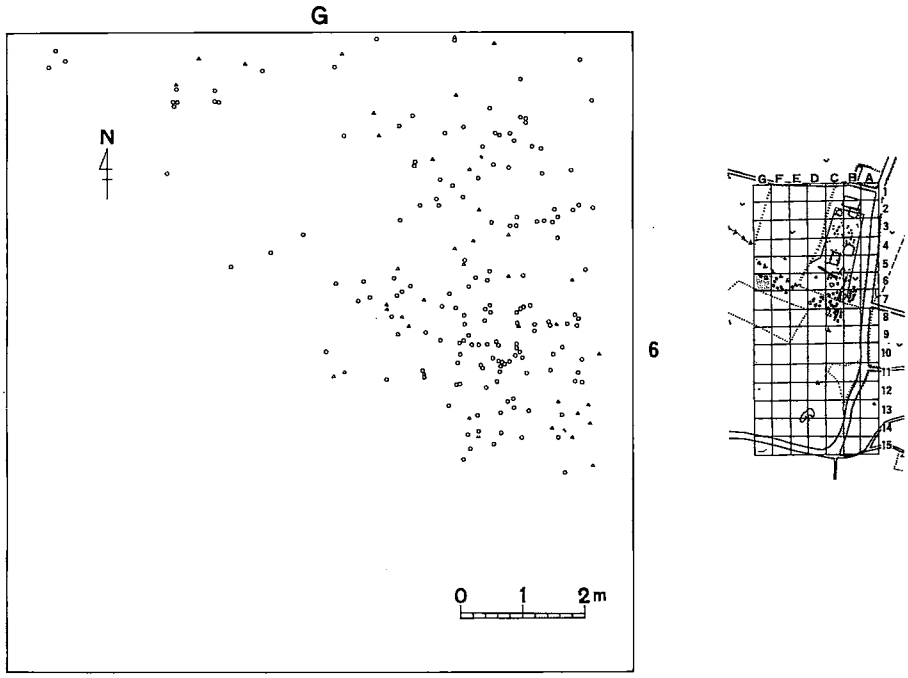
第20図　D－6グリッド(中層)遺物分布図



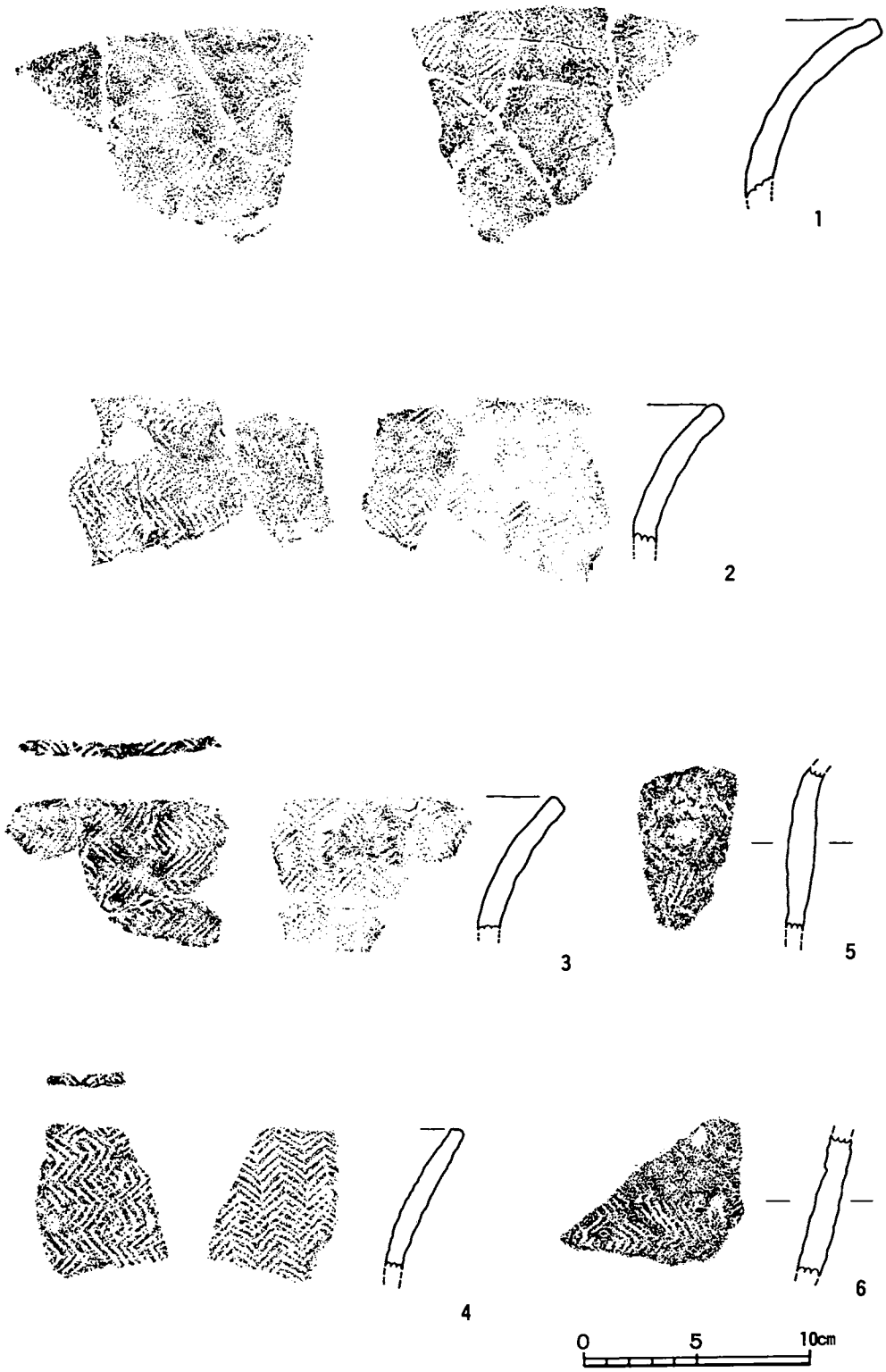
第21図　D－6グリッド(下層)遺物分布図



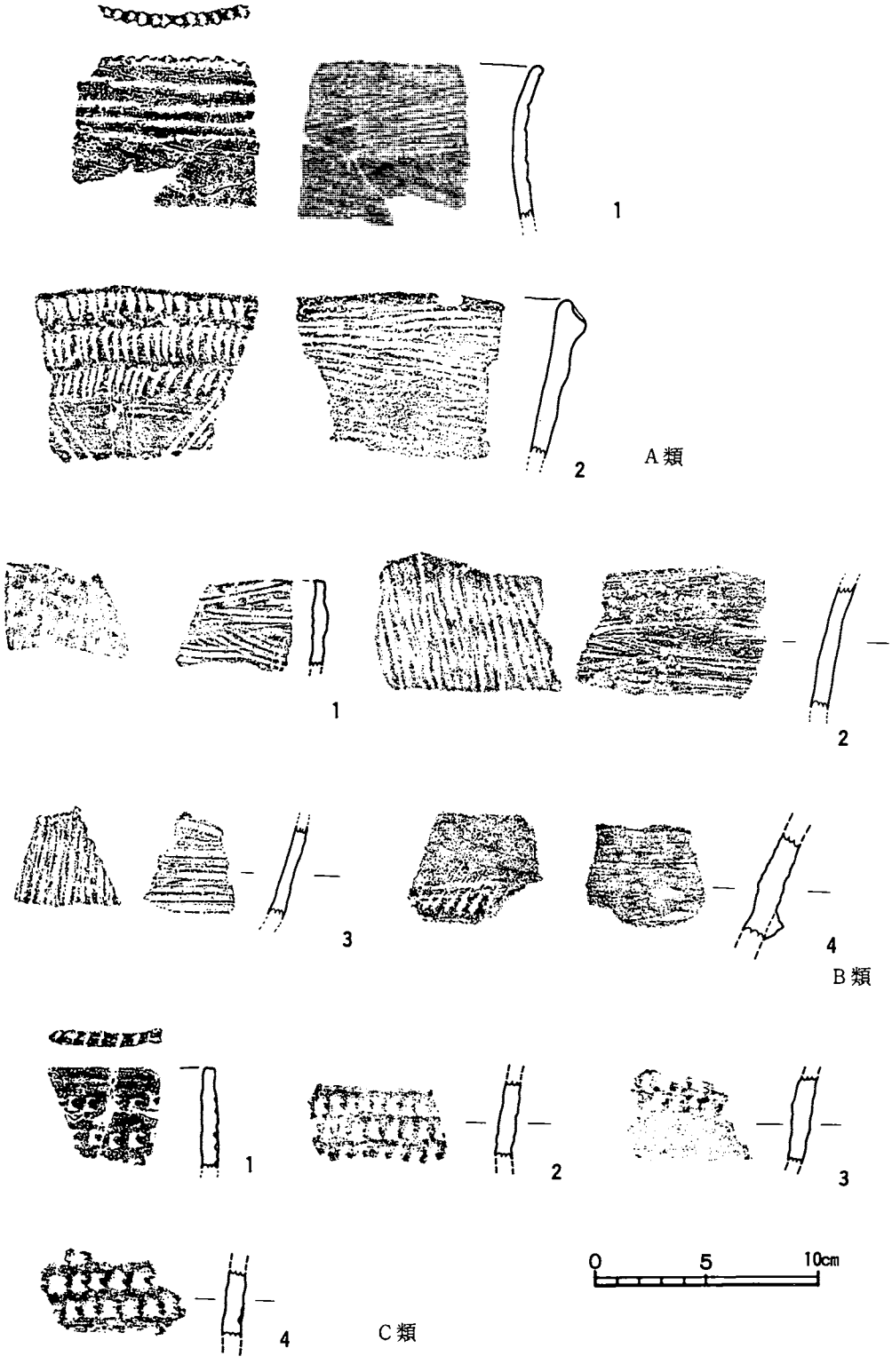
第22図　E－6グリッド遺物分布図



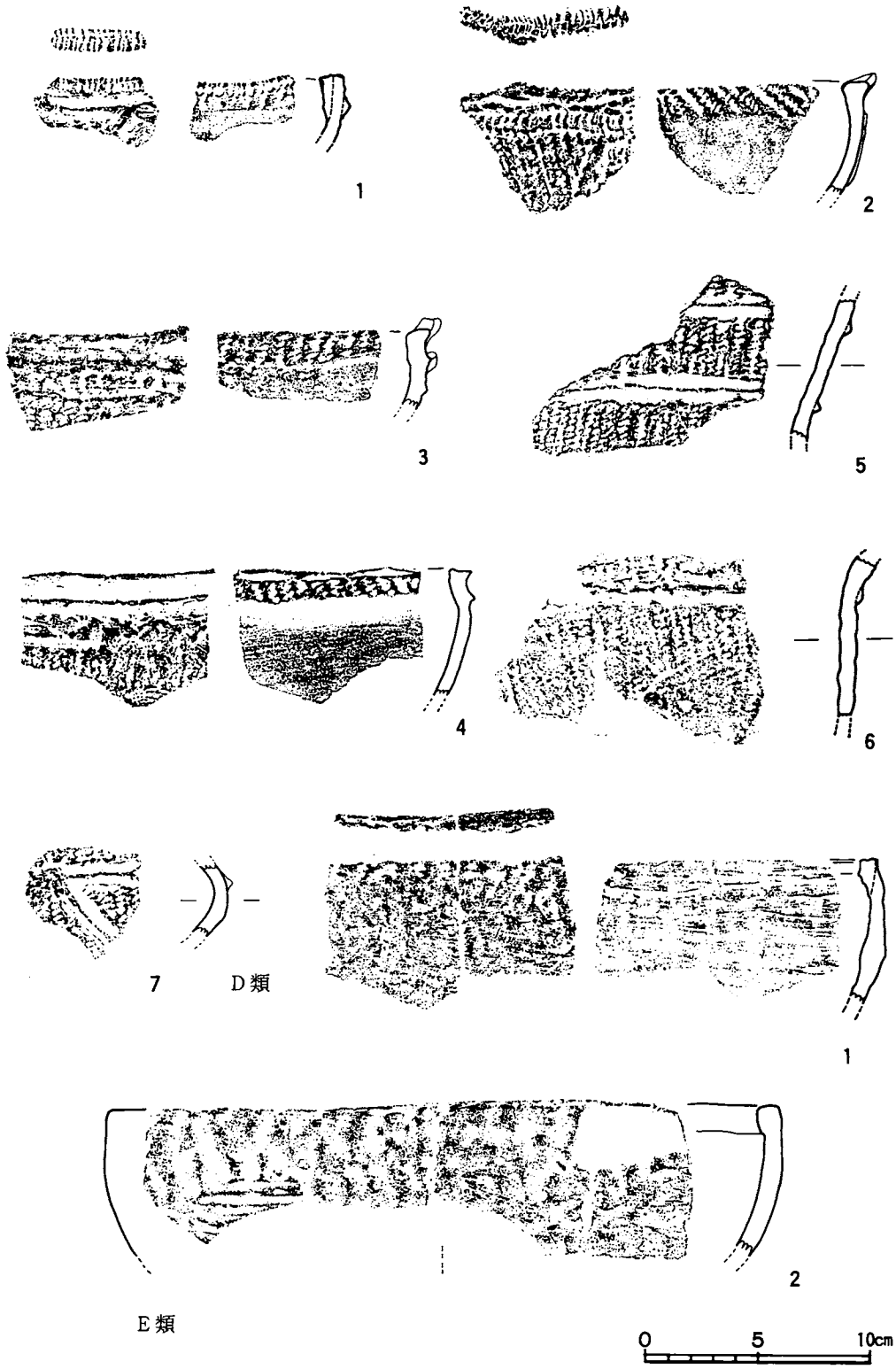
第23図　G－6グリッド遺物分布図



第24図　Ⅰ類土器実測図（１）



第25図　Ⅱ類土器実測図(１)



第26図　Ⅱ類土器実測図(２)

口縁部に二枚貝の腹縁を連続して押圧させた文様で4条の沈線文のように見える。2は口唇部及び口縁部に太形爪形文を施し、斜行する細い沈線文も確認ができる。

(B)類は内外面に条痕文が見られる土器片である。いづれも細片であり同様の特色を有する轟式土器との関係を明らかにすることができない。内面に条痕を施し、器面には突帯を巡らし刻目文を加えたものがあり相違点を認めることもできる。

(C)類は刺突文を施す土器である。4点の土器片は同一土器の可能性があるが、口縁部及び胴部片で凹文を横に連続させた、文様がみられる。口唇部にも細かい施文を施している。器面はナデにより丁寧に仕上げられているが内面には条痕文の上にナデ調整した痕跡を確認できるものがある。

(D)類は縄文地に突帯文を巡らす特色がある。突帯文は口縁部や頸部に施されているが、複数条になったり、斜行するものがある。口縁部に突出するように形成されたものも見られる。キャリパー状口縁で、波状口縁があり、内面にも縄文を施す。

(E)類はキャリパー状口縁であるが無文である。口縁部の内面は有段状になり、器面は指を連続して押圧させた痕跡がみられる。

Ⅲ類土器(第27～46図)

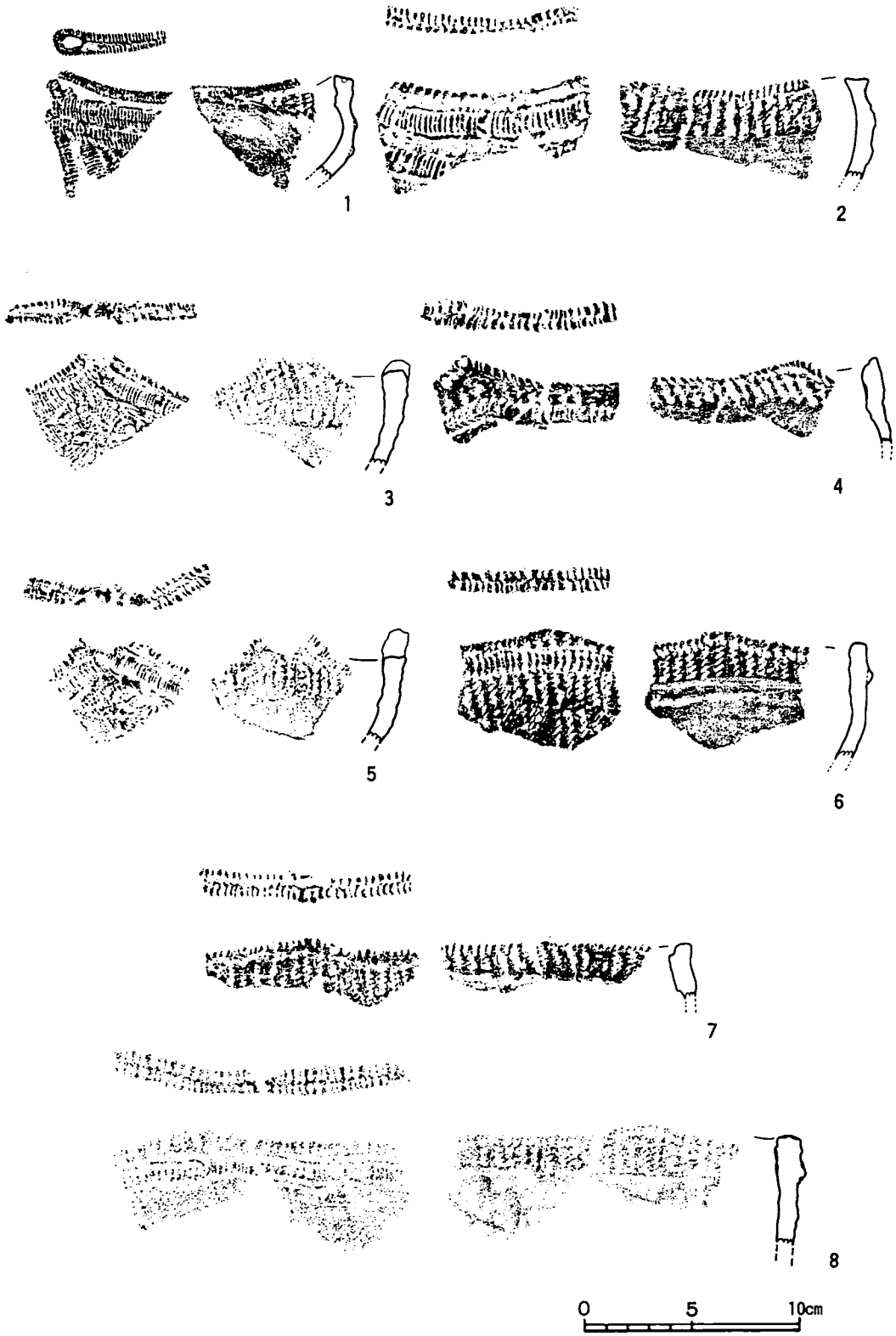
(A)～(J)類に分けて報告していきたい。

(A)類の器形は深鉢でキャリパー状口縁をなし、口縁部は波状するものとしないものとがある。波状口縁の個数や角度は種々みられるが、角度の鋭い波状口縁もあり、これらの土器は爪形文などの施文が非常に綿密になっている。また、波状口縁の先端部が二股になったり、孔が設けられたものもある。口縁部内面は段をなし縄文の施文を施している。口唇部には綿密な刻目文を施したものが多い。口縁部や頸部は縄文の地紋の上に突帯文を巡らし、さらに爪形文を重ねたものが多く見られる。頸部には突帯をせず直接に爪形文を巡らしたものもみることができる。

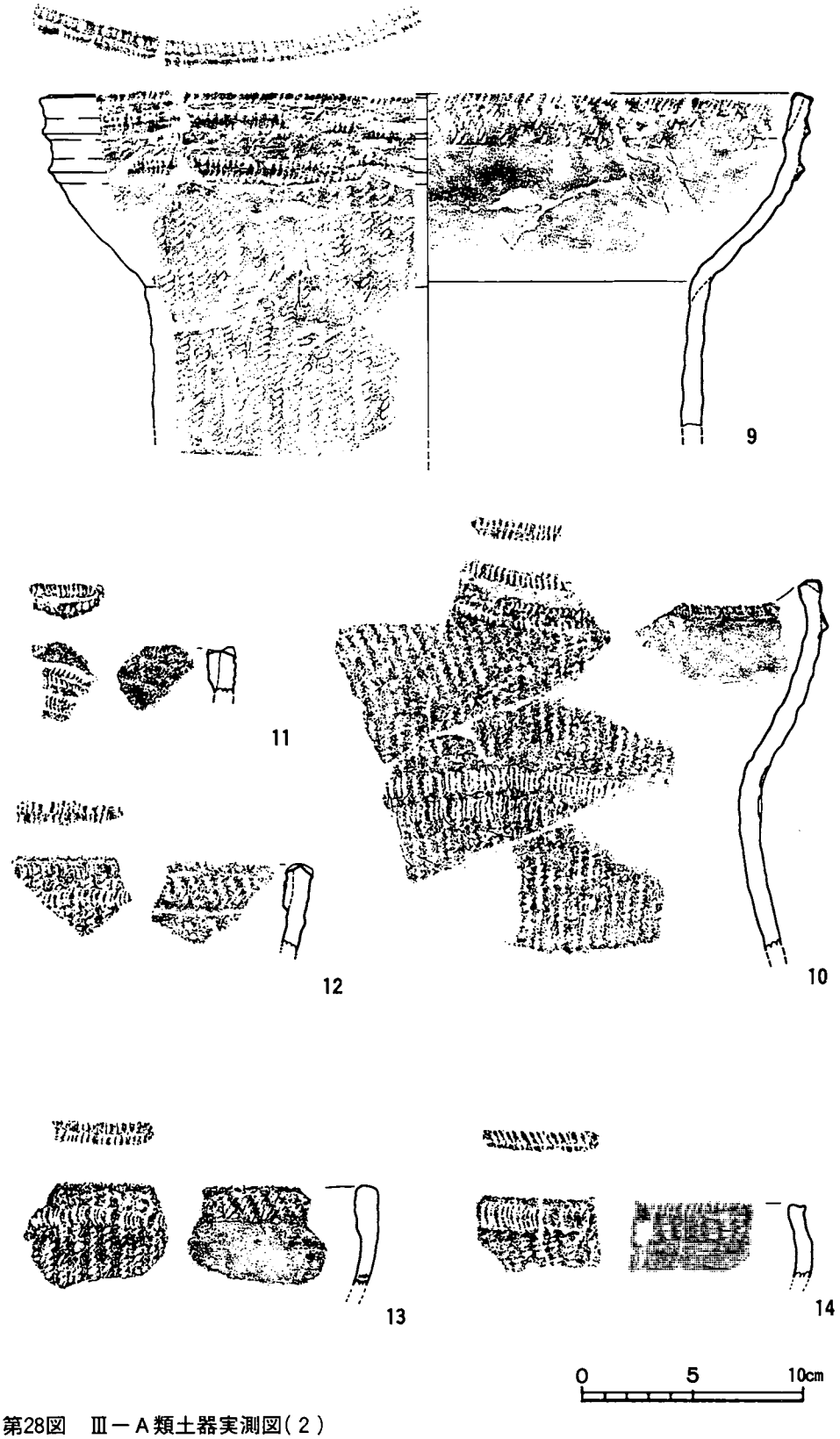
(B)類は沈線文が施文されている土器群である。沈線文は殆どが口縁部に見られる。原則的には平行する半截竹管のような施文具でひかれた細い2条の沈線を一組として構成されている。直線的に横走するのが基本的であるが一部には斜行したり、波状口縁に平行して弧を描くものも認められる。また、ひかれた2条の沈線の間に爪形文を重ねるものがみられる。

(C)類は器面に縄文を施しただけで、突帯文や爪形文、沈線文、貝殻圧痕文などの文様が重ねられていない土器群である。口縁部の内面は有段となり縄文が施されている。いずれもキャリパー状口縁をなす深鉢であり、器形の大きさや、キャリパー状口縁の膨らみは種々である。膨らみが少なく外反する口縁状になすものも認められる。

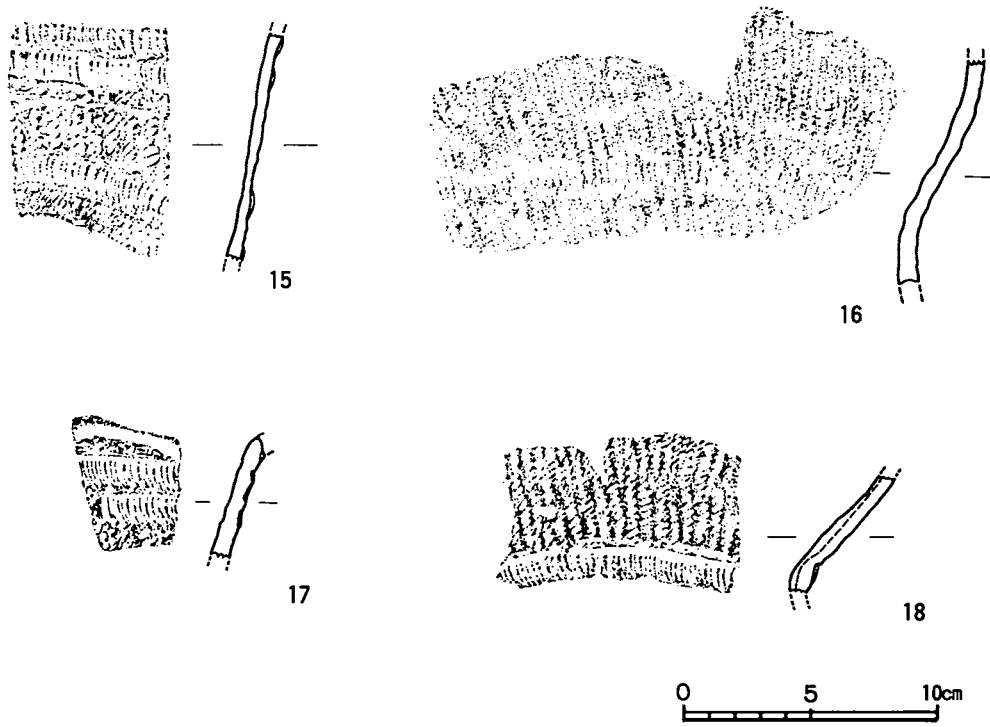
(D)類は(C)類と同じく器面に縄文を施しただけで、突帯文や爪形文、沈線文、貝殻圧痕文な



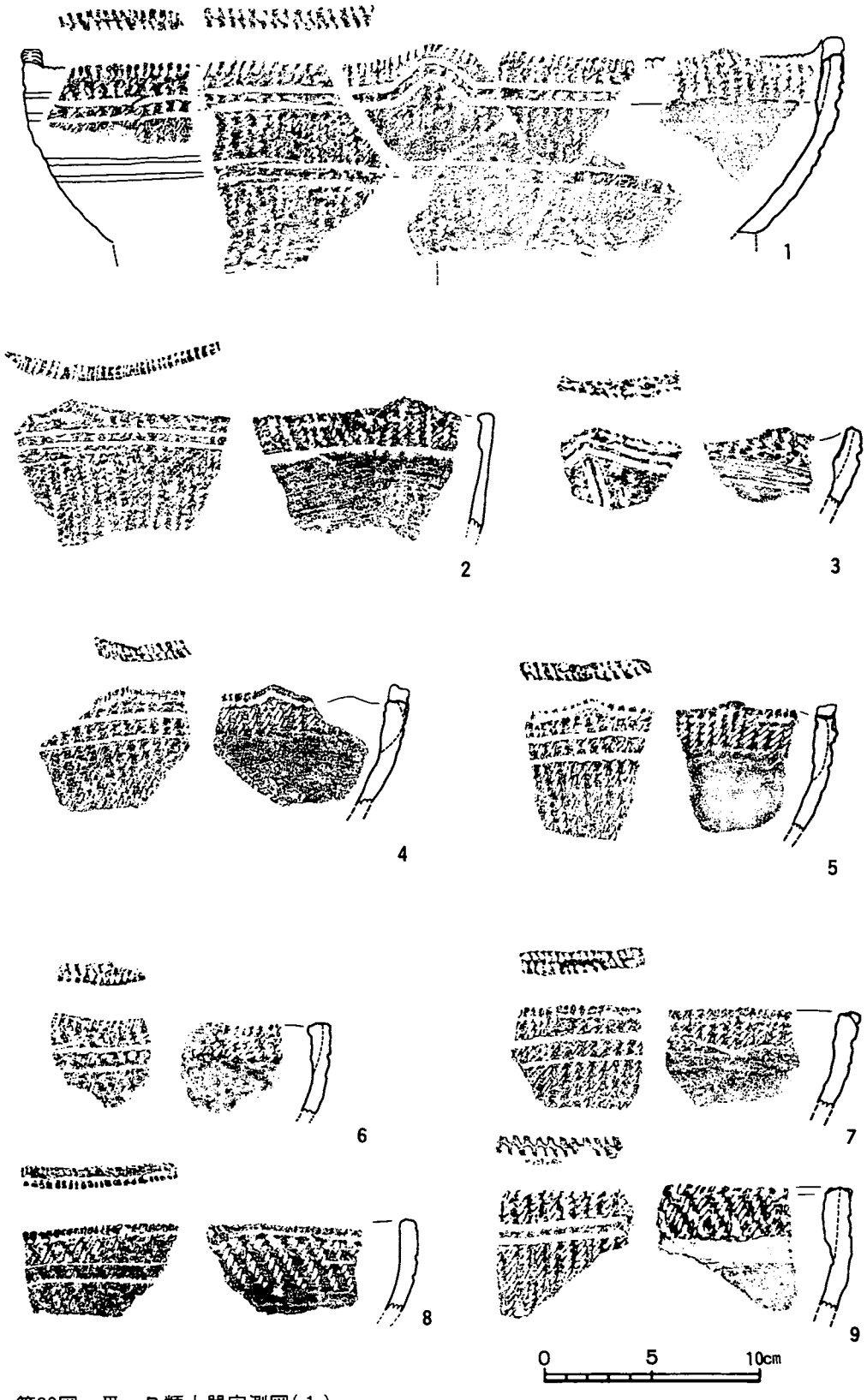
第27図　Ⅲ－Ａ類土器実測図（１）



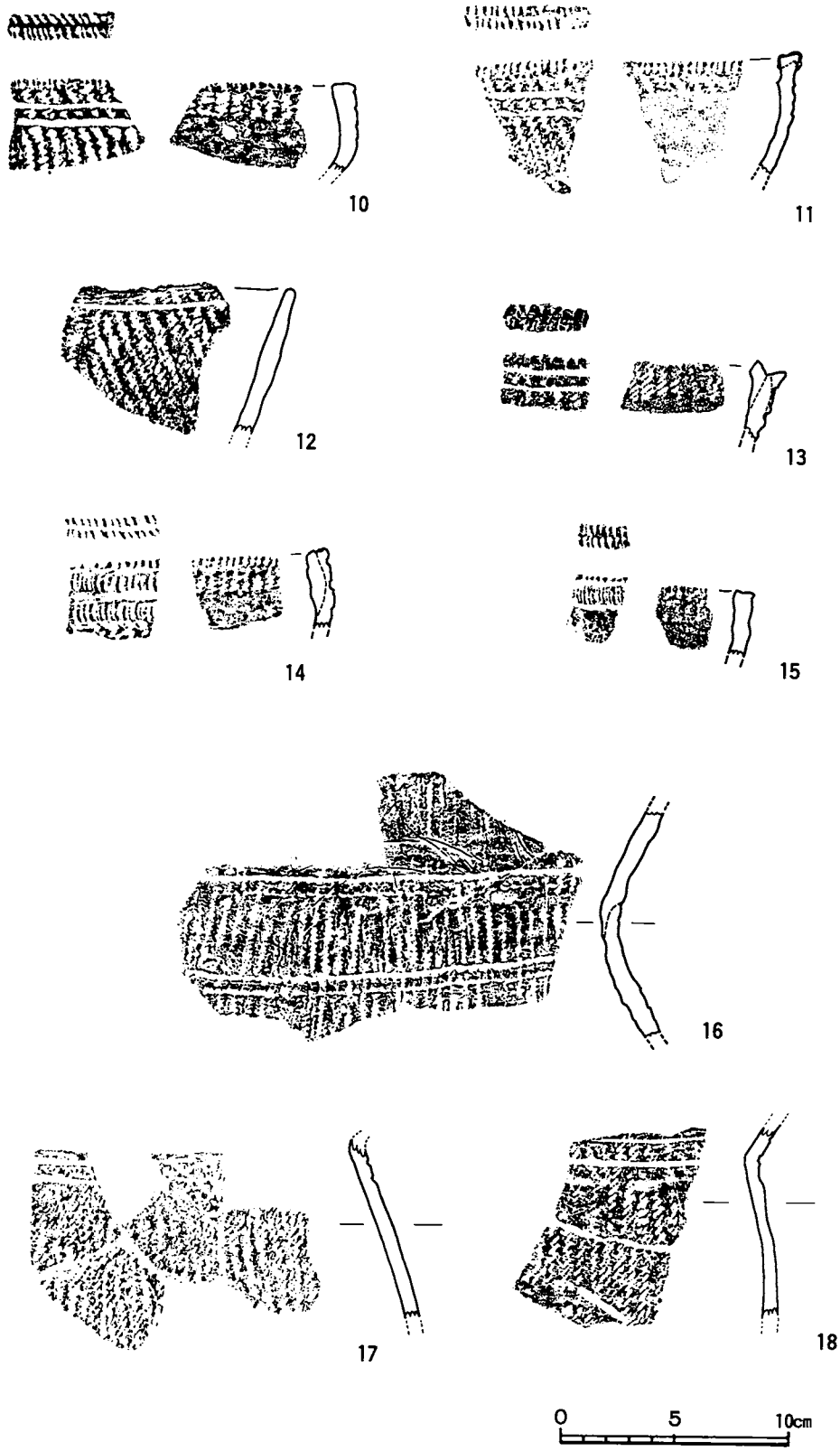
第28図　Ⅲ－Ａ類土器実測図（２）



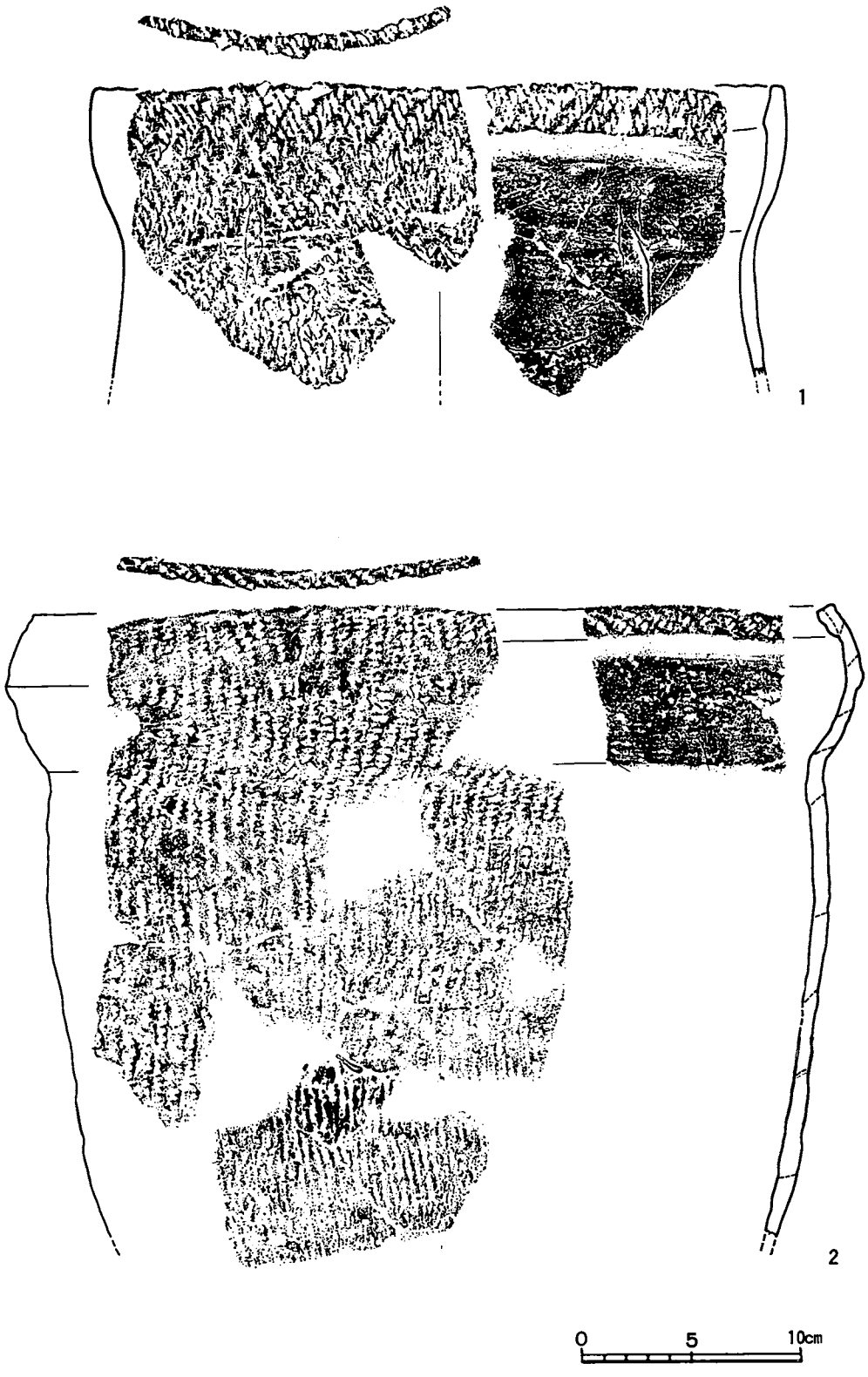
第29図　Ⅲ－Ａ類土器実測図（３）



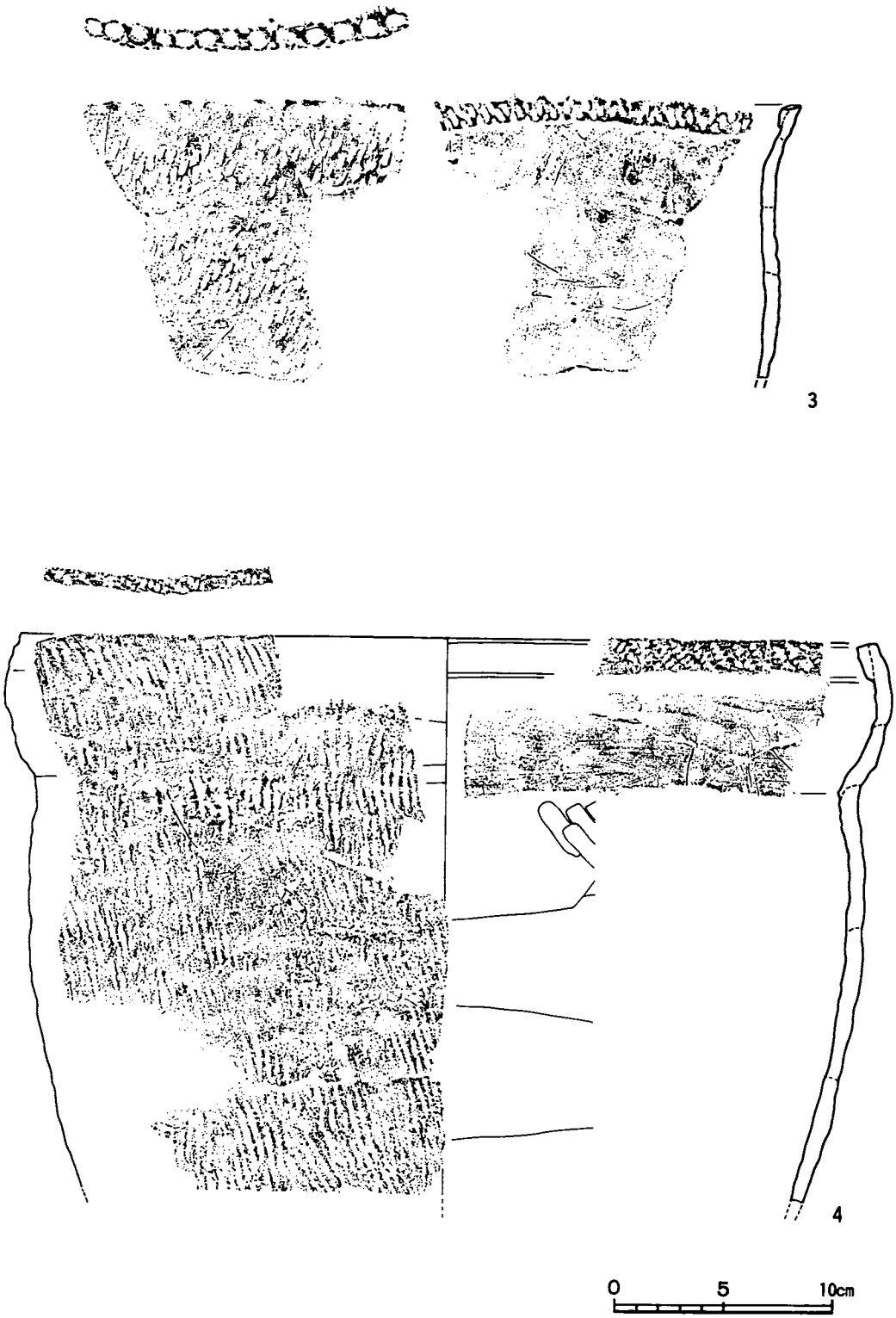
第30図　Ⅲ－Ｂ類土器実測図（１）



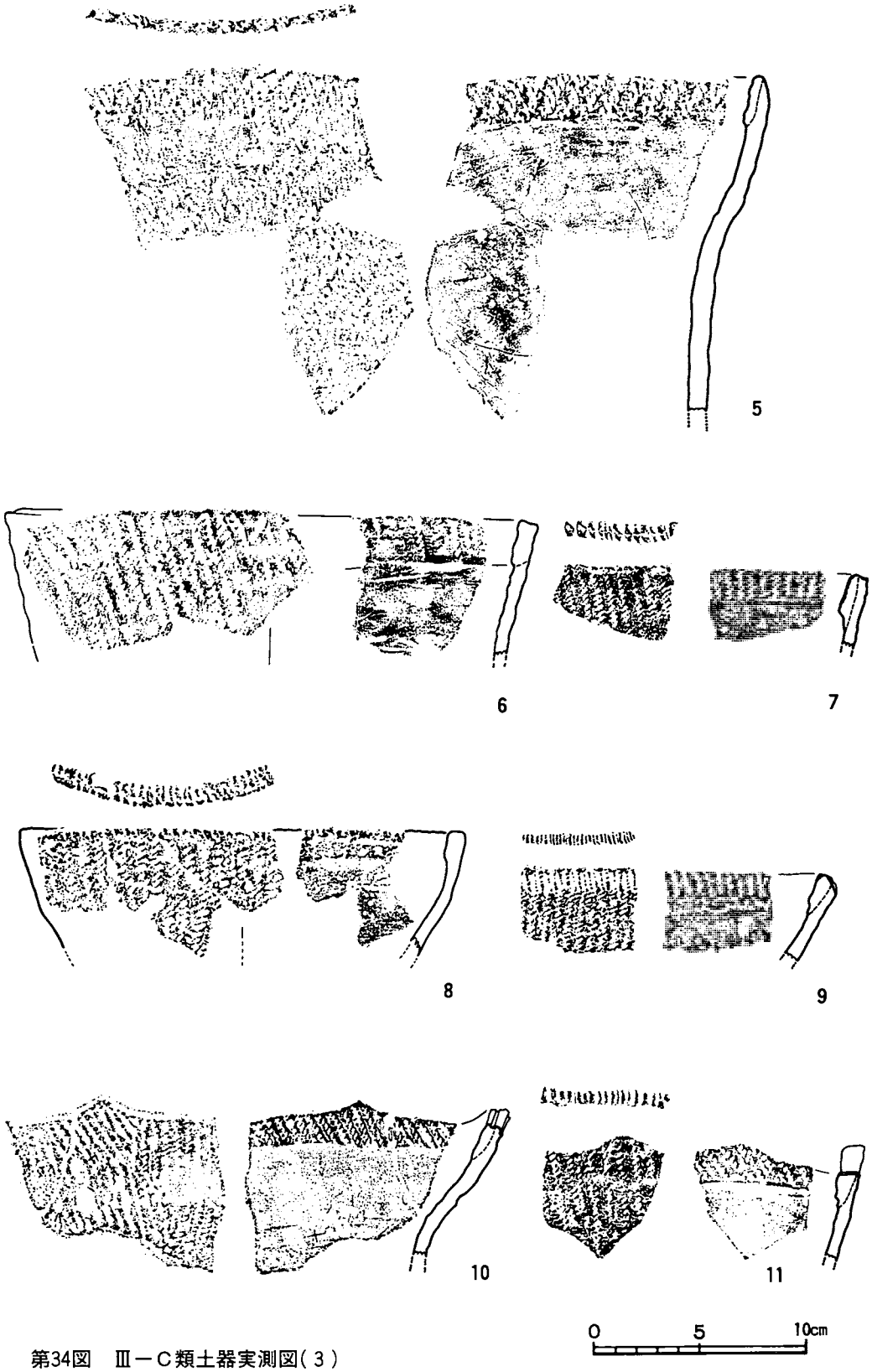
第31図　Ⅲ－Ｂ類土器実測図（２）



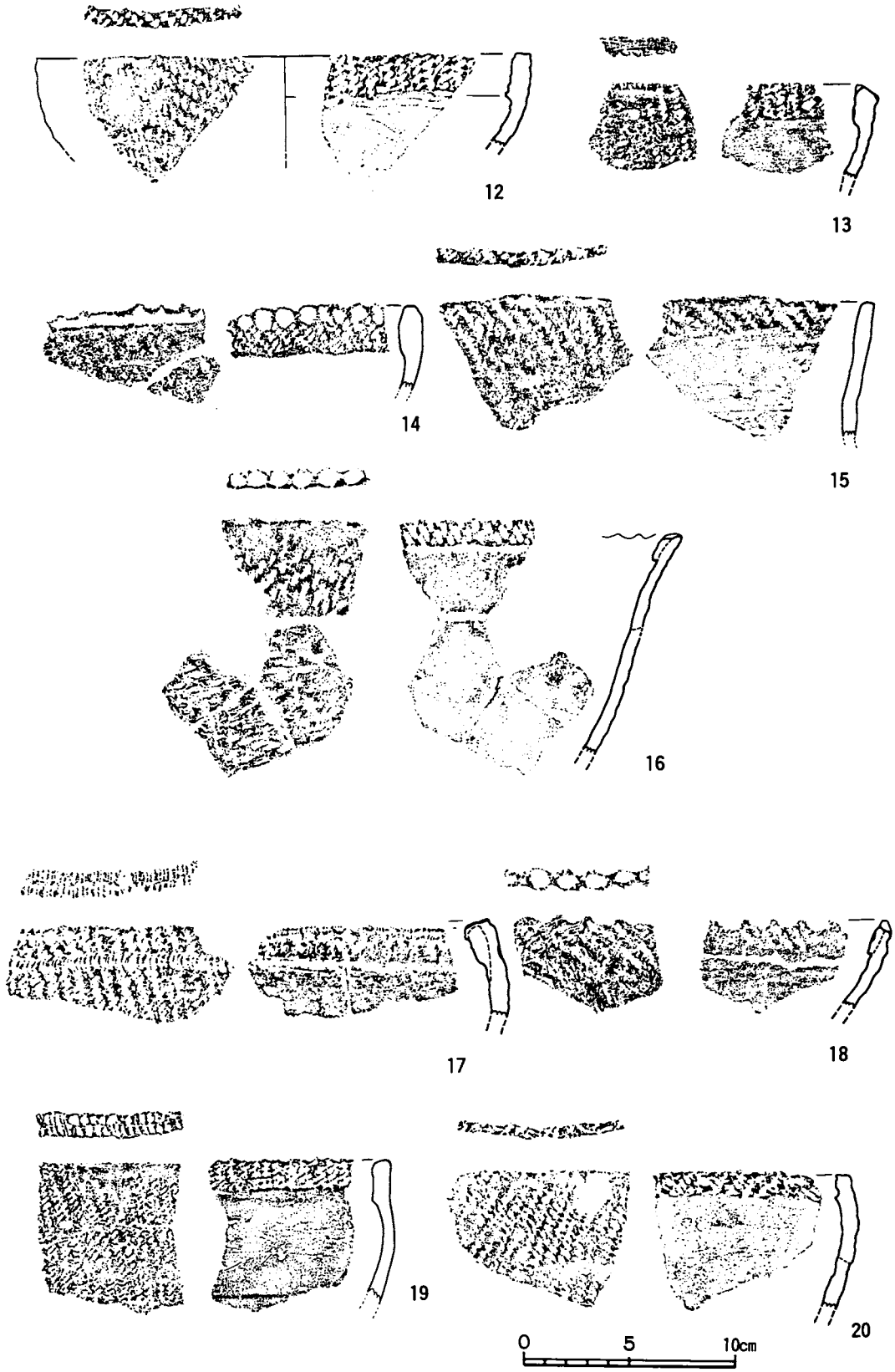
第32図　Ⅲ－Ｃ類土器実測図（１）



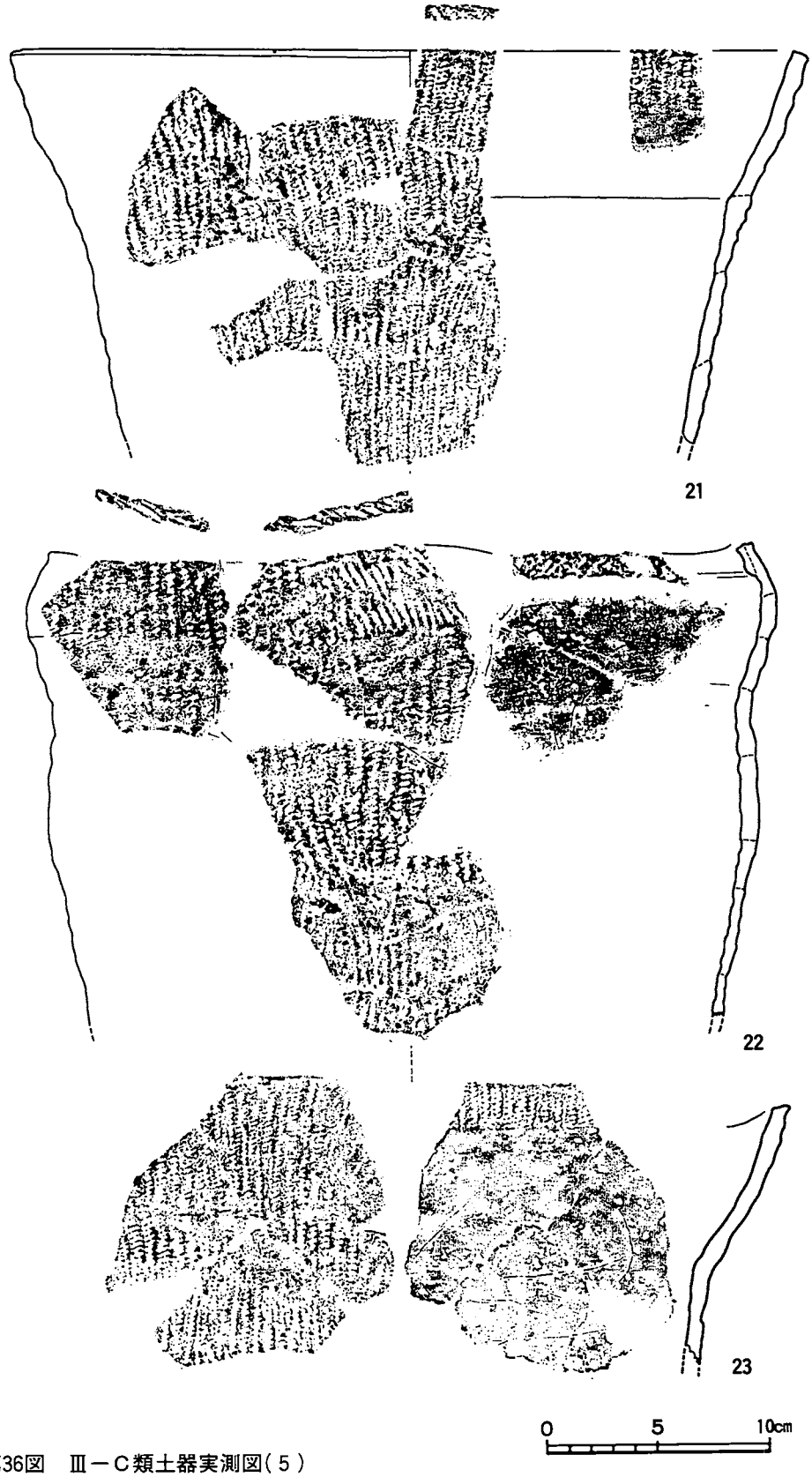
第33図　Ⅲ－Ｃ類土器実測図（２）



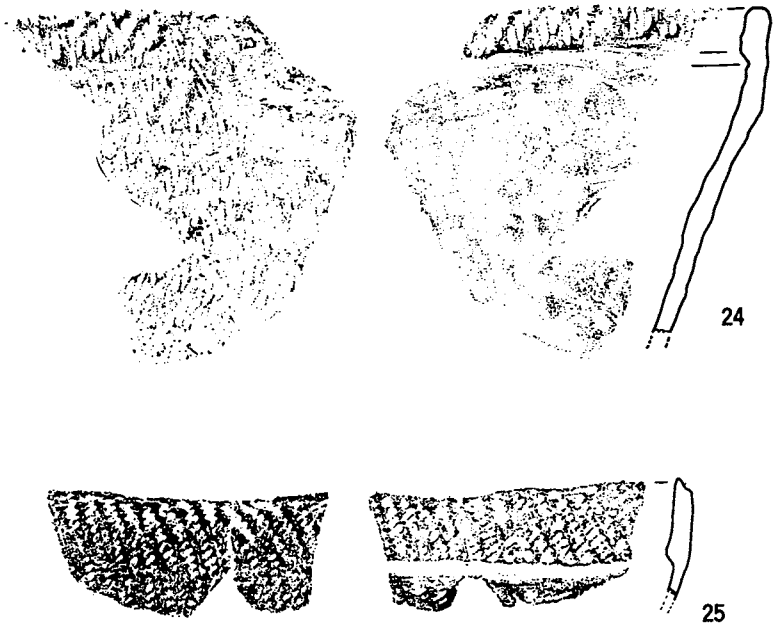
第34図　Ⅲ－Ｃ類土器実測図（３）



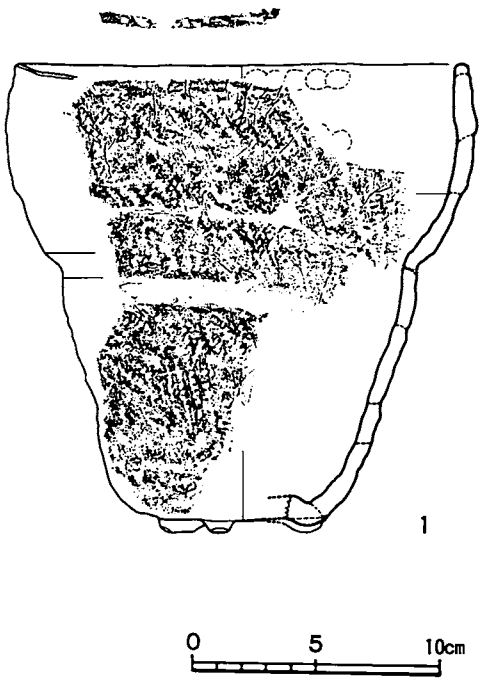
第35図　Ⅲ－Ｃ類土器実測図（４）



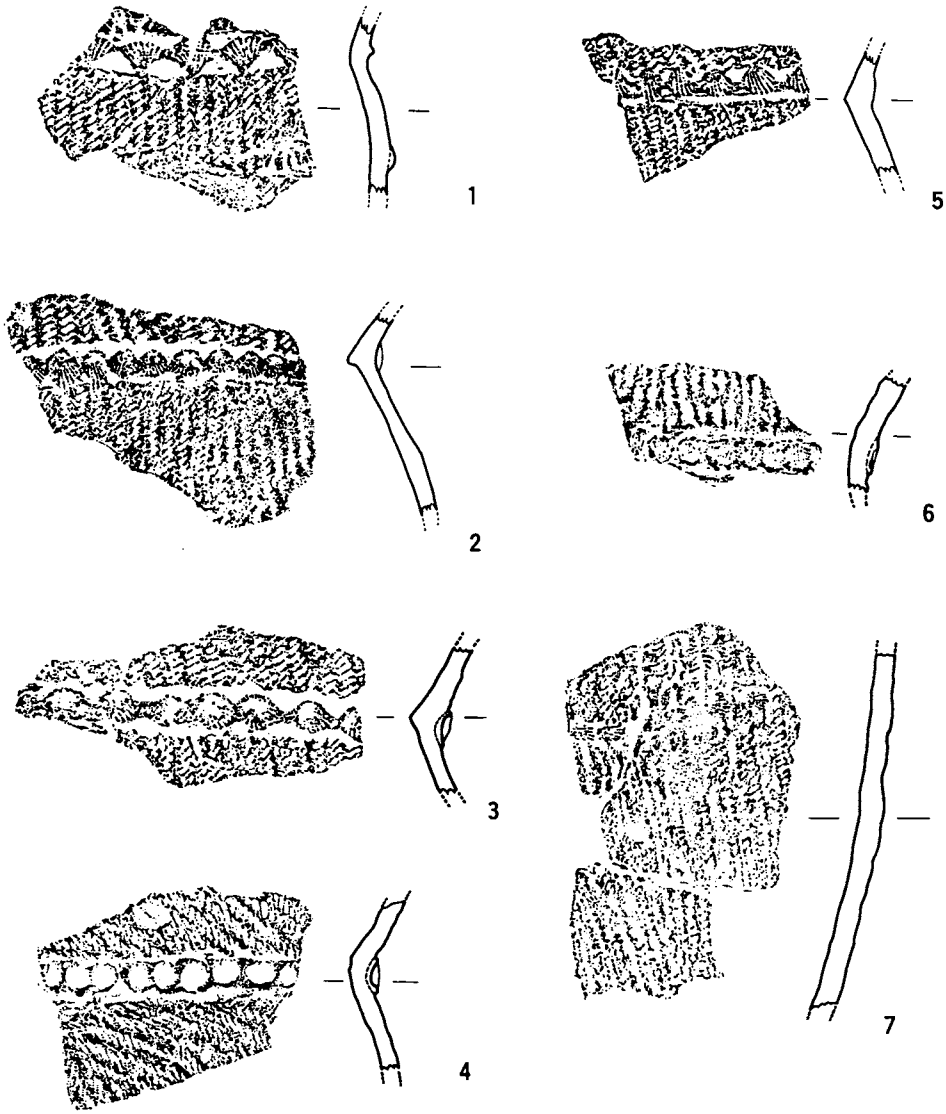
第36図　Ⅲ－Ｃ類土器実測図（５）



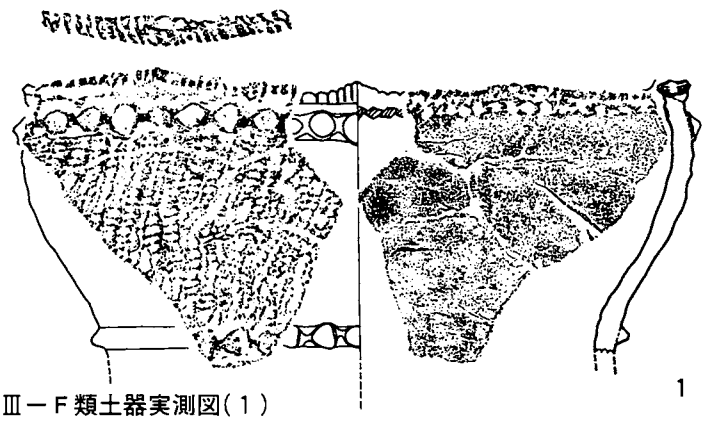
第37図　Ⅲ－Ｃ類土器実測図（６）



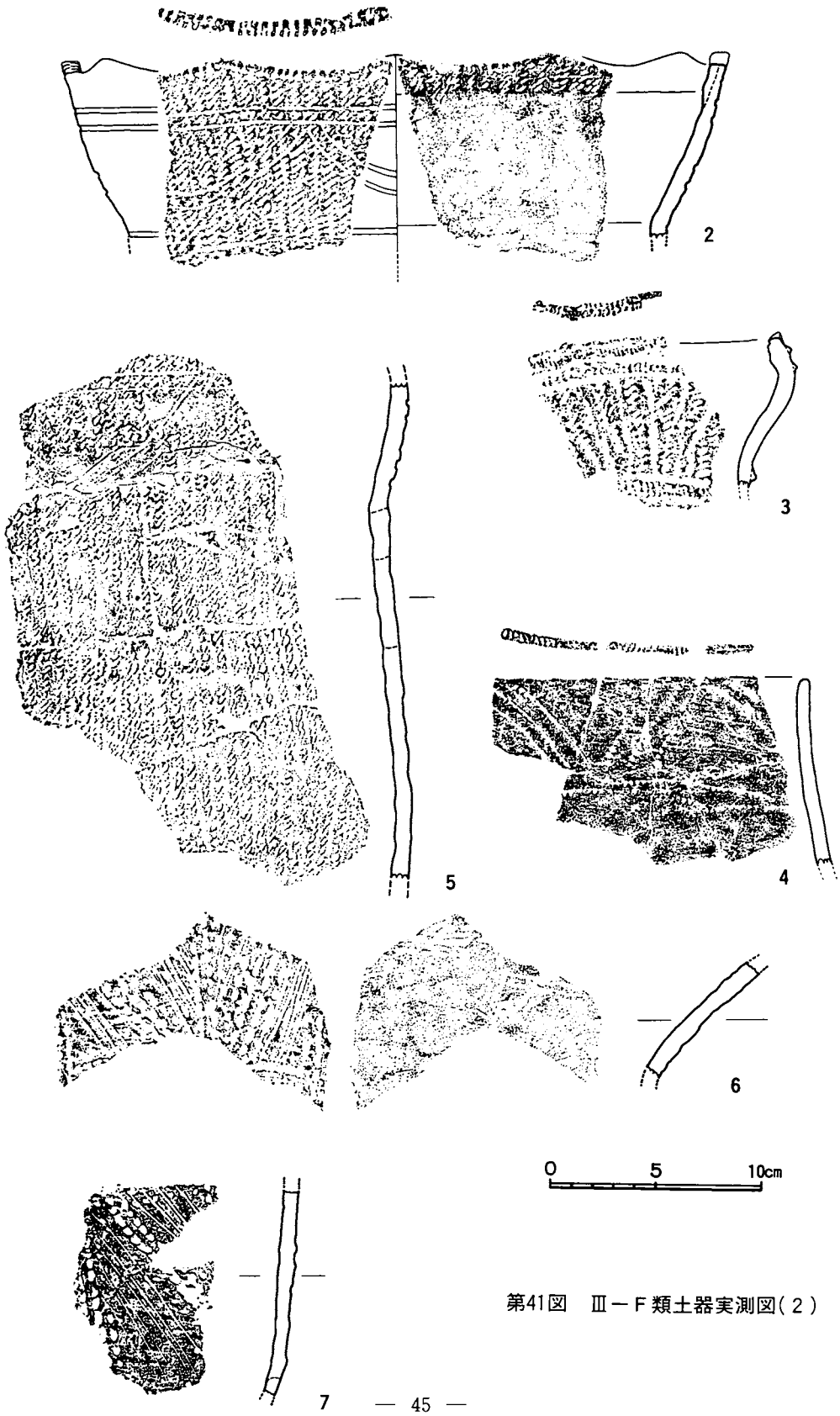
第38図　Ⅲ－Ｄ類土器実測図



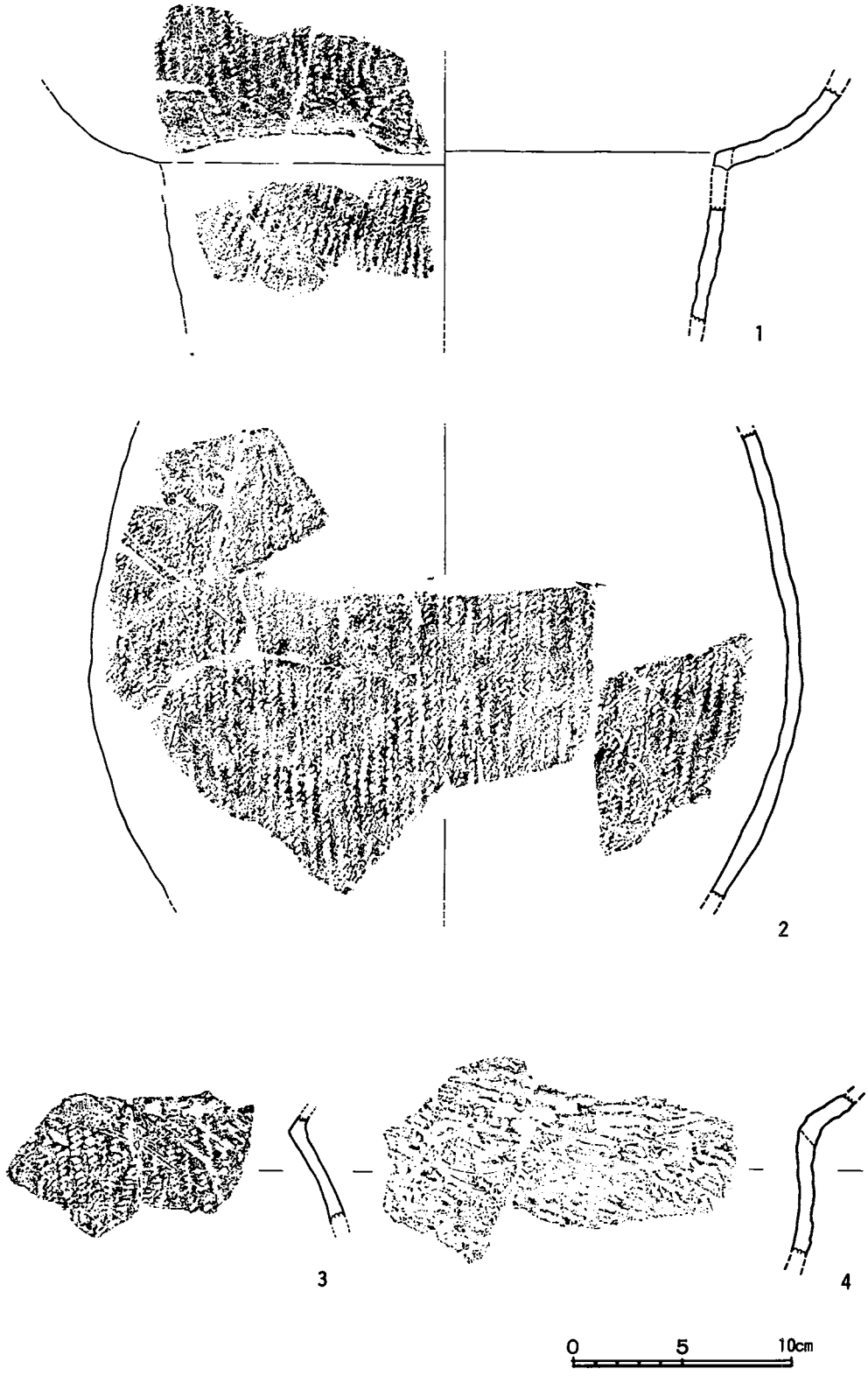
第39図　Ⅲ－Ｅ類土器実測図



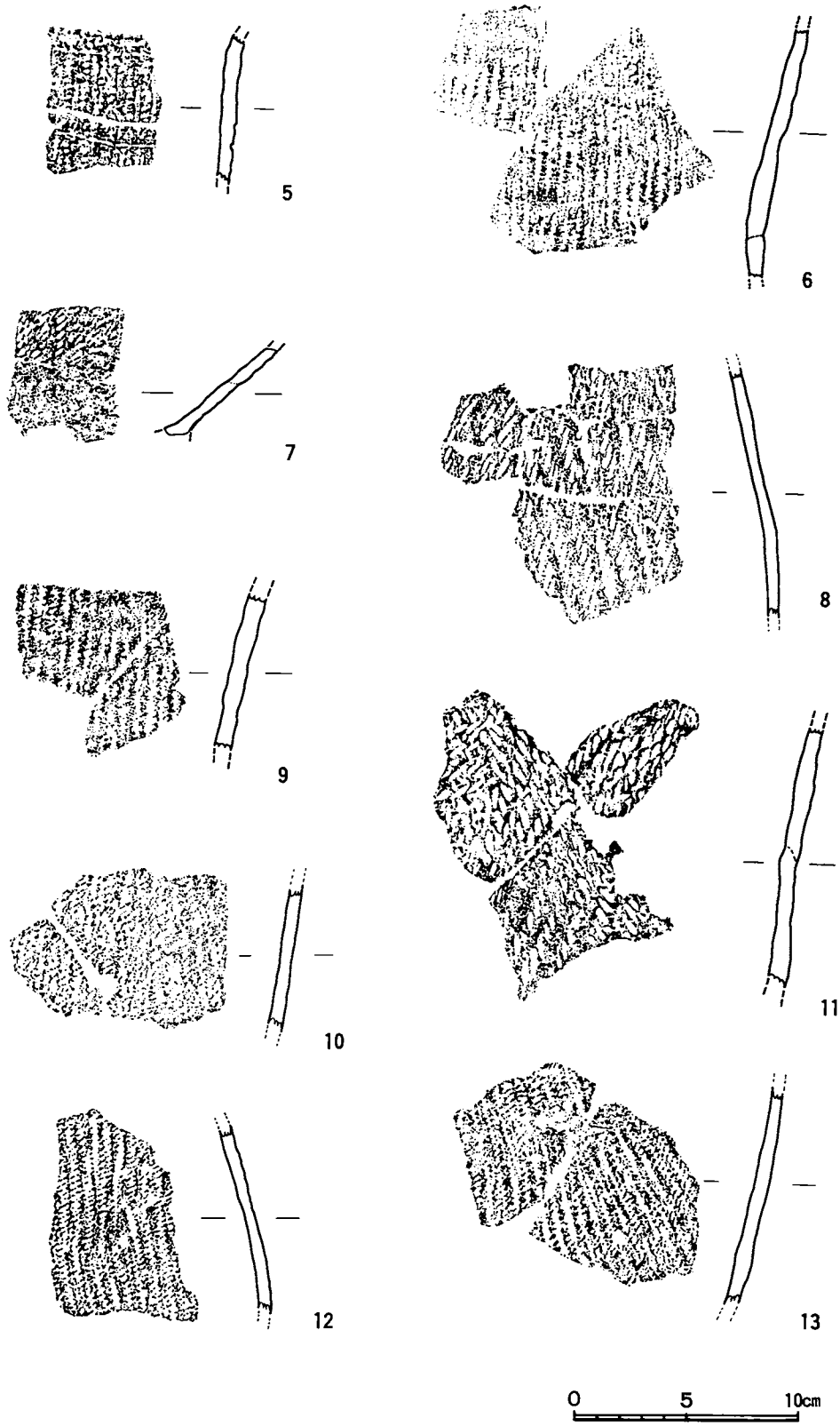
第40図　Ⅲ－Ｆ類土器実測図（１）



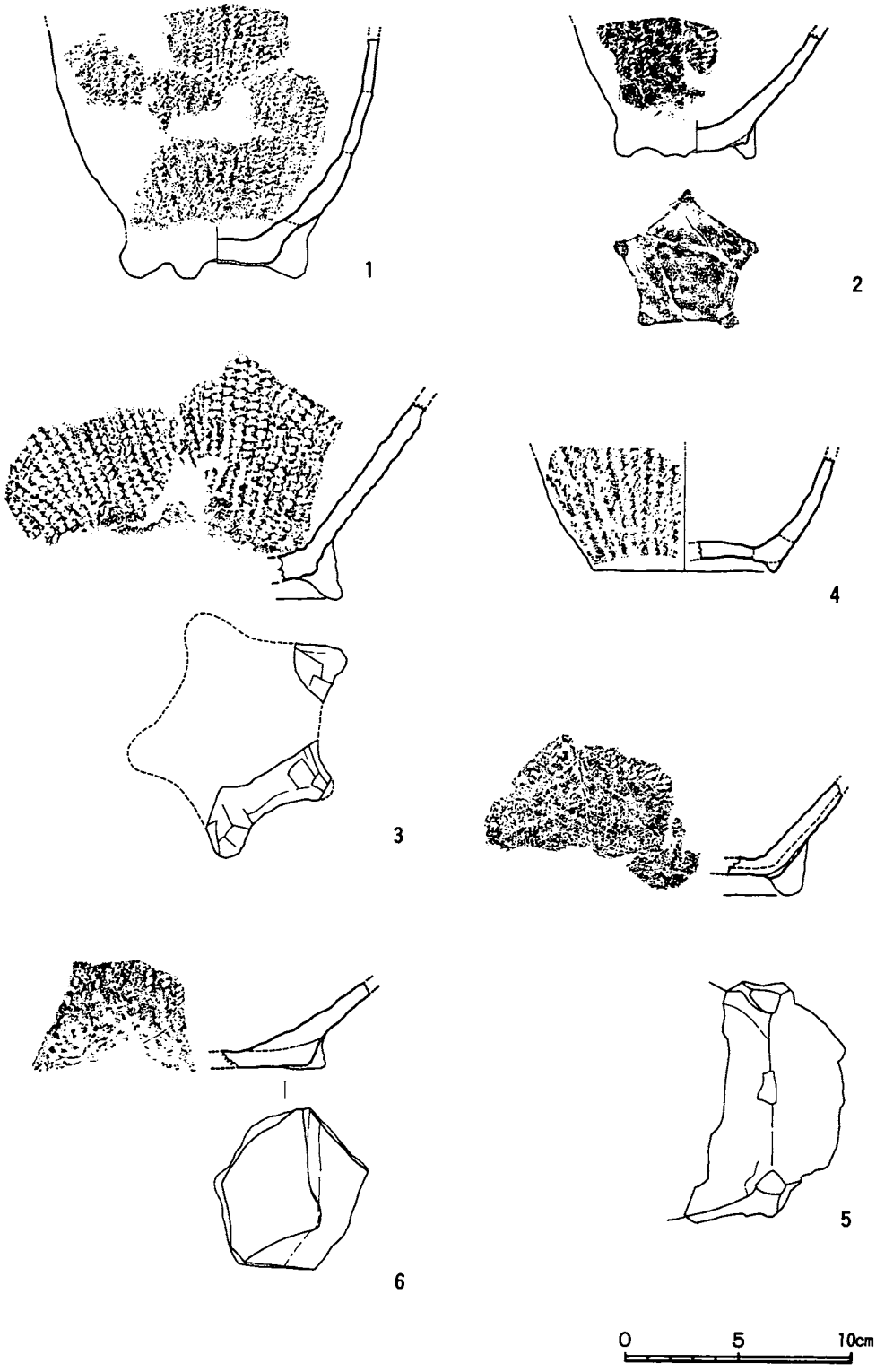
第41図　Ⅲ－Ｆ類土器実測図（２）



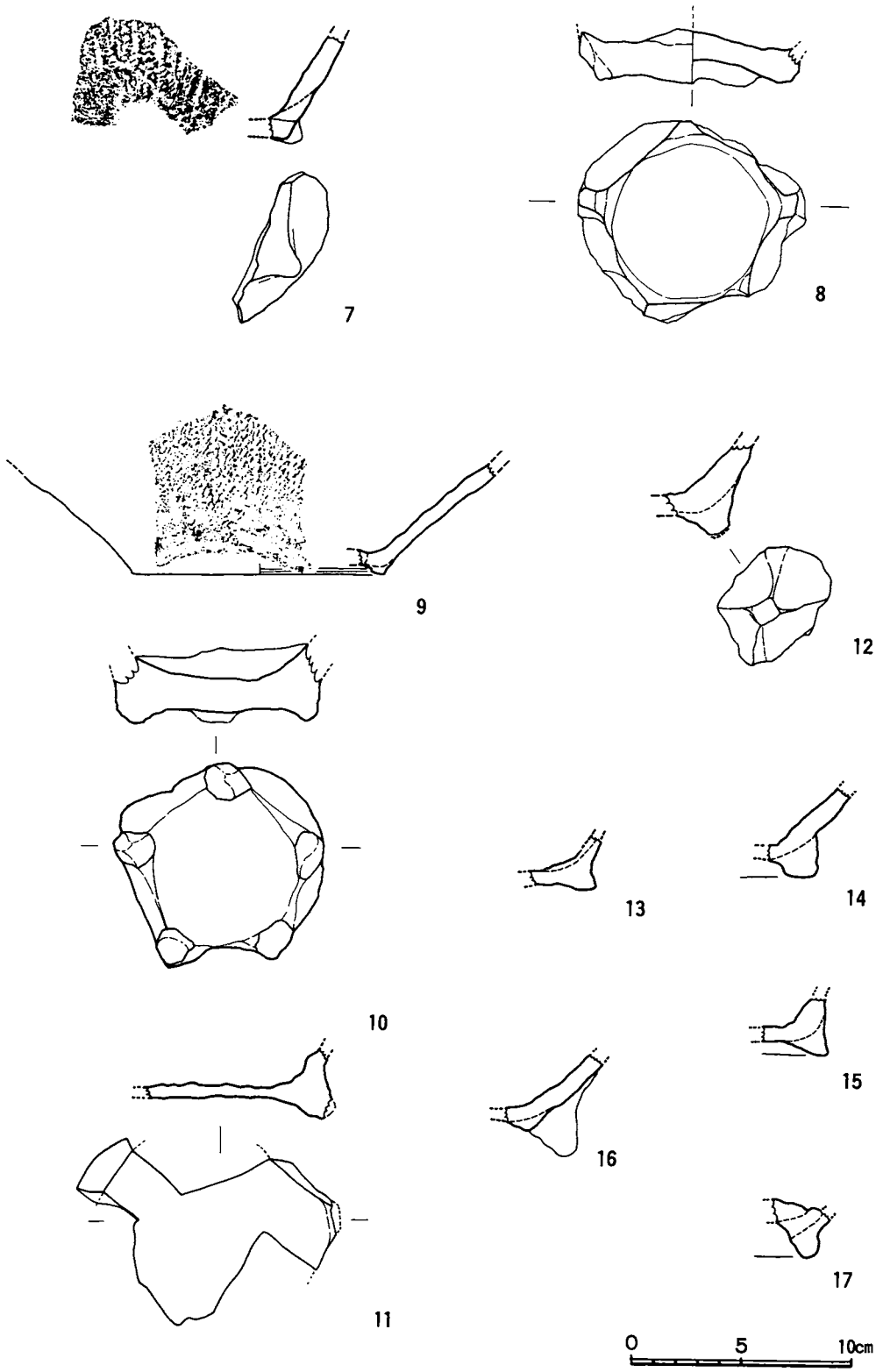
第42図　Ⅲ－Ｇ類土器実測図（１）



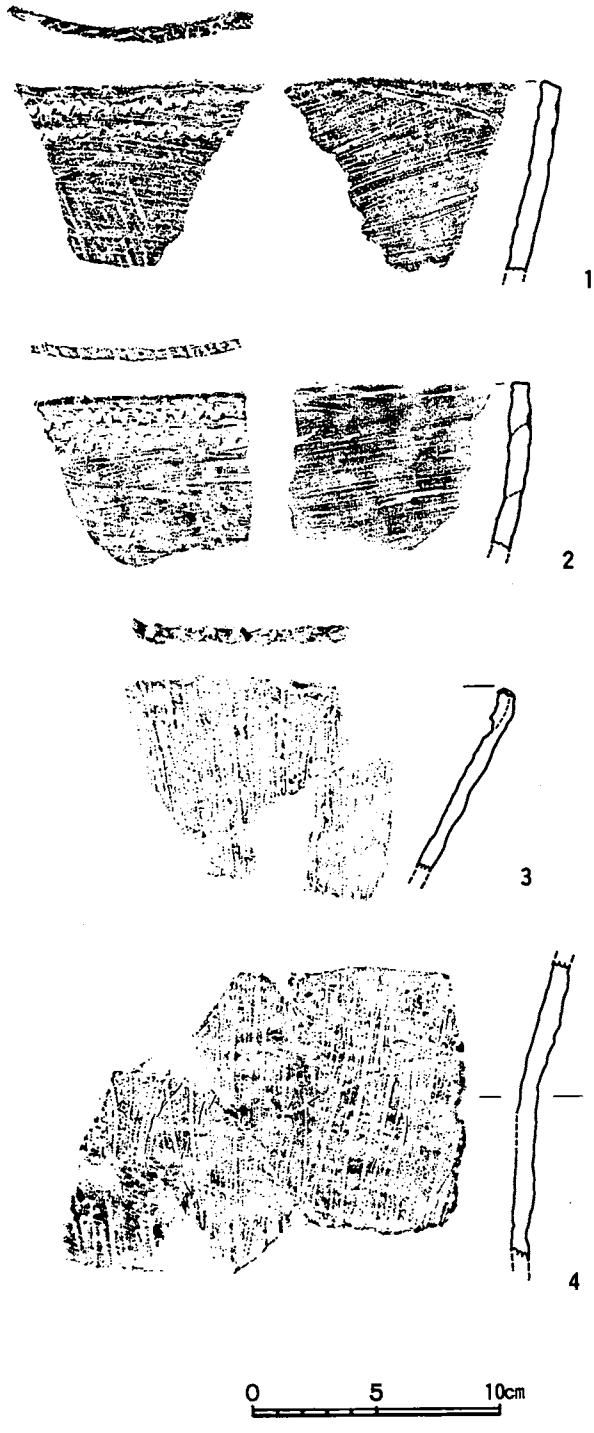
第43図　Ⅲ－Ｇ類土器実測図（２）



第44図　Ⅲ－Ｈ類土器実測図（１）



第45図　Ⅲ－Ｈ類土器実測図（２）



第46図　Ⅲ－Ⅰ類土器実測図

どの文様が重ねられていない土器群である。そして口縁部の内面は有段となるが縄文が行われていない土器である。1はキャリパー状口縁をなす小形の深鉢である。復原することのできた土器で関係の形状を知ることができる。底部は5角形をなしはりつけている。ちなみに復原による器高は18.4cm、口径18.0cmを測り、色調は黒褐色を呈し焼成は良好である。器面に煤の付着がある。

(E)類は貝殻殻頂圧痕文が見られる土器片である。頸部に突帯文を設けその上に重ねて施文している。7は突帯がなく胴部の縄文地に直接的に施された細かな貝殻殻頂圧痕文が認められる。

(F)類は突帯文や沈線文それに刺突文に特色を有する土器群である。1は典型的なキャリパー状口縁をなす小形の深鉢である。やや粗い撚り糸の地紋であり口縁部と頸部に突帯を巡らせ、親指で施したと思われる圧痕文を重ねている。口縁は浅い波状口縁となり口唇部には綿密な刻目文がある。口縁部の内側には刺突文を一周させている。3は突帯に圧痕文ではなく爪形文を重ねている。非常に類似した土器である。2．4．5には薄く浅い沈線文様がある。いずれも横線に加えて連続した弧線を設けたものである。6．7は浅く細い放射状の沈線に加えて連続する刺突文を施している。

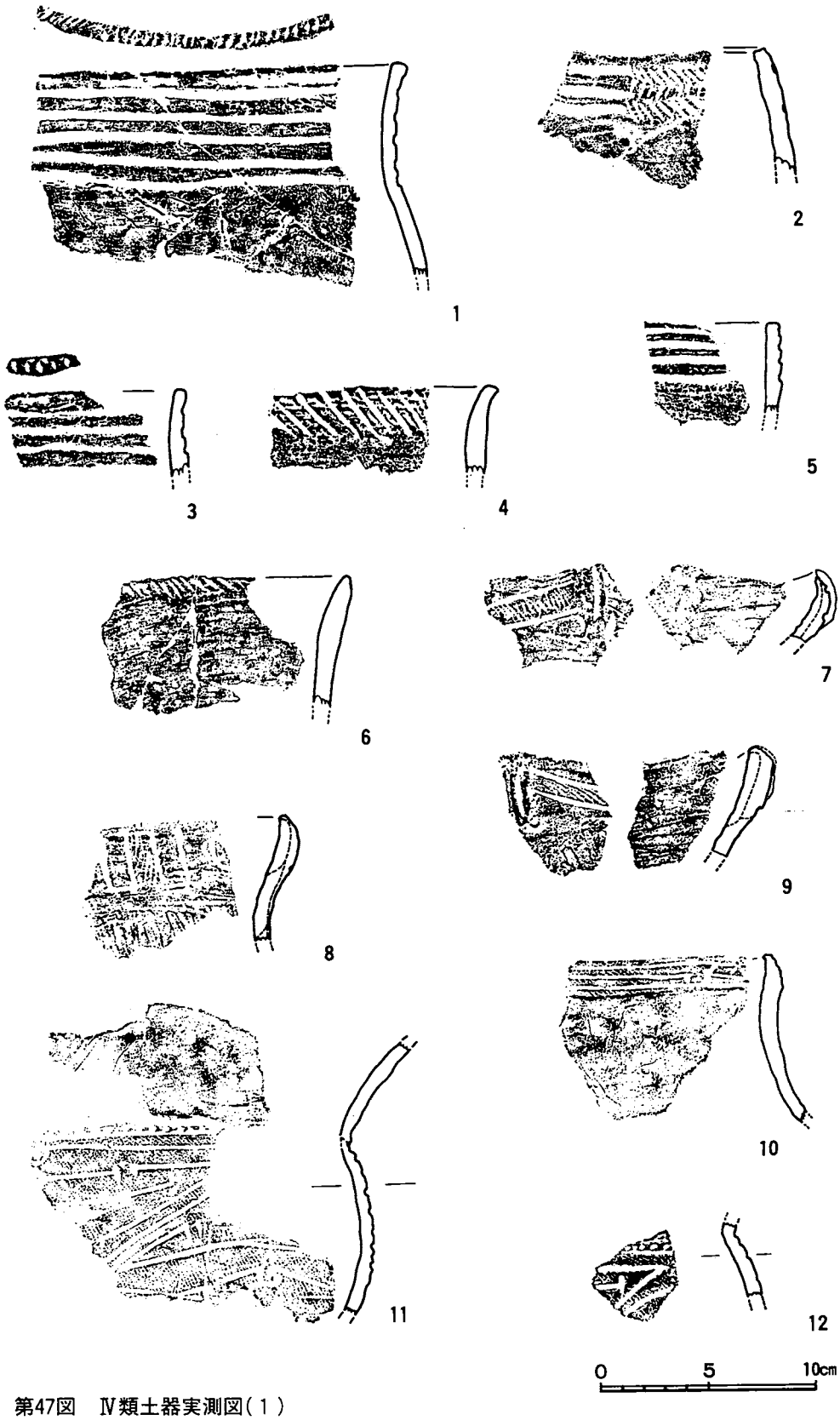
(G)類は胴部片で、(H)類は脚部資料である。底部まで綿密な縄文を施していることが理解される。脚部は器形の大小より高低差や大きさに差異があるが形状は殆どが5角形を呈しており円形の底部は僅かにも認められる程度である。

(I)類は(A)～(H)類と時期を同じくするものと思われる土器群である。器面に条痕文や細い沈線文状の痕跡を見ることができる。1．2には貝殻復縁連続圧痕文も見られる。

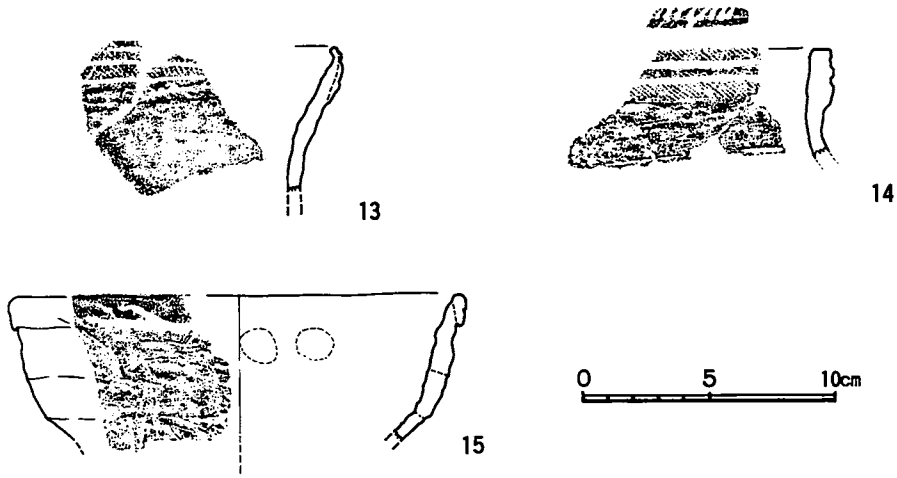
Ⅳ類土器(第47、48図)

僅かではあるが後期の土器がみられる。深鉢でやや太形の沈線や擬似縄文が施文されている。2の口縁部には曽畑式土器に見られるような羽状文がある。北久根山式土器を中心とした時期の土器群であろう。

(江本・本山)

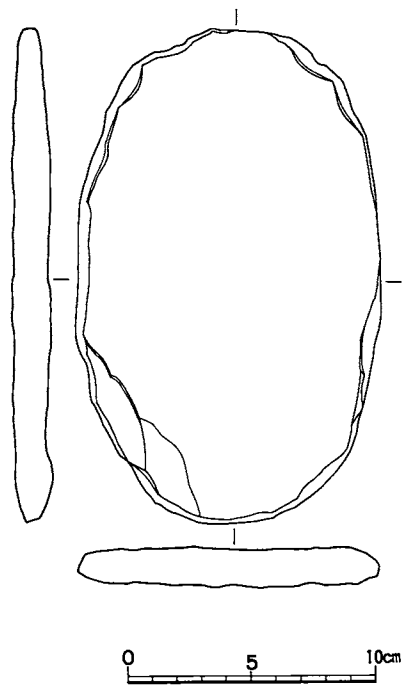


第47図　Ⅳ類土器実測図(１)

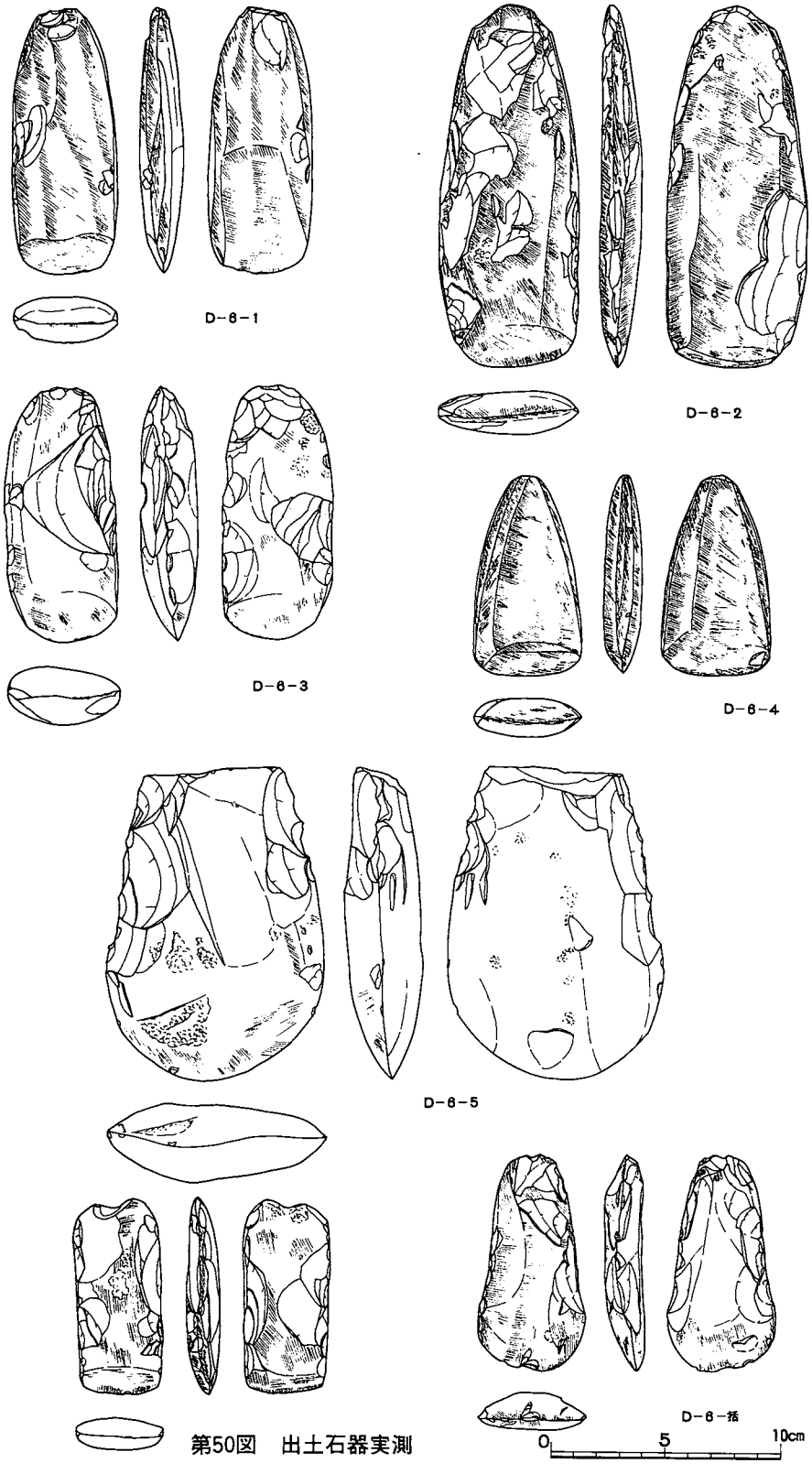


第48図　Ⅳ類土器実測図(２)

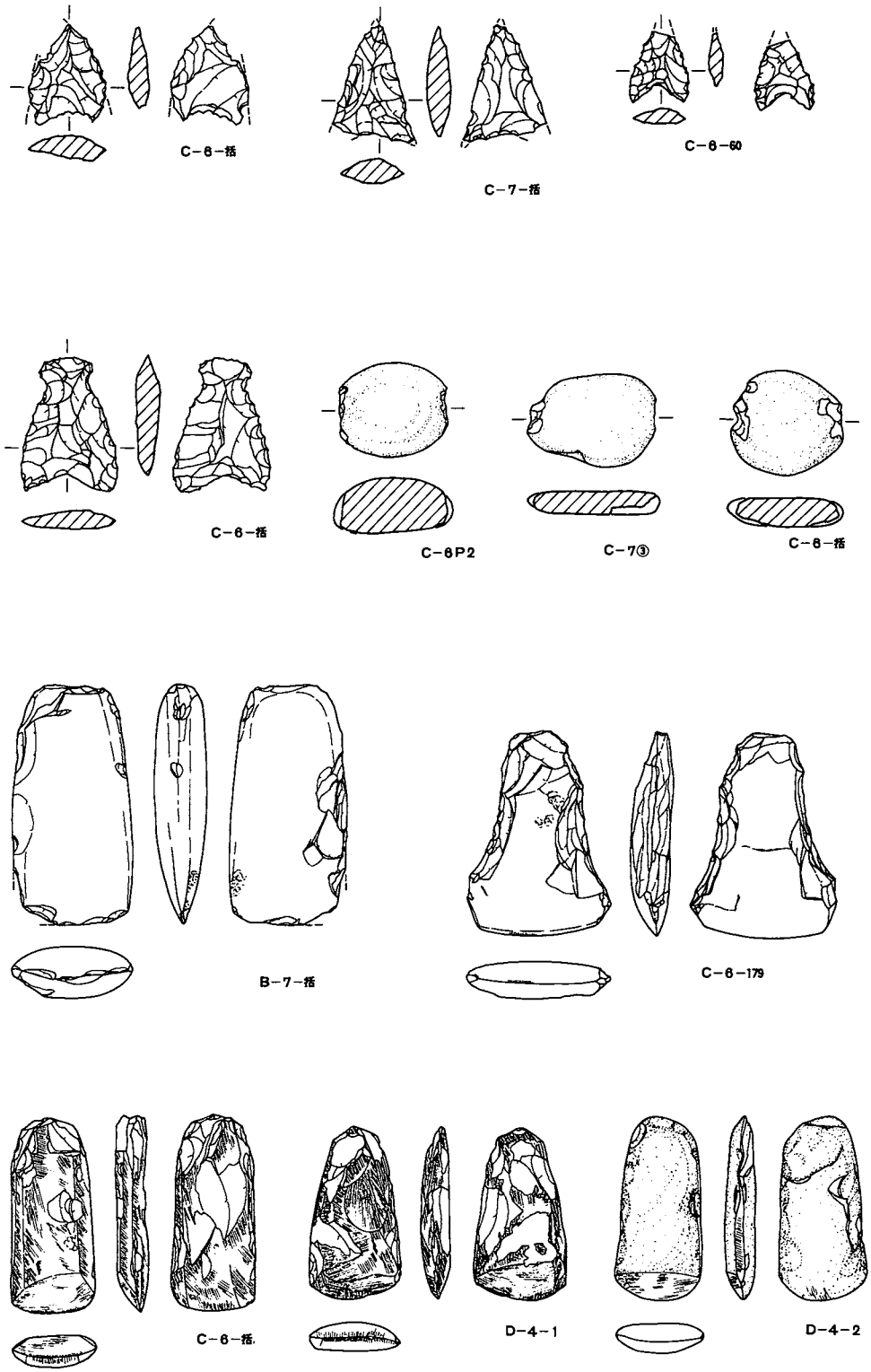
(3)　出土石器



第49図　出土石器実測図



第50図　出土石器実測



第51図　出土石器実測図

表1　　出土遺物観察一覧表　　(No 1)

挿図番号	出土位置	遺物分類	器種	口径	器高	胴部(最大径)	胎土	焼成	色調	備考
第24図 1	C－5	Ⅰ類	口縁部片	－	－	－	砂質 金ウンモ、角セン石 石英、砂粒含む	ふつう	外褐色 内淡黄橙色	下層26、31、32 33、46
2	5	〃	〃	－	－	－	やや砂質、石英 角セン石、白色粒 砂粒含む	ふつう	外灰褐色 内淡褐色	上層133、一括
3	C－5	〃	〃	－	－	－	角セン石、石英 白色粒 砂粒含む やや砂質	良	外灰褐色 内淡褐色	下層41、54
4	C－5	〃	〃	－	－	－	やや砂質 角セン石、石英 砂粒、白色粒 小石粒	良	外淡白褐色 内淡褐色	65
5	C－5	〃	白同部片	－	－	－	砂質、白色粒 砂粒、角セン石 石英含む	ふつう	内淡黄褐色 淡灰褐色 外淡灰褐色	上層213 206
6	C－5	〃	〃	－	－	－	金ウンモ、角セン石 石英、白色粒 砂粒含む	ふつう	外淡黄褐色 内淡褐色～ 淡灰褐色	50
第25図(上) 1	C－5	Ⅱ－A類	〃	－	－	－	砂粒混じり 白班を含む	不良	黒褐色	上層181
2	C－4	〃	〃	－	－	－		良好	黒褐色	296
第25図(中) 1	C－4	Ⅱ－B類	口縁部片	－	－	－	密ごく細かい 角セン石、金ウンモ その他砂粒	良好	灰黒褐色	上層270
2	C－4	〃	〃	－	－	－	砂粒が多量に混じる	良好	明褐色	上層348
3	C－5	〃	〃	－	－	－	砂粒、白班混入	良好	暗褐色	上層286
4	C－6	〃	日同部片	－	－	－	角カン石、白色粒 砂粒少量含む やや砂質	良う	外淡黄褐色 内黒褐色	上層5
第25図(下) 1	C－8	Ⅱ－C類	口縁部片	－	－	－	密、細かい角セン石、砂粒をわずかに含む	良好	外暗灰褐色 内灰褐色	Pit 5
2	表土一括	〃	日同部片	－	－	－	密、細かい角セン石 金ウンモ石英 砂粒わずかに含む	良	外暗灰褐色 内褐色	一括
3	C－5	〃	〃	－	－	－	金ウンモ 角セン石 石英含む	良	外明黒褐色 内黄褐色	下層146

表2　　出土遺物観察一覧表　　(No 2)

挿図番号	出土位置	遺物分類	器種	口径	器高	胴部(最大径)	胎土	焼成	色調	備考
4	表土一括	〃	〃	−	−	−	密細かい 角カン石、砂粒を わずかに含む	良好	外暗灰褐色 内褐色	一括
第26図(上) 1	C−6	Ⅱ−D類	口縁部片	−	−	−	細かい白色粒 角カン石を含む	良	外黒褐色 内淡褐色	277 上層
2	C−6	〃	〃	−	−	−	砂粒混じり	良好	明黒褐色	92
3	C−5	〃	〃	−	−	−	雲も、白班 砂粒まじり	良好	明褐色	上層203
4	C−5	〃	〃	−	−	−	白班混じり	良好	明褐色 黒褐色	上層171
5	C−5	〃	白同部片	−	−	−	角カン石 白色砂粒 金ウンモ含む	良	外淡灰褐色 内白褐色	上層200、205
6	D−6	〃	〃	−	−	−	砂粒まじり	ふつう	明褐色	150
7	D−6	〃	〃	−	−	−	砂粒まじり	不良	明褐色	118
7	D−6	〃	〃	−	−	−	砂粒まじり	不良	明褐色	118
第26図(上) 1	C−6	Ⅱ−E類	口縁部片	−	−	−	石英、角セン石 白色粒 茶褐色粒少量含む	良	外黒褐色 淡白色 内淡灰褐色	上層195、一括
第26図 2	D−5	〃	〃	30.2−	−	−	砂粒まじり	ふつう	明褐色	94、70
第27図 1	G−6	Ⅲ−A類	口縁部片	−	−	−	砂粒まじり	良好	褐色	116
2	C−8	〃	〃	−	−	−	白班 砂粒まじり	良好	明褐色 黒褐色	Pit 7 Pit 8
3	D−4	〃	〃	−	−	−	白色粒、石英 角カン石 金ウンモ含む	良好	明黒褐色	28
4	D−6	〃	〃	−	−	−	白班 砂粒まじり	良好	明黒褐色	7、9

表3　　出土遺物観察一覧表　　(No 3)

挿図番号	出土位置	遺物分類	器種	口径	器高	胴部(最大径)	胎土	焼成	色調	備考
5	C－5	〃	〃	－	－	－	白色粒、角セン石 石英 金ウンモ含む	良好	灰褐色	上層31
6	C－5	〃	〃	－	－	－	白斑 砂粒まじり	ふつう	明褐色	上層9
7	C－5 D－5	〃	〃	－	－	－	白斑 砂粒混じり	良好	明褐色	下層 53 上層126 115
8	C－5	〃	〃	－	－	－	白色砂粒 角セン土 金ウンモ含む	良	淡褐色	上層50 一括
第28図 9	C－4	〃	洋鉢	35.0	－	－	金ウンモ 白色砂粒 角セン石含む	良	外褐色～ 白褐色 内褐色～淡褐色	上層192.16 268.113 一括、下層129
10	C－4	〃	口縁部片	－	－	－	白色砂粒 金ウンモ 角セン石砂粒	良	外淡灰褐色 内灰褐色	上層546、486 485
11	C－4	〃	〃	－	－	－	やや砂質 白色砂粒 角セン石、石英含む	良	外淡灰褐色 ～淡黄橙色 内淡黄橙色	上層431
12	C－4	〃	〃	－	－	－	白色粒 砂粒含む やや砂質	良	外黒褐色 内黒褐色 淡白褐色	上層214
13	C－4	〃	〃	－	－	－	砂粒混じり 雲もを含む	良好	明褐色	43
14	B－3 B－4	〃	〃	－	－	－	砂粒まじり	ふつう	明褐色	B－3、75 B－4、27
第29図 15	C－5	〃	胴部片	－	－	－	混入物ごく少ない 細金ウンモ、角セン石 白色粒を含む	良好	外暗灰褐色 内淡色褐色	上層28
16	C－5 D－5	〃	〃	－	－	－	細かい角セン石 金ウンモ、石英 白色粒、砂粒	良	外淡灰褐色 内口縁部灰褐色 胴部黄褐色	C－5上層289 D－5、152
17	C－4	〃	〃	－	－	－	密ごく細かい 白色粒をごく わずかに含む	良	外淡灰褐色 内淡白褐色	上層316
18	C－4	〃	〃	－	－	－	角セン石、金ウンモ 砂粒、小石粒	良	外褐色 内明褐色	上層277、197
第30図 1	C－4	Ⅲ－B類	洋鉢	38.3	－	－	金ウンモ 角セン石(小粒) 白色粒、砂粒	良	内褐色 口唇外 淡黒褐色	一括

表4　　出土遺物観察一覧表　　(No 4)

挿図番号	出土位置	遺物分類	器種	口径	器高	胴部(最大径)	胎土	焼成	色調	備考
2	D－28	〃	口縁部片	－	－	－	雲もまじり	良好	明褐色	88
3	B－2	〃	〃	－	－	－	細かい角セン石 石英少量含む やや砂質	良	外暗灰褐色 内明茶褐色	20
4	C－4	〃	〃	－	－	－	金ウンモ 角セン石、白色粒 砂粒含む	良	外淡灰褐色 内淡茶褐色	上層338
5	表土一括	〃	〃	－	－	－	角セン石、金ウンモ 白色粒 砂粒含む	良	外淡褐色 一部スス付着 内淡白褐色	一括
6	C－6	〃	〃	－	－	－	大粒の白色粒 金ウンモ、角セン石	良	外淡白褐色 内淡褐色	上層140
7	C－4	〃	〃	－	－	－	金ウンモ、角セン石 白色粒 砂粒含む	良	外淡褐色 内淡茶褐色	上層 72
8	表土一括	〃	〃	－	－	－	雲もまじり	良好	明褐色	一括
9	C－5	Ⅲ－B類	口縁部片	－	－	－	密、金ウンモ 白色砂、砂粒 少量含む	良	外淡褐色 灰褐色 内淡茶褐色	上層 56 349
第31図 10	C－4	〃	〃	－	－	－	白斑まじり	良好	明褐色 黒褐色	下層 4
11	D－4	〃	〃	－	－	－	金ウンモ 角セン石 白色粒含む	良	外暗灰褐色 内褐色	14
12	表土一括	〃	〃	－	－	－	雲もまじり	良好	明褐色 黒褐色	一括
13	C－6	〃	〃	－	－	－	角セン石 白色粒含む	良	外褐色 内淡黄橙色	上層 4
14	C－6	〃	〃	－	－	－	金ウンモ 細かい白色粒 少量含む	良	外黒褐色 内淡白褐色	上層256
15	C－6	〃	〃	－	－	－	やや砂質 白色粒含む	良	淡白褐色	上層 26
16	D－5	〃	胴部片	－	－	－	金ウンモ、角セン石 白色砂粒 石粒含むやや砂質	良好	淡白褐色	102,171

表5　　出土遺物観察一覧表　　(No 5)

挿図番号	出土位置	遺物分類	器種	口径	器高	胴部(最大径)	胎土	焼成	色調	備考
17	C－4	〃	〃	－	－	－	砂粒まじり	やや不良	黒褐色 明褐色	一括
18	表土一括	〃	〃	－	－	－	白班まじり	良好	黒褐色	
第32図 1	C－7	Ⅲ－C類	洋鉢 口縁部片	31.6	－	－	砂粒混じり	ふつう	黒褐色	上層 47
2	C－4	〃	〃	36.6	－	－	金ウンモ 角セン石白色 砂粒含む	良	外暗灰褐色 内暗褐色	上層580、581、586 下層256、258、253 259、一括
第33図 3	C－4	〃	〃	－	－	－	金ウンモ、長石 小石粒かなり 含む	良	外淡黒褐色 内灰褐色	上層189、487 下層188、187
4	C－4	〃	〃	39.2	－	－	粒が大きい、小石粒もある金ウンモ、角セン石 石英、白色粒、砂粒	良	暗灰褐色	下層220、225 上層512、514
第34図 5	C－4	〃	〃	－	－	－	大粒の金ウンモ 細かい角セン石 長石	良	外白褐色 内淡褐色	269
6	C－4	〃	〃	25.2	－	－	白色砂粒 角セン石 砂粒含む	良	外淡褐色 一部スス付着 内淡白褐色	下層242 濃灰褐色
7	C－4	〃	〃	－	－	－	細かい角セン石 金ウンモ、白色粒 砂粒含む	良	内施文部淡褐色 無文部淡灰褐色 外褐色	上層526
8	C－4	〃	〃	21.0	－	－	砂粒まじり	ふつう	赤褐色	上層499、498 一括
9	C－4	〃	〃	－	－	－	やや砂質 白色粒、砂粒 わずかに含む	良	外淡白褐色 内黄褐色	上層170
10	C－5	〃	〃	－	－	－	角セン石 白色砂粒 金ウンモ含む	良	外黒褐色 内褐色	上層166 一括
11	C－4	〃	〃	－	－	－	白色粒をわずかに含む	良	外淡橙色 内黄橙色	上層235
第35図 12	C－6	〃	口縁部片	23.5	－	－	金ウンモ 角セン石 砂粒含む	良	外灰褐色 内褐色	上層180
13	C－4	〃	〃	－	－	－	白色砂粒 細かい砂粒 金ウンモ	良	外淡灰褐色 内淡褐色	上層171

表6　　出土遺物観察一覧表　　(No 6)

挿図番号	出土位置	遺物分類	器種	口径	器高	胴部(最大径)	胎土	焼成	色調	備考
14	B－4	〃	〃	－	－	－	砂粒まじり	不良	黒褐色	24.22
15	C－5	〃	〃	－	－	－	雲もまじり	良好	黒褐色 明褐色	一括
16	C－4	〃	〃	－	－	－	白色砂粒 角セン石 金ウンモ含む	良好	外淡褐色 内淡灰褐色	上層530 532、586
17	D－4 D－5	〃	〃	－	－	－	やや砂質、角セン石 白色砂、金ウンモ 砂粒含む	良	外暗褐色 内淡褐色	D－4、11、13 D－5、一括
18	C－4	Ⅲ－4類	口縁部片	－	－	－	白色粒(大きい) 角セン石、金ウンモ 砂粒	良好	明褐色	上層418
19	C－4	〃	〃	－	－	－	砂粒まじり	不良	黒褐色 暗褐色	一括
20	C－4	〃	〃	－	－	－	角セン石 金ウンモ 白色粒を少量含む	良好	外暗灰褐色 内褐色	上層 85
第36図 21	C－4	〃	深鉢 口縁部片	36.0	－	－	金ウンモ、角セン石 白色粒 砂粒含む	良	外黒褐色 内白褐色	下層114、115、113 上層230
22	C－4 C－5	〃	〃	31.6	－	－	金ウンモ 角セン石、白色粒 砂粒含む	良	外黒褐色 内淡茶褐色 黒褐色	C－4上層492 下層21 C－5上層245
23	C－4	〃	〃	－	－	－	角セン石 石英 白色粒少量含む	良	外灰褐色 内淡褐色	下層115、116、109 上層 38
第37図 24	C－4	〃	〃	－	－	－	金ウンモ 砂粒 白色粒含む	良	外褐色 スス付着 内褐色	
25	C－6	〃	〃	－	－	－	砂粒混じり	良好	黒明褐色	一括328
第38図 1	C－6	Ⅲ－D類	深鉢	18.0	18.4	18.6	白色砂粒 金ウンモ 角セン石含む	良	外淡黒褐色 スス付着 内褐色～淡灰褐色	上層251、238 下層250、239、236
第39図 1	D－6	Ⅲ－E類	胴部片				砂粒 多量混じり	やや不良	明褐色	170、表採
2	表土一括	〃	〃				砂粒が多量に混じる	やや不良	黒褐色	一括

表7　　出土遺物観察一覧表　　(No 7)

挿図番号	出土位置	遺物分類	器種	口径	器高	胴部(最大径)	胎土	焼成	色調	備考
3	C－4	〃	〃				金ウンモ 角セン石 砂粒含む	良	外灰褐色 内褐色	下層207 326
4	C－4	〃	〃				細かい白色粒 角セン石 砂粒含む	良	外灰褐色 内暗褐色	上層413
5	表土一括	〃	〃				砂粒 多量混じり	普通	黒 明褐色	
6	C－6	〃	〃				角セン石、金ウンモ 白色粒 石英少量含む	良	外黒褐色 内淡白茶褐色	一括
7	C－5	〃	〃				粒がかなり大きい 金ウンモ、白色砂粒 細かい角セン石	良	外淡褐色 内淡白褐色	上層249、250
第40図 1	C－6 C－5	Ⅲ－F類	深鉢	26.8			白色粒、石英 角セン石、砂粒少量含む	良	外暗灰褐色 内灰褐色	C－6上層213 C－5上層 80 上層189
2	表土一括	〃	口縁部片	31.0			角セン石 砂粒含む	良	内褐色 外灰褐色	一括
3	G－6	〃	〃				砂粒混じり	不良	黒褐色	一括
4	C－3	〃	〃				砂粒 雲も混じり	不良	黒褐色	上33
5	C－4	〃	胴部片				大量の金ウンモ 白色砂粒、細かい 角セン石砂粒密	良	外明茶褐色 灰暗褐色、下部 スス付着、内茶褐色	上層17 434、299、336 262、258、257
第41図 6	G－6	〃	〃				白色粒 角セン石 石英含む	良	外黒褐色 内茶褐色	54
7	G－6	〃	〃				角セン石 白色粒 砂粒含む、粒は小さい	良	外褐色 暗褐色 内暗黒褐色	51 一括
第42図 1	C－6	Ⅲ－9類	〃				白色砂粒(多い) 角セン石 金ウンモ含む	良	外黄橙色 内明黄褐色	上層209 208、212
2	C－5 C－4	〃	〃				金ウンモ 白色砂粒 角セン石含む	良	内褐色 外淡灰褐色	上層303、305 329、306、307 334、30
3	D－6	〃	〃				白班まじり	良好	黒褐色 明褐色	62、81

表8　　出土遺物観察一覧表　　(No 8)

挿図番号	出土位置	遺物分類	器種	口径	器高	胴部(最大径)	胎土	焼成	色調	備考
4	C－5	〃	〃				白色砂粒 金ウンモ 砂粒含む	良	外褐色 内淡褐色	上層248
第43図 5	C－6	Ⅲ－G類	胴部片				角セン石、白色粒 金ウンモ 砂粒含む	良	淡黄橙色	上層33.51
6	C－4	〃	〃				角セン石 金ウンモ 砂粒含む	良	外明黒褐色 内暗褐色	350 下層 34
7	C－4	〃	〃				細かい石英 白色粒 砂粒含む	良	外灰褐色 内黒褐色	上層353
8	C－4	〃	〃				白班まじり	不良	暗褐色	上層261、518 596
9	C－4	〃	〃				金ウンモ 砂粒 角セン石含む	良	灰黒褐色	下層141 上層334
10	C－4	〃	〃				白班混じり	不良	赤褐色 黒褐色	322 一括
11	表土一括	〃	〃				白色砂粒 金ウンモ 角セン石、砂粒含む	良	外淡褐色 一部スス付着 内暗褐色	一括
12	C－4	〃	〃				白班混じり	不良	暗褐色	上層261 518 569
13	C－4	〃	〃				白班まじり	やや不良	明褐色	下属 87
第44図 1	C－6	Ⅲ－H類	脚部片				細かい角セン石 白色粒(大粒もある) 砂粒がかなり含む	良	外灰褐色 内暗灰褐色	152、34 一括
2	D－6 C－5 D－5	〃	〃				密混入物は ほとんどない	良好	外淡白褐色 内淡灰褐色	D－6、153、143 C－5、上層 39 D－5、64
3	G－6	〃	〃				金ウンモ、角セン石 長石、白色粒 砂粒含む	良	外淡白褐色 内淡褐色	一括
4	C－6	〃	〃			7.9	金ウンモ 白色砂、角セン石 砂粒(粒は大きい)	良	外淡白褐色 内灰褐色	上層247 脚部径
5	C－4	〃	〃				白色砂粒 金ウンモ、石英 (粒は大きい)	良	外暗灰褐色 内淡褐色	292 上層 50

表9　　出土遺物観察一覧表　　(No 9)

挿図番号	出土位置	遺物分類	器種	口径	器高	胴部(最大径)	胎土	焼成	色調	備考
6	C－6	〃	〃				金ウンモ 白色粒 砂粒含む	良	淡白褐色	上層123
第45図 78	C－6	〃	〃				金ウンモ 角セン石 砂粒含む	良	外淡褐色 内淡白褐色	上層79
8	C－4	〃	〃				金ウンモ、白色粒 角セン石 砂粒含む	良	淡褐色	下層7
9	C－4	〃	〃			11.4cm	白色粒、砂粒 細かい角セン石 石英、金ウンモ含む	良	外淡灰褐色 内明褐色	上層8 脚部径
10	C－5	〃	〃			9.5cm	砂粒混じり	やや不良	暗褐色	一括、脚部径 上層105
11	C－4	〃	〃				砂粒 角セン石含む	良	外底褐色 外淡赤褐色 内淡白褐色	上層266、346
12	C－6	〃	〃				角セン石 白色砂粒含む	良	淡白褐色	一括
13	C－5	〃	〃				密白色粒 角セン石 石英含む	良	外淡褐色 内淡灰褐色	上層113
14	C－5	〃	〃				密、細かい角セン石 砂粒 大杉の白色粒	良	淡褐色 外器面 ススキ付着	上層184
15	C－5	〃	〃				白色粒 金ウンモ 角セン石、石英	良	内淡黄橙色 外淡白褐色	上層284
16	C－5	〃	〃				小石粒含む、金ウンモ 角セン石、石英を少量 含むがごく細かい	良	外淡白褐色 内黒褐色	上局254 一括
17	C－5	〃	〃				角セン石 白色粒 石英含む	良	外淡白褐色 内明黒褐色	上層116
第46図 1	C－5	Ⅲ－(Ⅰ)類	口縁部片				角セン石 白色石小粒 砂粒含む	良	外黒褐色 内褐色	上層187
2	B－5	Ⅲ－Ⅰ類	口縁部片				角セン石 白色粒 金ウンモ含む	良	内灰褐色 外	2
3	C－4	〃	〃				金ウンモ 白色粒、砂粒 石粒含む	良　好	淡白褐色	上層193、361

表10　　出土遺物観察一覧表　　(No10)

挿図番号	出土位置	遺物分類	器種	口径	器高	胴部(最大径)	胎土	焼成	色調	備考
4	C－4	〃	胴部片				白色粒、金ウンモ 角セン石、石英 砂粒含む	良	外淡褐色 灰褐色 内淡黄橙色	上層255、246、244 250、一括 下層244
第47図 1	G－5	Ⅰ Ⅴ 類	口縁部				砂粒まじり	良 好	明褐色	一括
2	C－4	〃	〃				粒は細かい 角セン石、金ウンモ 白色粒、砂粒	良	外淡白褐色 淡黒褐色 内褐色	上層345
3	表土一括	〃	〃				砂粒 白斑まじり	不 良	明褐色	一括
4	表土一括	〃	〃				砂粒まじり	良 好	明褐色 黒褐色	一括
5	表土一括	〃	〃				白斑多量 まじり	良 好	明褐色 黒褐色	一括
6	表土一括	〃	〃				石粒まじり 白斑	良 好	明褐色 赤褐色	
7	表土一括	〃	〃				白色砂粒多い 密、角セン石 石英、砂粒含む	良	外茶褐色 褐色 内暗褐色	一括
8	C－4	〃	〃				金ウンモ 角セン石、白色 砂粒、砂粒	良	茶褐色 外一部黒斑	上層36
9	C－5	〃	〃				白色砂粒(多い) 金ウンモ 角セン石含む	良	外茶褐色 黒斑有 内暗褐色	上層326
10	D－6 D－5	〃	〃				金ウンモ 角セン石 白色砂粒含む	良 好	外淡黄橙色 淡灰褐色 内淡褐色、淡灰褐色	D－6、191 D－5、21 一括
11	D－5 D－6	〃	〃	胴部片			白色砂 金ウンモ 角セン石含む	良	外淡黄橙色 内淡黄橙色	一括、82 146、147
12	C－5	〃	〃				白色粒、金ウンモ 角セン石含む (粒は細かい)	良	外淡灰褐色 内灰褐色	一括
第48図 1	表土一括	〃	口縁部				細白砂粒 細金ウンモ 細角セン石含む	良	外淡黄橙色 内淡黒褐色～灰褐色	一括
14	表土一括	〃	〃				白斑混じり	良 好	黒褐色	一括

表11　　出土遺物観察一覧表　　(No11)

挿図番号	出土位置	遺物分類	器種	口径	器高	胴部(最大径)	胎土	焼成	色調	備考
15	C－4 C－6	〃	〃	18.2	－	－	密、金ウンモ 角セン石、砂粒 (粒が細かい)	良	褐色	上層 88 上層273

表12　　出土遺物観察一覧表　　(No12)

番号	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見
C－6－一括	石鏃	(2.0)	(1.7)	(0.5)		粘板岩製。緩やかな凹基をなす。器面は荒れ、先端部・基部を欠損。
C－6－60	石鏃	1.35	1.3	0.3		粘板岩製。深い凹基をなす。先端部を欠損。
C－7－一括	石鏃	2.4	1.7	0.6		粘板岩製。緩やかな凹基をなす。平面形は近二等辺三角形を呈する。基部の一部を欠損。
C－6－一括	異形石器（石匙？）	2.8	2.1	0.6		粘板岩製。ほぼ完形。基部は深い凹基をなし、先端部は平坦に近い。
C－6－一括	石錘	4.6	5.0	1.3	33.0	左右に打ち欠きによる抉りを有する。
C－6－P 2	石錘	4.2	4.9	2.5	70.0	左右に打ち欠きによる抉りを有する。
C－7－土壙③	石錘	4.1	5.7	1.1	33.0	左右に打ち欠きによる抉りを有する。
B－7－一括	磨製片刃石斧	10.4	5.3	2.3		刃部の一部を欠損。ローリングを受け器面が荒れる。
C－6－179	磨製片刃石斧	9.0	6.4	1.7		刃部には表裏ともに丁寧な磨研。両側縁に打ち欠きによる大きな抉りを有する。
B－6－一括	磨製片刃石斧	8.6	3.8	1.4		蛇文岩製。表裏ともにほぼ全面に丁寧な磨研。刃部は鋭利で、研ぎ直しか？
D－4－1	磨製片刃石斧	7.6	4.1	1.4		蛇文岩製。完形。表裏面のほぼ全面に磨研が及ぶ。刃部は鋭利で特に裏面の磨研は丁寧。
D－4－2	磨製片刃石斧	8.1	3.9	1.3		完形。刃部と右側縁に磨研痕をよく残す。その他の面はほぼ自然面のまま。
D－6－1	磨製片刃石斧	11.4	4.55	1.9		ほぼ完形。表裏面ともに全面に丁寧な磨研。刃部には細かい刃こぼれが見られる。
D－6－2	磨製片刃石斧	15.6	6.1	1.75		蛇文岩製。完形。表裏面のほぼ全面に磨研が及ぶ。刃部は鋭利、研ぎ直しか？
D－6－3	磨製片刃石斧	10.9	4.9	2.5		表面中央部を大きく破損するが、その他のほぼ全面に磨研が行き届く。
D－6－4	磨製片刃石斧	8.6	4.8	1.6		完形。表裏面ともに非常に丁寧な磨研。刃部は鋭利。ごくわずかに細かい刃こぼれあり。
D－6－5	局部磨製片刃石斧	13.3	9.5	3.3		表裏面ともに自然面をかなり残しており、わずかに刃部に磨研を施す。
D－6－6	磨製片刃石斧	8.5	3.8	1.4		ほぼ完形。刃部と側面の一部の磨研は丁寧。刃部には細かい刃こぼれあり。
D－6－一括	磨製片刃石斧	9.4	4.8	1.7		表面全部及び裏面刃部の磨研は丁寧である。刃部には使用痕が数カ所見られる。
採集		12.2	20.4	1.5		偏平な楕円形を呈する石板。特に使用痕は見られない。

第２節　縄文晩期甕棺墓・弥生中期甕棺の調査

(1)全体出土状況

縄文晩期の甕棺墓，弥生中期の甕棺が検出されたのはＣ－７・８グリッドとＥ－13グリッドを中心とした狭い範囲であった。一覧表にまとめると次表のようになる。

表13　　甕棺墓，甕棺一覧表

No.	遺構名	出土グリッド	土壙規模（m） 長径×短径×深さ	出土遺物
1	第１号甕棺墓	Ｃ－７グリッド	0.77×0.56×0.10	甕、小壺
2	第２号甕棺墓	Ｃ－7.8グリッド	0.95×0.71×0.08	甕
3	第３号甕棺墓	Ｃ－８グリッド	0.86×0.71×0.31	壺、甕、管玉
4	第４号甕棺墓	Ｃ－８グリッド	0.72×0.71×0.28	壺、甕、管玉
5	第５号甕棺墓	Ｃ－８グリッド	0.75×0.65×0.16	壺、甕、小型壺、管玉
6	第６号甕棺墓	Ｃ－８グリッド	1.17×0.79×0.18	小壺
7	弥生中期甕棺	Ｅ－13グリッド	0.91×0.70×0.69	甕棺

以上の遺構名は、弥生時代で明らかに甕棺が成立しているものについては甕棺の名称を使用することができるが、地域的に縄文晩期と弥生前期についての時期区分や、墓制の成立など不明確な状況であり、適当な名称が確定していないのが実情であり、以下の事項なども考慮して甕棺墓の名称を用いてみた。

○遺構内から出土した甕は総体的に夜臼式の古い時期の範疇にはいるもので、板付Ⅱ式と伴うことのある夜臼式土器などよりも古い時期のものと判断される。

○明らかに６基の遺構は埋葬施設と判断でき、集団墓域を形成しているようであり、弥生的墓制の萌芽を示すものと判断される。

○壺棺、甕棺、土壙、墓壙などの呼称はそれぞれに全体と包括する名称として今回は適当とは思われない。

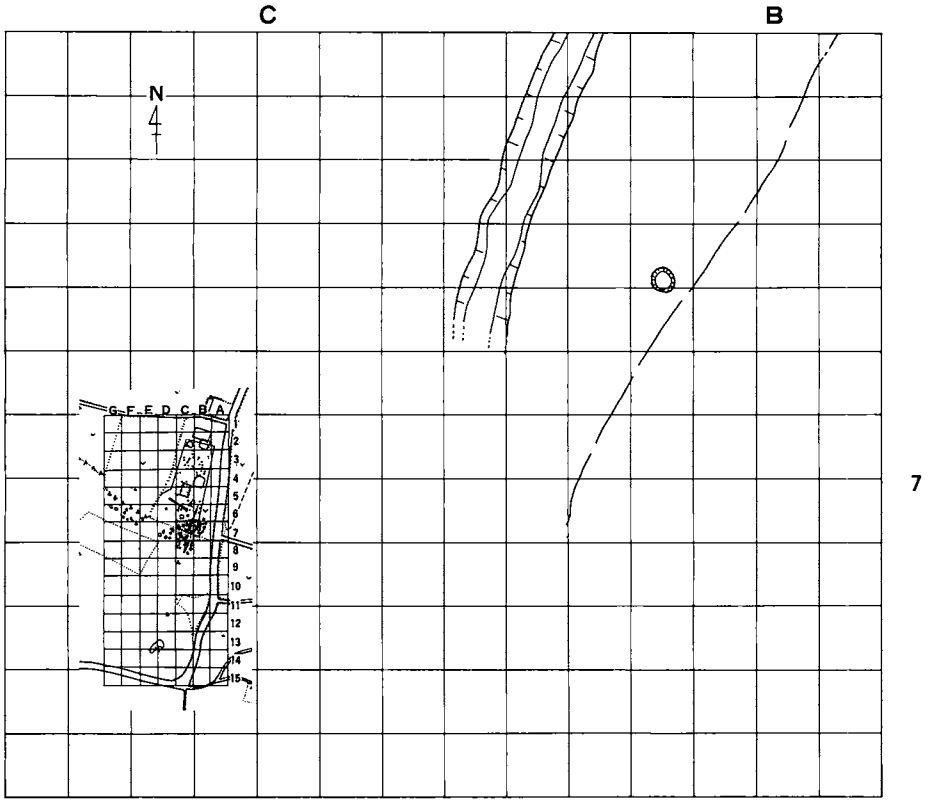
○弥生的な埋葬形態が成立した時点をもって甕棺墓の開始とすることが提唱され、今回はその直前位のものと考えている。

(2)各遺構について

第１号甕棺墓（第57図）(5)

〔出土状況〕

第１号甕棺墓はＣ－７グリッドで検出され、他の５基の甕棺墓群とは北側方向に約５ｍ離れた場所に作られている。上半部分を大きく破壊されているが、現況で、土壙の形状はやや長楕円を呈し、0.77×0.56×0.10ｍの規模が測れる。土壙底は平たく掘られている。主軸は



第52図　B・C－7グリッド(北側)実測図

0　1　2m

N－58°－Eにとる。甕の胴部片と小壺が出土している。

〔出土遺物〕

小型壺（第65図）(5)

胎土：微細な砂粒を含み緻密。

調整：口縁部内器面から胴部にかけて丁寧にヘラ磨きされている。内器面は底部からヘラでナデあげた後ヨコナデ。頸部に削り出しによる沈線が巡る。

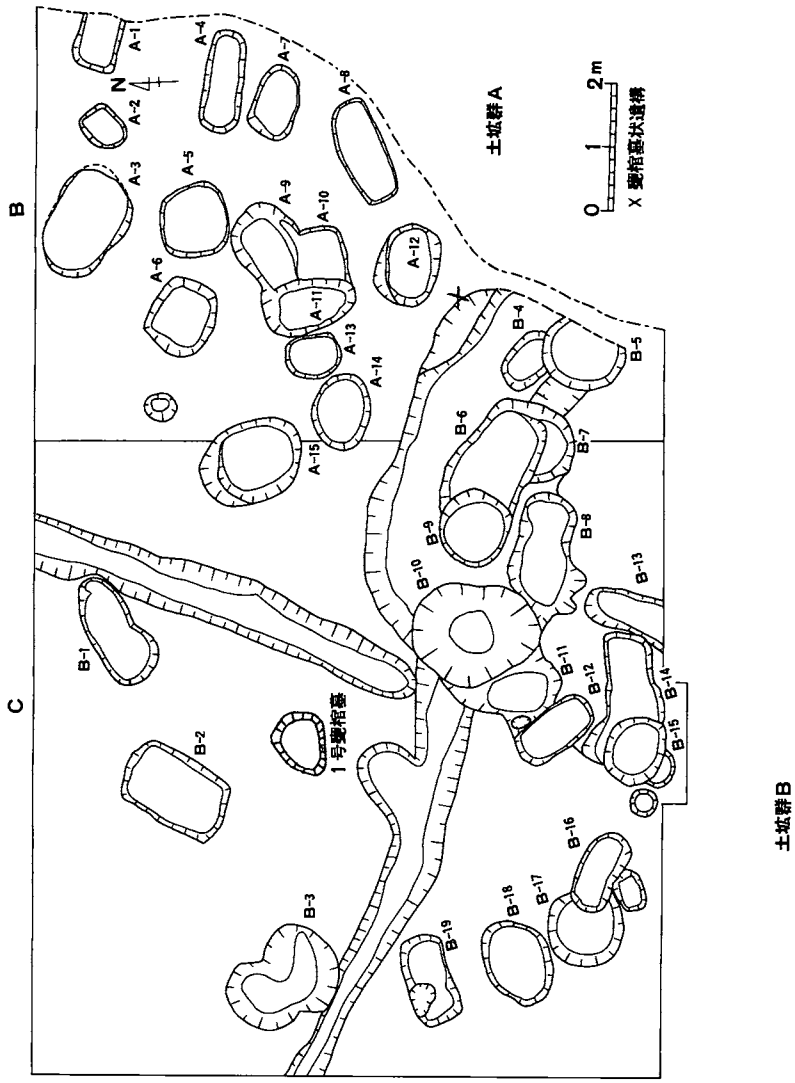
焼成：良好

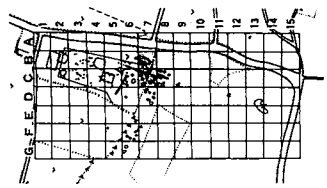
色調：外器面はにぶい黄橙色～黒色、内器面は黒色。

第２号甕棺墓（第56図）

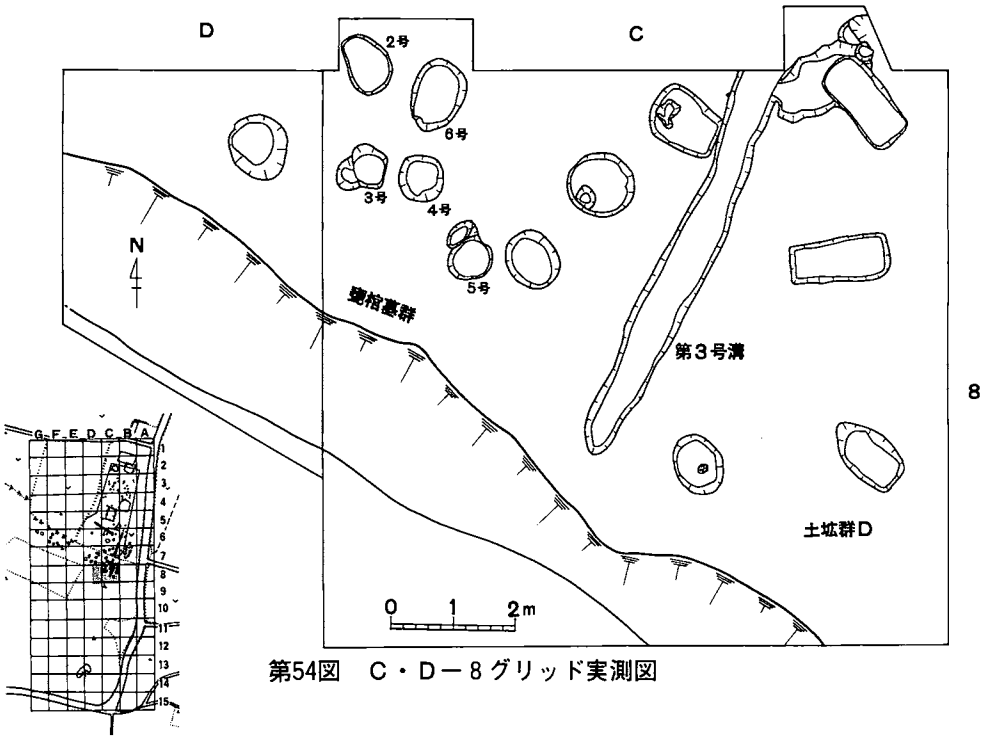
〔出土状況〕

第２号甕棺墓はC－７．８グリッドで検出され、第３～６号土壙と甕棺墓群をなしている上半部分を大きく破壊されているが、現況で、土壙の形状はやや長楕円を呈し、0.95×0.71×0.08mの規模が測れる。土壙底はほぼ平坦に掘られている。主軸はN－35°－Wにとって

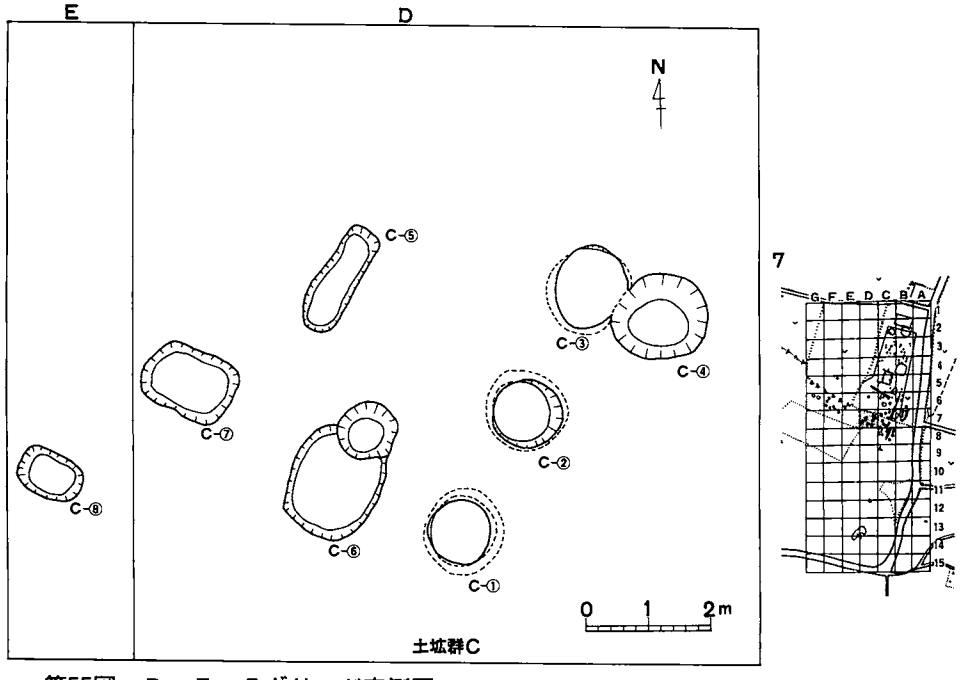




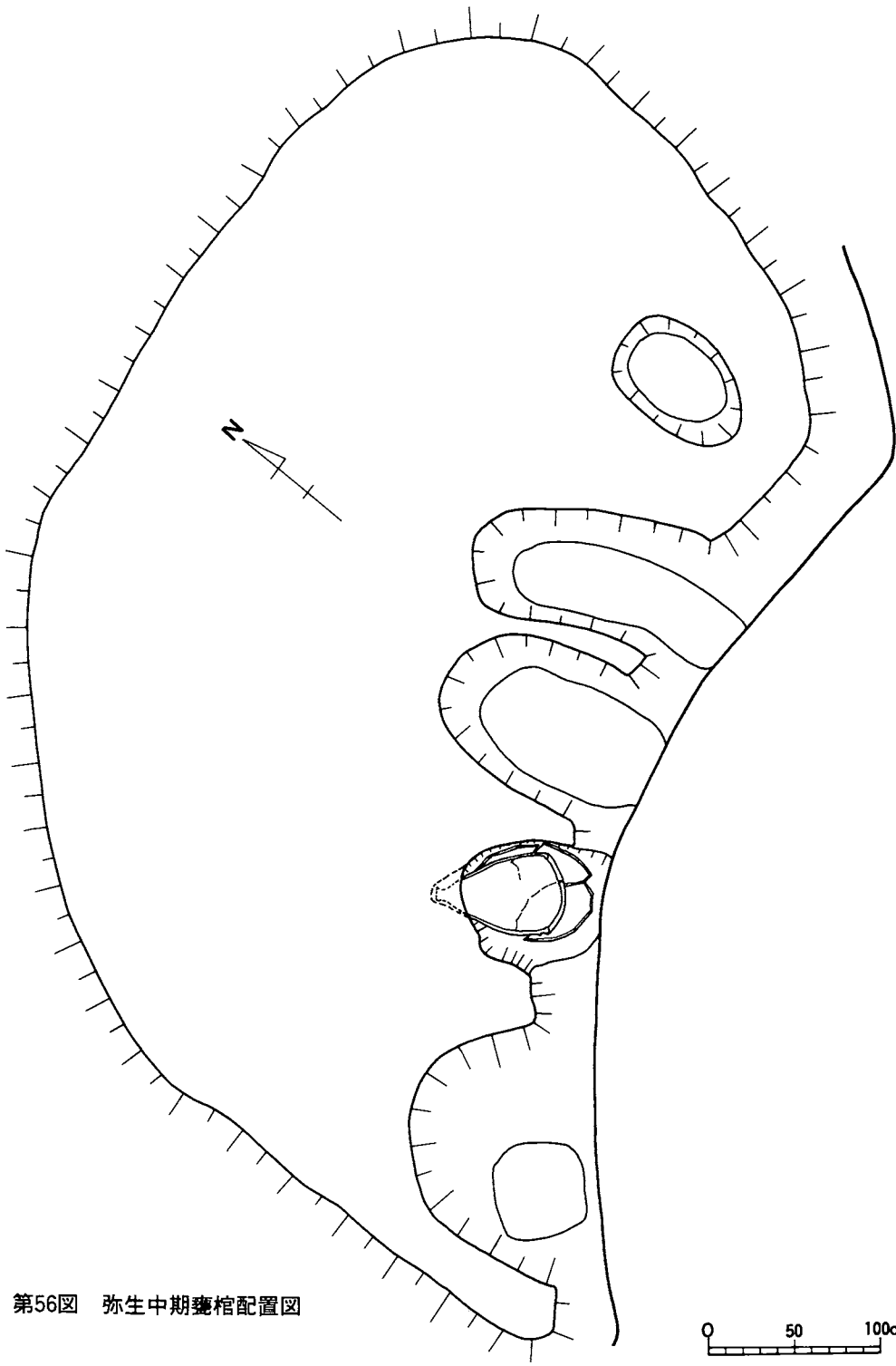
第53図　B・C－7グリッド(南側)実測図



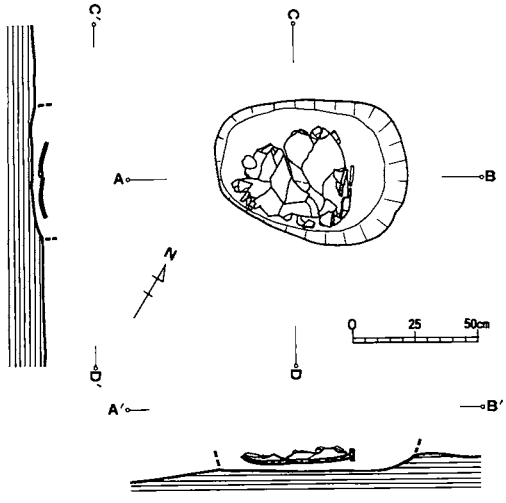
第54図　C・D－8グリッド実測図



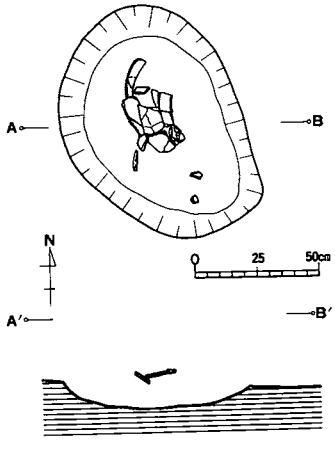
第55図　D・E－7グリッド実測図



第56図　弥生中期甕棺配置図



第57図　第１号甕棺実測図



第58図　第２号甕棺実測図

いる。甕片が出土している。

〔出土遺物〕　甕（第65図）(2)

胎土：砂粒を多量に含む。堅緻。

調整：外器面は突帯以下に粗いハケ状の工具（草を束にしたもの？）で、タテ、ヨコ方向にナデ調整を施した後、ヘラ状工具で研磨している。

口縁部はくびれ部付近より口縁部までヘラ状工具によるナデ調整を行い、更にナデ調整を行っている。以下はナデ調整と思われる。

焼成：良好

色調：内外器面とも黒褐色を呈する。

備考：突帯部の刻みは深く施文される部分と、粗く浅い部分がある。（二条共に共通する）。

くびれ部凸帯状に吹きこぼれによるススが付着しており、日常品からの転用と考えられる。

第３号甕棺墓（第59図）

〔出土状況〕

第３号甕棺墓はＣ－８グリッドで検出され、第２・４～６号甕棺墓と甕棺墓群をなし、中心に位置している。上半部分を大きく破壊されているが、現況で、土壙の形状は双楕円形を呈し、0.86×0.71×0.31ｍの規模が測れる。土壙は壺の形状に合わせて掘られており、ややハング上になり、土壙底はやや起伏がみられる。主軸はＮ－78°－Ｗにとっている。合口で下半が壺で、上半は２種の甕が用いられている。壺の中から15点の管玉が出土している。

〔出土遺物〕

①壺（第66図）(1)

胎土：直径３㎜程の白色石材、細かい砂粒を多く含み、堅緻である。

調整：（内器面）口縁部は指頭で成形の後、ハケ状工具によって調整。頸部はナデ調整と思われるが、以下磨耗が激しく不明。

（外器面）口縁部をハケ状工具で調整した後、以下全面をヘラ状工具によって粗く研磨している。

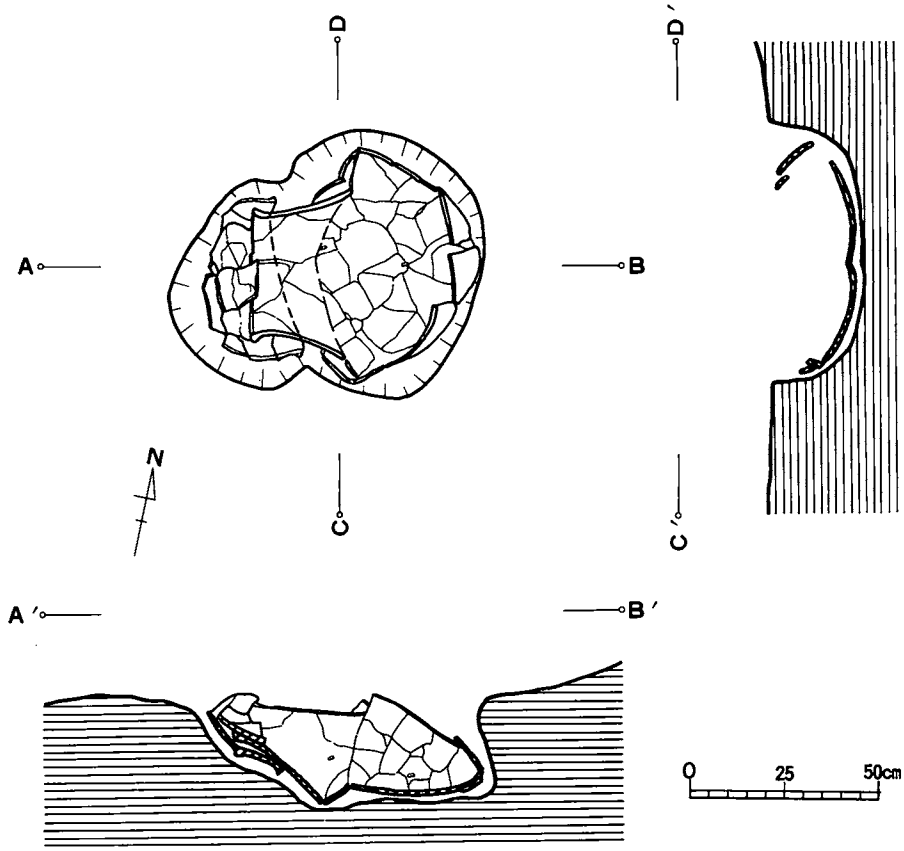
焼成：良好

色調：（内器面）明赤褐色。

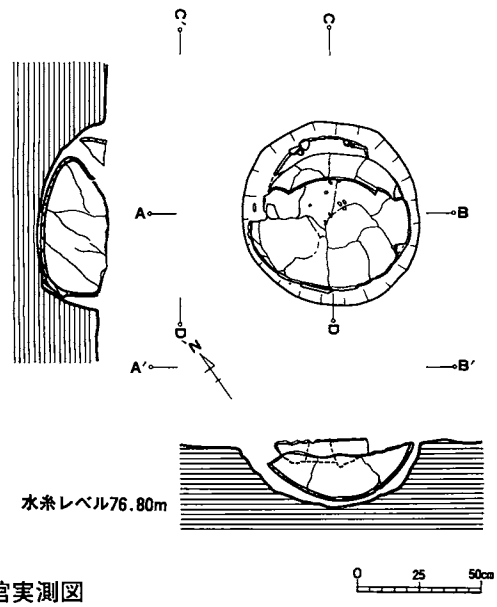
（外器面）橙色。胴部には黒斑がみられる。色調は均一ではなく、まだらである。

備考：口縁部で接合痕跡が確認でき外傾接合である。以下は接合痕が不明確であるが粘土帯の幅は広く、接合面（痕）は大きく外傾する。

頸部は幅12～15㎝、肩部は12～15㎝の単位でヘラ磨きが施されている。



第59図　第３号甕棺実測図



第60図　第４号甕棺実測図

頸部から肩部にかけては器厚がわずかに肥厚し、器面には削り出しによる段がみられる。

底部はわずかに上げ底気味である。

②甕（第66図）(3)

胎土：砂粒、小礫を多く含み、堅緻である。

調整：（外器面）突帯間は条痕調整で、突帯の上下はナデ調整が行われている。胴部は突帯下が横位で、胴部から底部にかけては縦位の板状工具によるナデ調整。全体的に調整は粗雑。

（内器面）くびれ部以下は横位の板状工具による削り。口縁部にかけてナデ調整。

焼成：良好

色調：（外）にぶい橙色～褐灰色。

（内）にぶい橙色。

備考：口唇部はナデ調整である。突帯の刻目は全体に浅いが、２段共に、半面がより深く刻まれ、残り半面は極めて浅く弱い施文である。（前面と後面を意識している？）施文後の突帯に対する調整は行われていない。

③甕（第65図）(4)

胎土：砂粒を多く含み、密。

調整：外器面は突帯文の上下を条痕調整で成形し、底部から胴下半部にかけてヘラ削り、胴上半部から口縁部はヨコナデ調整。

内器面は底部から胴下半部がヘラナデ調整。口縁部は条痕調整の後、ナデ調整。

焼成：器壁が厚いためやや不良。

色調：内外器面共ににぶい橙色から黒褐色を呈する。

備考：突帯の刻目は浅く粗雑である。２条の突帯の間は条痕調整の後、特に強い指ナデを施しているところがみられる。

第４号甕棺墓（第60図）

〔出土状況〕

第４号甕棺墓はＣ－８グリッドで検出され、第２・３～５・６号甕棺墓と甕棺墓群をなし、中心に位置している。上半部分を大きく破壊されているが、現況で、土壙の形状はほぼ円形を呈し、0.72×0.71×0.28ｍの規模が測れる。土壙は壺の形状に合わせて掘られており、弧状である、土壙底もやや弧状である。主軸はＮ－34°－Ｗにとっている。合口で下半が壺で、上半は甕であることが判断される。壺の中から15点の管玉が出土している。

〔出土遺物〕

壺（第66図）(8)

胎土：砂粒、小石（径１cm程度）を多量に含み、粗い。

調整：内器面は磨耗が激しく不明。

外器面はハケ目調整の後、ヘラ磨きを施しているものと思われる。

焼成：不良。

色調：褐色

備考：大型の壺である。口縁部を欠失。頸部と肩部の接合痕跡が認められ、その部分には小さな段が生じている。底部は円盤接合で、接合部に粘土をかぶせて底部を成形している。

第５号甕棺墓（第61図）

〔出土状況〕

第５号甕棺墓はＣ－８グリッドで検出され、第２～４・６号甕棺墓と甕棺墓群をなしている。上半部分を大きく破壊されているが、現況で、土壙の形状はやや長楕円形を呈し、0.75×0.65×0.16ｍの規模が測れる。土壙は壺の形状に合わせて掘られており、土壙底はほぼ平坦である。主軸はＮ－72°－Ｗにとっている。合口で下半が壺で、上半は甕であることが判断される。小壺が出土している。壺の中からは19点の管玉が出土している。

〔出土遺物〕

小壺（第65図）(6)

胎土：細かい砂粒を含み、堅緻。

調整：外器面は口縁部から底部までヘラにより全面研磨されている。内器面は頸部まで研磨され、以下はナデ調整。

焼成：良好。

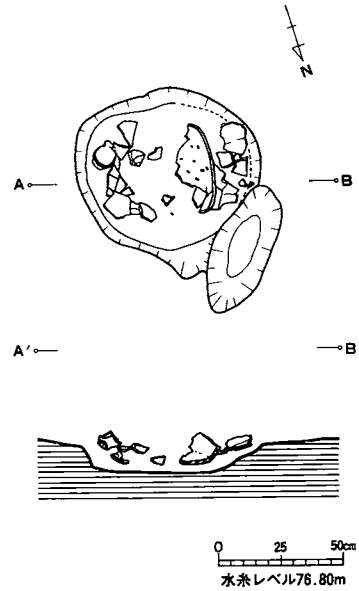
色調：外器面はにぶい橙色、内器面はにぶい褐色。

備考：頸部や底部に接合痕がみられる。

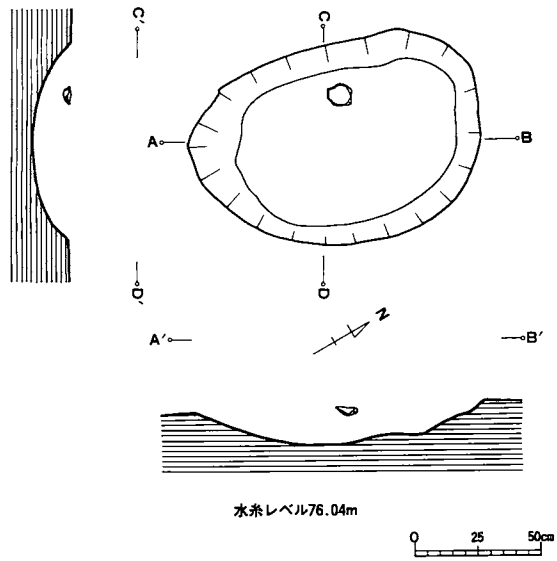
第６号甕棺墓（第62図）

〔出土状況〕

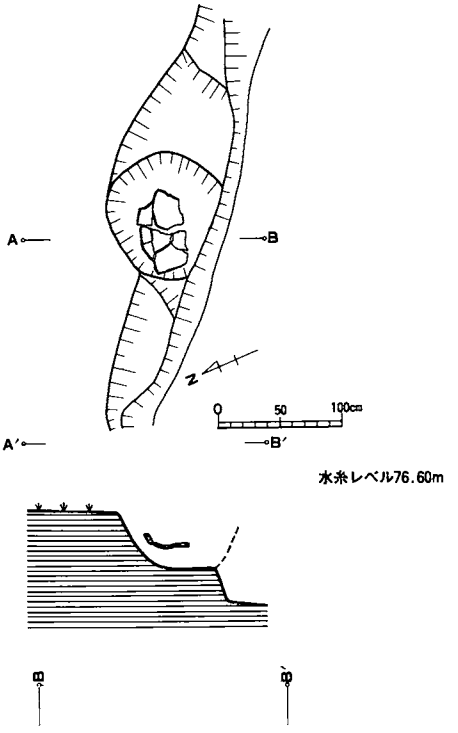
第６号甕棺墓はＣ－８グリッドで検出され、第２～５号甕棺墓と甕棺墓群をなしている。上半部分を大きく破壊されているが、現況で、土壙の形状はほぼ円形を呈し、1.17×0.79×0.18ｍの規模が測れる。土壙底は皿状を呈している。主軸はＮ－29°－Ｅにとっている。小壺１点が出土している。



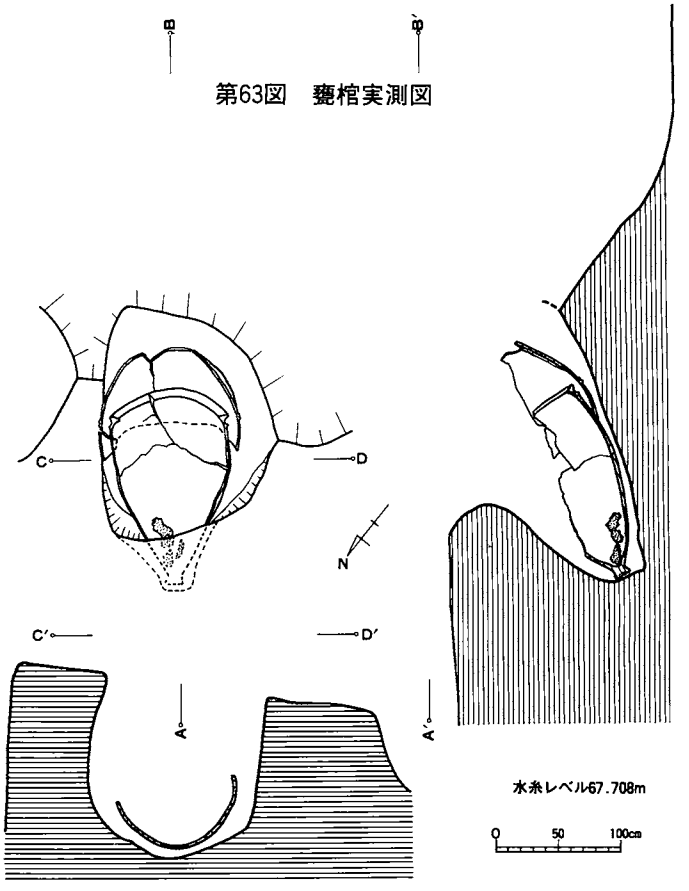
第61図　第５号甕棺実測図



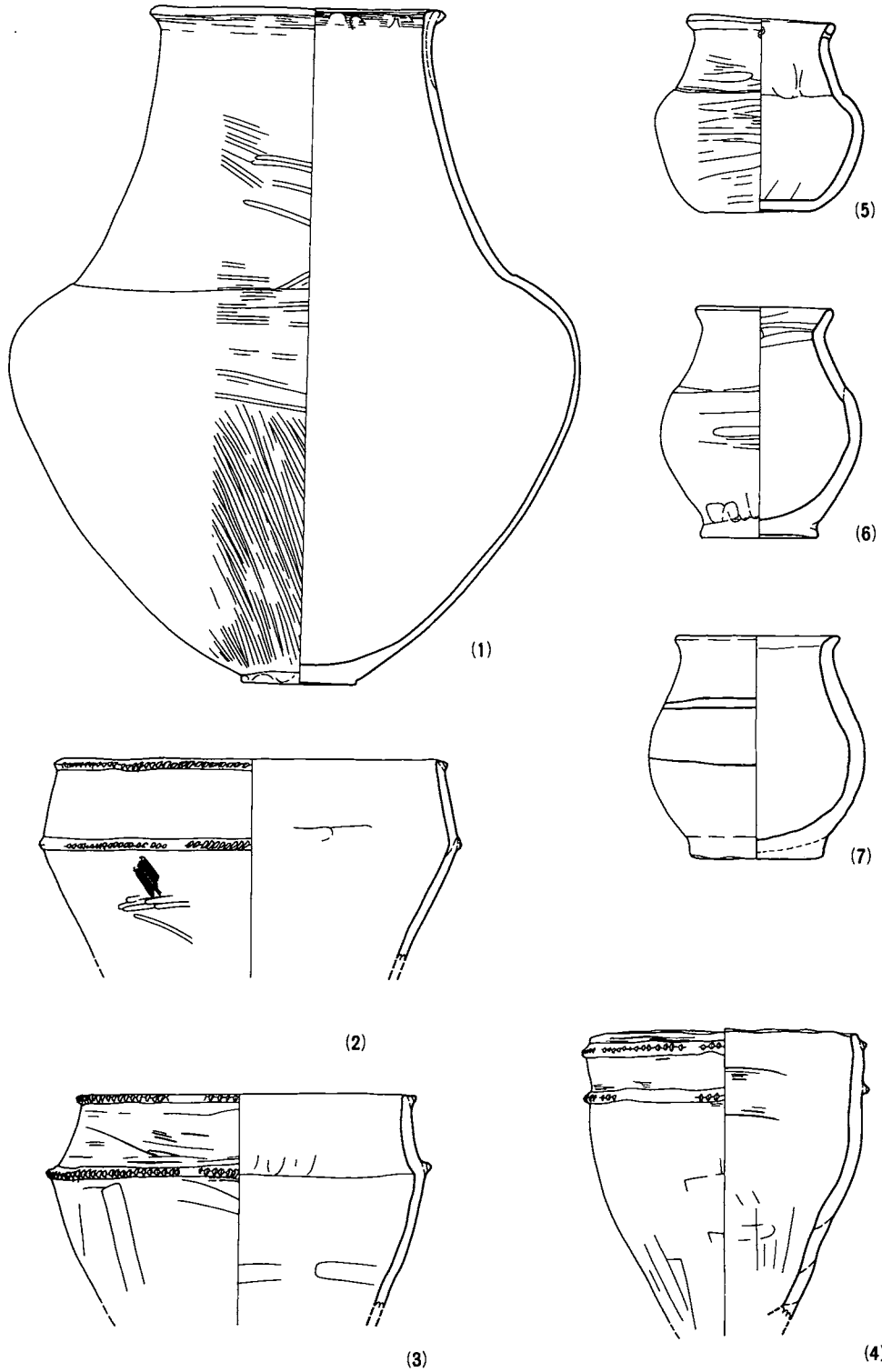
第62図　第６号甕棺実測図



第63図　甕棺実測図

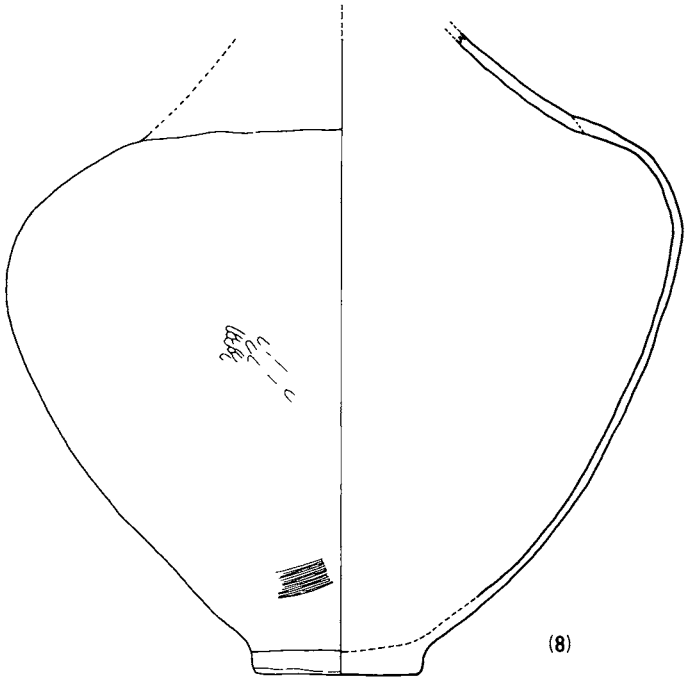


第64図　弥生中期甕棺実測図



scale (1)〜(4): $\frac{1}{6}$
(5)〜(7): $\frac{1}{3}$

第65図　甕棺墓土器実測図(１)



Scale：$\frac{1}{6}$

第66図　甕棺墓出土土器実測図(２)

〔出土遺物〕

小壺（第65図）(7)

胎土：砂粒、小石粒を含み堅緻。

調整：手ナデ調整。

焼成：良好。

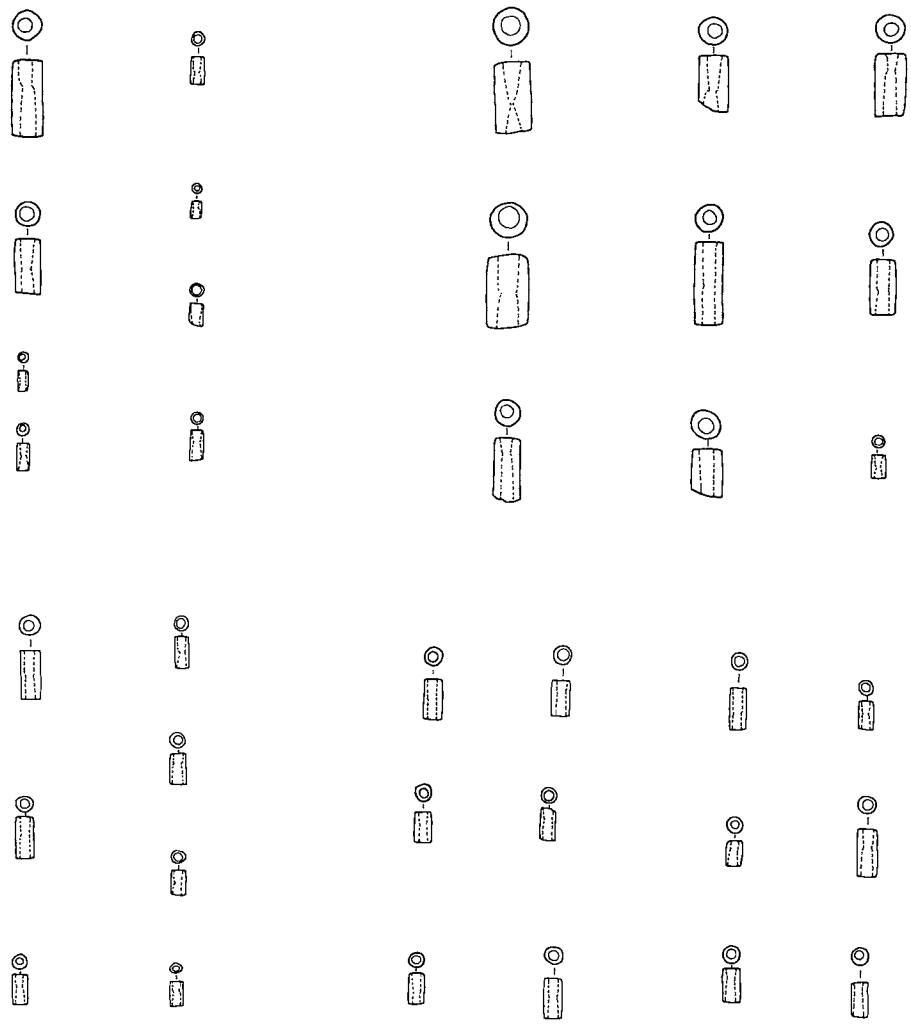
色調：褐色～黒褐色。

備考：頸部や底部には接合痕が認められる。また、頸部と胴部には３条の沈線を施している

(7)中期甕棺（第64図）

〔出土状況〕

北側台地縁に立地する甕棺墓群とは出土地点を別にして検出された。すなわち、Ｃ－８グリッドを中心とする甕棺墓群からは南側へ直線的に約60ｍ下がった地点に位置している。Ｄ・Ｅ－13・14グリッド内に当たるが、付近は旧道路の建設や農耕地の整地のため著しい削平が行われており、旧地形の残存地はわずかであった。この小島のような残存丘（約6.6×1.7ｍ）の南側が、更に削り取られた際に甕棺が露出し発見されたものである。この第１号



Scale：$\frac{2}{3}$

第67図　甕棺墓出土管玉実測図

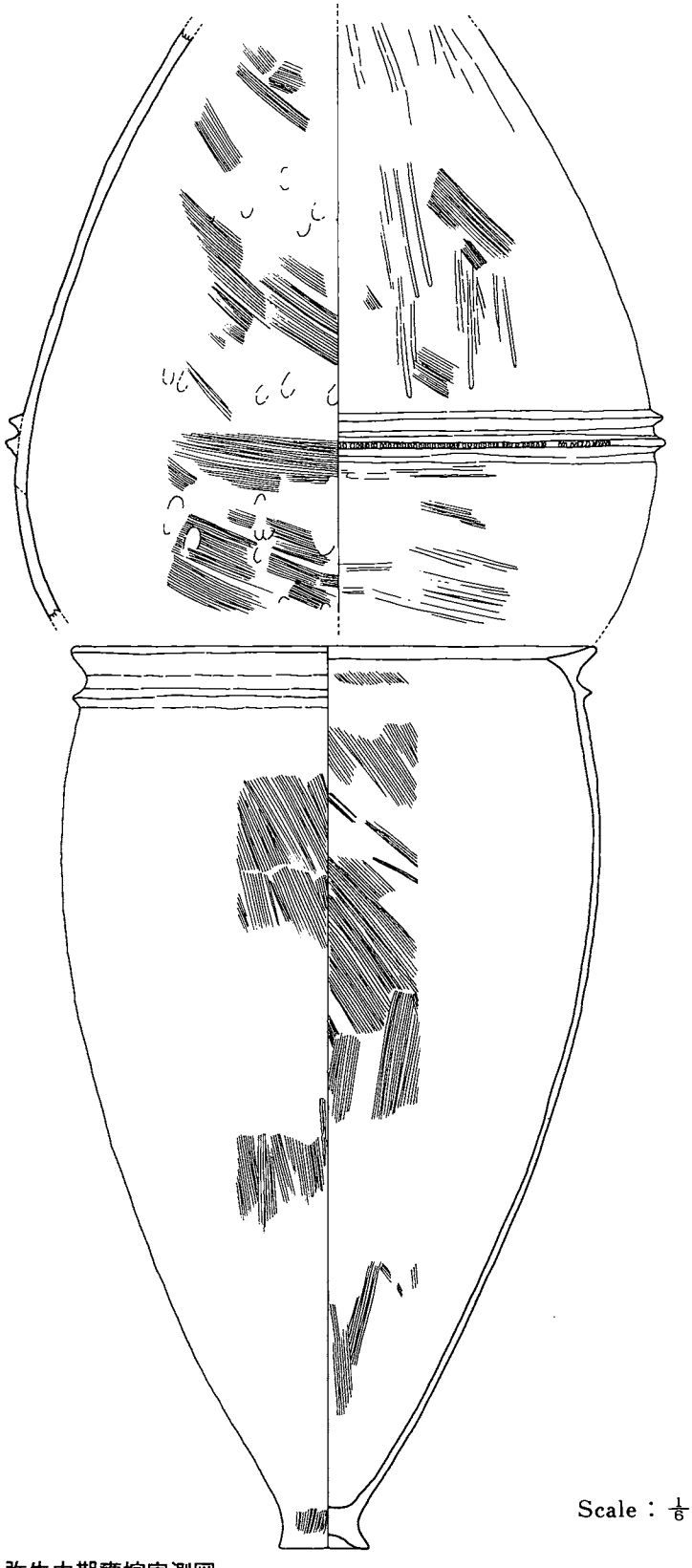
甕棺の両側には、甕棺が抜き取られたと考えられる4基の土壙を確認できるので、付近には数多くの甕棺が存在していたものと考えられよう。

第1号甕棺の土壙は0.91×0.70×0.69mの規模で、主軸はN－50°－Eにとる。下甕の大きさに合わせたかのように、やや斜めの土坑を掘り、上甕を被せている。下甕にわずかに人骨が残っていたが、副葬品は出土していない。上甕の上部は下甕に合わせるため打ち欠かれている。

〔出土遺物〕2点

①甕棺（第68図）

胎土：砂粒、白色の小石粒を多く含む。緻密。



第68図　弥生中期甕棺実測図

調整：内外器面共に縦方向のハケ目調整し、口縁部内外にはヨコナデ調整を施している。
ハケ目は外器面は上→下、内器面は下→上。

焼成：良好。

色調：褐色～明褐色。部分的にススが付着している。

備考：底部はやや上底になっている。

②甕棺（第68図）

胎土：砂粒、白色の小石粒を多く含み粗い。

調整：外器面は底部がヘラ削り、胴部はハケ目調整を施した後、全体にごく粗いヘラ　突帯の周辺はヨコナデ調整。刻目はごく浅い。
内器面は全面ハケ目調整（反時計回りに下から上へ）。指頭圧痕がみられる。調整、仕上げ共に粗い。

色調：褐色～暗褐色。

備考：口縁部は打ち欠いて使用したものと思われる。

(3)まとめ

以上のように6基の甕棺墓と1基の甕棺の報告を行ってきたが、以下、これらについてのまとめとしたい。甕棺墓の名称を使用することについては先に述べてきたところであり、縄文時代晩期の甕棺墓ということで報告してきている。

狭いスペースの中ではあるが、同時期の6基の甕棺墓がまとまって検出されたことにより、周辺に生活遺構の存在もなく、縄文時代としてイメージされているような単独の埋葬形態とは全く異なり、集団墓の形態をとることを明らかにしている。

土壙はほとんどが底部分が残されていたに過ぎないが、形状はほぼ円形か長楕円であることがわかり、壺形土器を主棺にして、甕形土器を蓋にした複式棺と呼ぶことができようか。土壙底部の観察では土器の形状に合わせた掘り込んだ様子も認めることができる。

主棺となる長頸型の壺形土器は埋葬用に作られはじめられたことが指摘されているが、一方の甕形土器には煤が付着したものが認められ日用土器の転用と考えられる。

さて、甕棺墓から出土する土器は突帯文を有する甕と、大型で長頸型の壺、そして近くに添えられる小壺で土器のセットを成していることが明らかである。それに棺内に管玉を副葬した状態で検出されたのである。

第3号甕棺墓出土の壺形土器は器高59.3cm、口径25.8cm、胴径49.9cmを測る大型のもので、胴部が大きく膨らみ、頸部が長い器形である。口唇部がやや外に突出し、底部は小さめの平底でやや上げ底気味である。器面の調整はナデ調整の後、ヘラ磨きにより研磨仕上げを呈している。第4号甕棺墓出土の壺形土器も同様の特色を有しているが、頸部に最大径が求めら

れ、口縁部を欠失しており定にしないが、口縁部がかなり窄まる形状である。

甕形土器は特徴的に胴部から「く」字形反転し、2条の刻目突帯を巡らせている。刻目突帯は口縁部端とやや下がったものとが認められる。

小壺は口縁部短く外反し、胴部が張りぎみで、平底をなしている。2点の底部は貼付と判断される。器面は手ナデを主調としており、一部に沈線が横走しているが文様の確認はできない。

管玉は碧玉製であり明緑灰色を主色としている。最大長16㎜、最短長3.5㎜など形状にはややバラツキがみられる。上下からの穿孔が行われており、孔の形はほぼ「U」字を示す特色を持っている。

以上のような特色によって、これらの土器は所謂「夜臼式土器」として示されるものであろうし縄文晩期の時期が想定される。周知のように、夜臼式土器は弥生前期初頭の板付式土器と一緒に出土することが知られているが、今回は板付式土器と判断される土器の出土はないので、今回は板付式土器と共伴する以前の夜臼式土器である可能性が強まる。時間的には他地域に板付式土器が出土している時期である可能性も考えられるところであるが、共伴直前の夜臼式土器組成状況を良好に示す資料であることが主張されよう。

（江本・山下・松村）

表14　　出土管玉一覧表　　(No 1)

(1)第3号甕棺墓　2点

番号	長さ×最大幅×孔径(mm)	色　調	石　材	備　　考
①	15×6×3（上） 3（下）	明緑灰色	碧　玉	縦方向に明緑灰色の縞が走る。一部研磨されていない。
②	11×10×3（上） 2.5（下）	明緑灰色	碧　玉	縦方向に明緑灰色の縞が走る。一部研磨されていない。

(2)第4号甕棺墓　15点

番号	長さ×最大幅×孔径(mm)	色　調	石　材	備　　考
①	5.5×2.5×1.5（上） 2.0（下）	明緑灰色	碧　玉	緑、白色が混じり合う。外表は傷が多い。かすかに段がある。
②	5.5×3.0×1.5（上） 2.0（下）	明緑灰色	碧　玉	埋土中　縦方向に明緑灰色の縞が走る。一部研磨されていない。
③	3.5×2.5×1.5（上） 2.0（下）	明緑灰色	碧　玉	かすかに段がある。上端の凹んだ部分は良く磨かれていない。
④	4.0×2.0×1.2（上） 1.5（下）	明緑灰色	碧　玉	
⑤	4.5×2.6×2.0（上） 2.0（下）	明緑灰色	碧　玉	下半分欠損。
⑥	6.0×2.7×1.7（上） 1.7（下）	明緑灰色	碧　玉	一部欠損。
⑦	11×5.9×2.9（上）	明緑灰色	碧　玉	縦方向に緑灰色の縞。一部欠損しているが下端は長軸に水平ではない。
⑧	14×8.5×4.2（上） 4.2（下）	明緑灰色	碧　玉	上下端とも傾斜。
⑨	13×5.5×2.5（上） 2.7（下）	明緑灰色	碧　玉	色調は均一ではない。
⑩	16×5.5×2.8（上） 2.6（下）	緑灰色	碧　玉	表面は良く研磨されているが傷が多い。一部研磨されていない。

表15　　出土管玉一覧表　　(No 2)

番号	長さ×最大幅×孔径(mm)	色　調	石　材	備　　考
⑪	14×7.0×3.8（上） 3.2（下）	明緑灰色	碧　玉	下端は研磨されているが平らに均していない。孔は斜め方向に穿たれ中心を取っていない。
⑫	4.5×2.5×1.8（上） 1.8（下）	明緑灰色	碧　玉	上下端とも内側に段がはいる。
⑬	7.0×6.5×3.0（上） 4.8（下）	明緑灰色	碧　玉	両面穿孔と思われるが痕跡不明瞭。表面に傷が多い。下端は角を丸めていない
⑭	12.5×6.0×3.0（上） 3.0（下）	明緑灰色	碧　玉	緑灰色と明緑灰色とがマーブル上に混じる。表面に傷が多い。一部欠損。上端内側に段がはいる。
⑮	11.0×5.0×2.5（上） 2.5（下）	明緑灰色	碧　玉	緑灰色と明緑灰色とがマーブル上に混じる。表面に傷が多い。

(2)第5号甕棺墓　19点

番号	長さ×最大幅×孔径(mm)	色　調	石　材	備　　考
①	6.5×3.0×1.8（上） 1.8（下）	明緑灰色	碧　玉	ふるいで出土。
②	5.0×3.0×3.6（上） 3.6（下）	明緑灰色	碧　玉	やや偏平である。
③	6.3×3.2×1.8（上） 2.0（下）	明緑灰色 緑灰色	碧　玉	研磨は丁寧ではない。
④	6.0×3.0×1.5（上） 1.8（下）	明緑灰色	碧　玉	斜めに縞がはいる。
⑤	5.0×2.5×1.6（上） 1.6（下）	明緑灰色 緑灰色	碧　玉	偏平。内側に段がはいる。
⑥	9.5×4.0×2.0（上） 2.0（下）	緑灰色 明緑灰色	碧　玉	全体が良く研磨されている。やや偏平。
⑦	8.5×3.5×2.0（上） 2.0（下）	緑灰色	碧　玉	
⑧	8.0×3.7×2.0（上） 1.8（下）	明緑灰色	碧　玉	
⑨	6.0×3.5×1.5（上） 2.0（下）	緑灰色	碧　玉	内側に一部段がはいる。

表16　　出土管玉一覧表　　(No 3)

番号	長さ×最大幅×孔径(mm)	色　調	石　材	備　　考
⑩	6.2×3.1×1.9（上） 1.5（下）	明緑灰色	碧　玉	内側に微かに段がはいる。
⑪	7.0×3.8×2.1（上） 2.0（下）	明緑灰色 緑灰色	碧　玉	
⑫	6.5×3.0×2.0（上） 2.0（下）	緑灰色	碧　玉	上下端とも一部欠損。内側には穿孔痕が残る。
⑬	8.0×3.5×1.9（上） 2.0（下）	明緑灰色	碧　玉	上端は隅丸の三角形に近く下端はほぼ円形。
⑭	8.0×3.2×2.0（上） 2.0（下）	明緑灰色	碧　玉	上下端内側に段がはいるが、一周はしない。
⑮	5.0×3.2×1.5（上） 2.0（下）	緑灰色	碧　玉	上下の孔径が異なり、上端は水平ではない。
⑯	7.0×3.5×2.0（上） 2.0（下）	緑灰色	碧　玉	
⑰	5.6×5.5×1.8（上） 1.8（下）	明緑灰色	碧　玉	
⑱	9.5×4.0×2.0（上） 2.2（下）	緑灰色	碧　玉	
⑲	7.0×3.2×1.8（上） 1.8（下）	明緑灰色	碧　玉	下端の欠損は成形時のものと思われる。

第３節　住居跡・掘立柱建物の調査

(1)遺構出土状況

２軒の住居跡を検出している。第１号住居跡はB－４グリッドに、第２号住居跡はB－２グリッドにそれぞれに位置している。両者は約10ｍも離れて作られている。前者の南側には掘立柱建物が付属している。この第１号住居跡および掘立柱建物から南側は、ほどなく傾斜地になるので、住居の構築には不適であり広がりは検出されていない。また、広い平坦地が拡がるこの地区において住居が２軒で済まされるとは考え難いので、削平を受けてしまっている東西方向に住居の拡がりが求められるものであろう。時期的には８世紀代の所産と判断される。

(2)住居跡

第１号住居跡　第70図

長軸6.14ｍ×短軸5.67ｍの規模で形状は方形を呈する住居跡である。上部を大きく削平れており最大器高20cm程度が残存していたものである。主軸はＮ－19°－Ｅをとっている。床面には疎らな状態で硬化面がみられる。柱穴は明確に検出ができていない。北側壁面に添ってカマドが設けられている。カマドの奥壁は住居の壁面に接しているが壁面外側への煙道の設置は認められない。

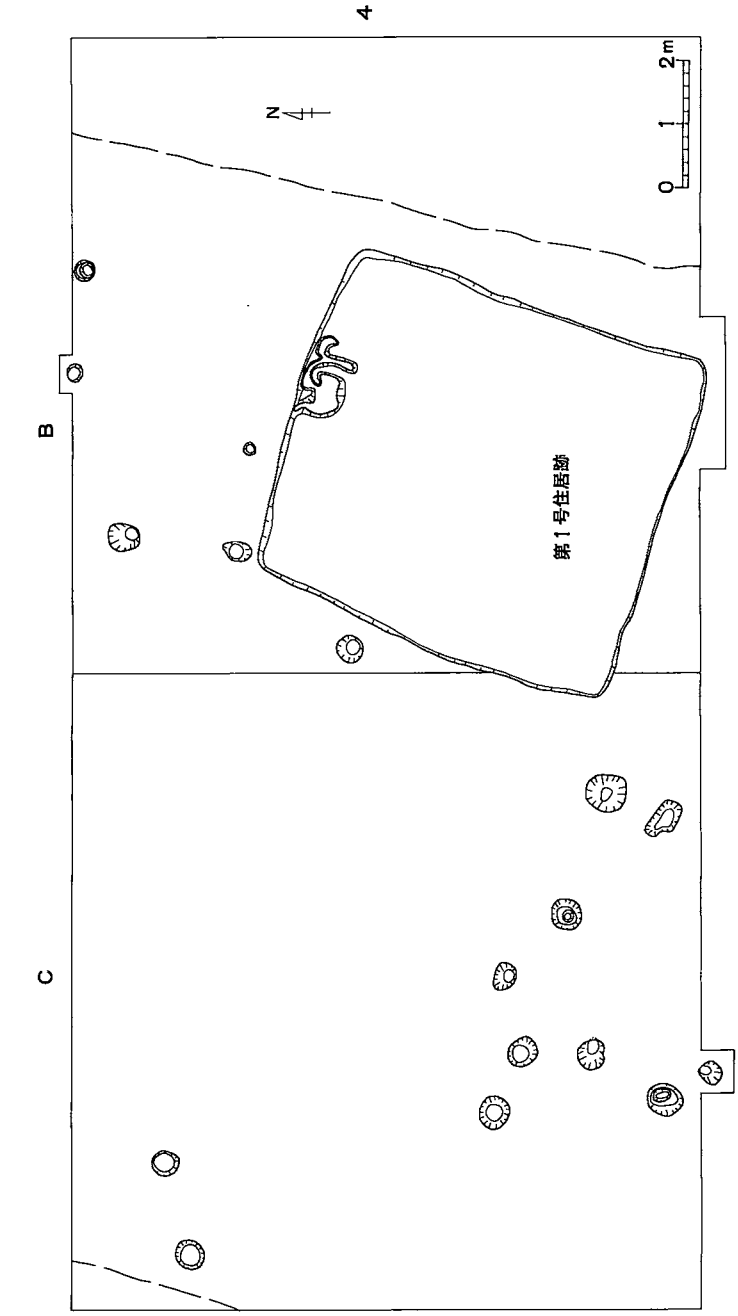
土器細片の出土がある。第72図(1)はカマド北側の床面から出土した土師器の皿である。復原によるが口径16.3cm×器高2.8cmで、色調は黄褐色を呈する。粘土紐を左まわりに捲き上げ、ロクロにより整形を施し、最後にはハケ状工具による調整も行われている。底部はヘラおこしのあとヘラ調整が行われている。

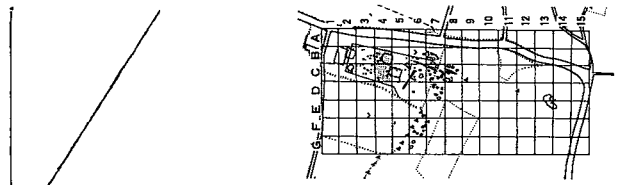
第２号住居跡　第71図

長軸5.23ｍ×短軸4.80ｍの規模で形状は方形を呈する住居跡である。上部を大きく削平れており最大器高20cm程度が残存していたものである。主軸はＮ－23°－Ｅをとっている。床面には疎らな状態で硬化面がみられる。柱穴は４本柱であることを明確に示している。北側２本の柱穴はかなり深く掘り込まれている。北側壁面に添ってやや東よりの位置にカマドが設けられている。カマドの奥壁は住居の壁面に接しているが壁面外側へ幾ばくかの煙道が設置されている。焚口など燃焼痕が著しい。灰は右側に掻きだされている。

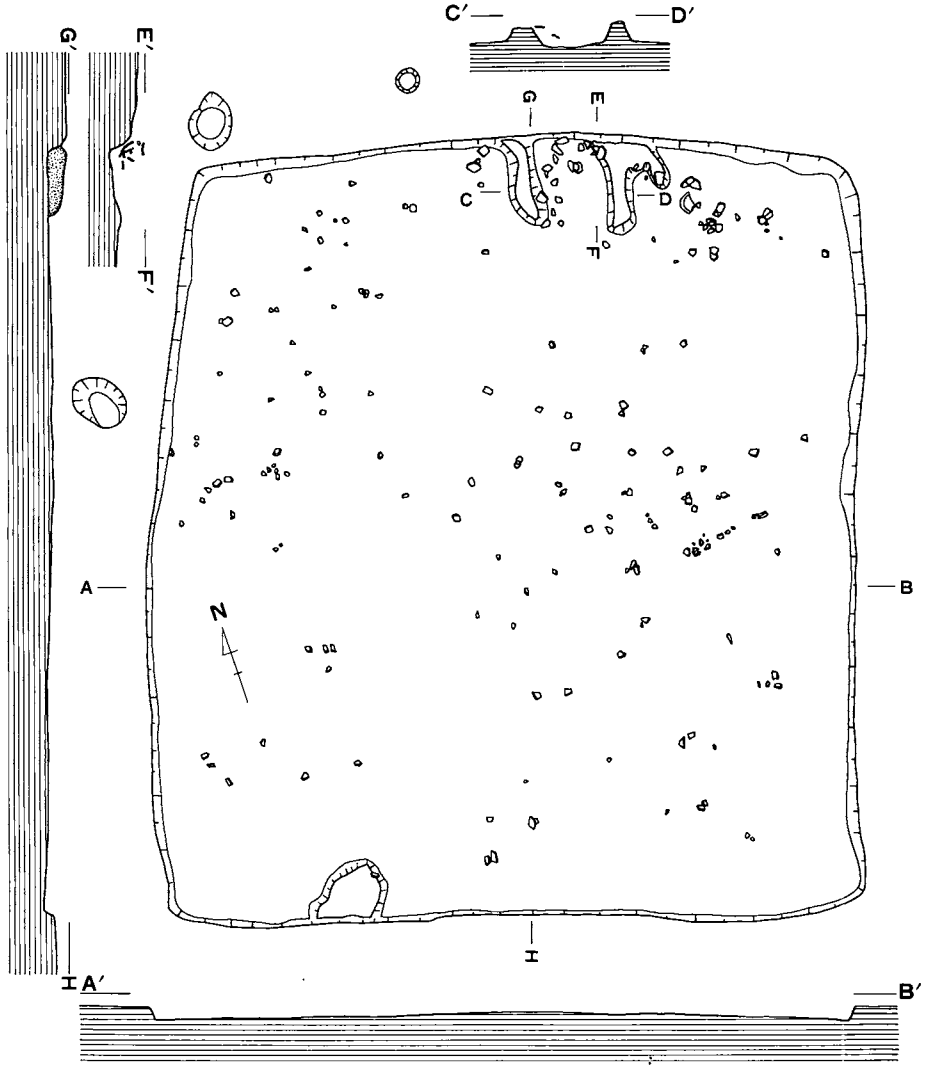
土器細片の出土がある。第72図(2)はカマド右側の床面から出土した須恵器の高台付の椀である。ほぼ完形土器であり、口径13.6cm×器高4.3cmを測り、色調は灰褐色を呈している。粘土紐を右まわりに捲き上げ、ロクロにより成形を施している。内面はロクロによる成形で終了するが、外面はヘラ状工具で回転研磨が行われている。底部はヘラおこしである。

(3)掘立柱建物　第82図





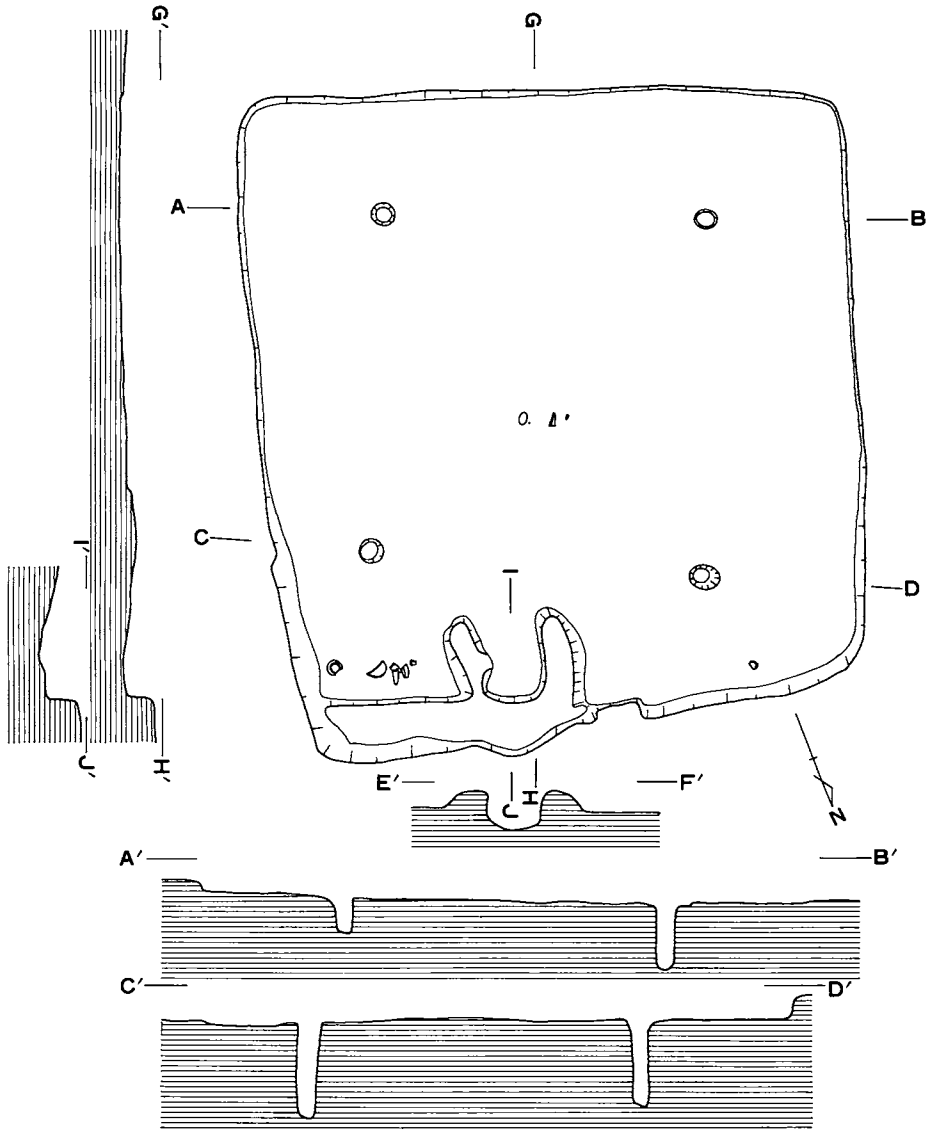
第69図　B・C－4グリッド実測図



第70図　第１号住居跡実測図

0　50　100cm

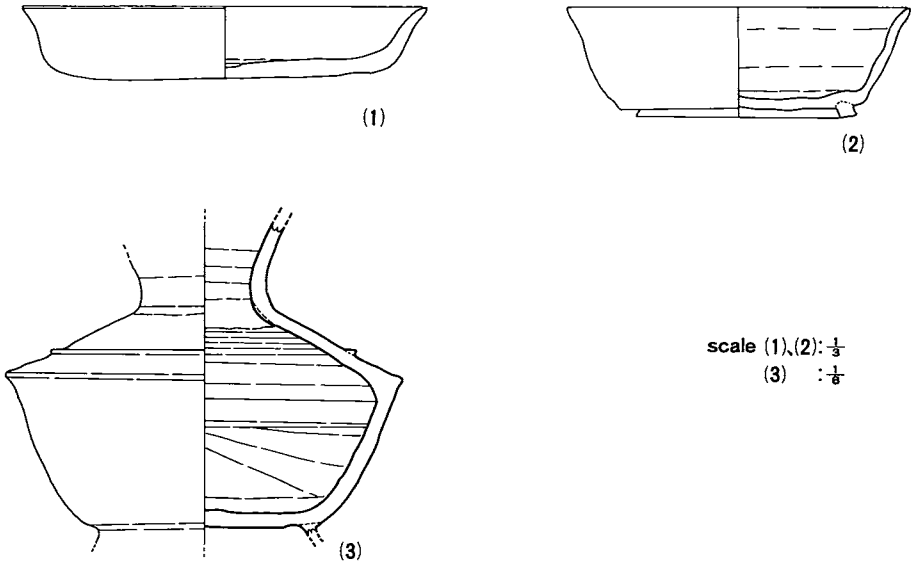
水糸レベル78.638m



第71図　第２号住居跡実測図

0　50　100cm

水糸レベル78.50m



第72図　古代土器実測図(１～３)

Ｃ－４．５グリッドで第１号住居跡の南側に建てられている。主軸はＮ－17°－Ｅで第１号住居跡とほぼ同じくしている。間数は２×３間であり、南北6.60ｍ×東西4.30ｍの規模になる。柱間は南北2.20ｍ×東西2.15ｍである。柱穴の深さはバラツキがあり、最も深いのが54.2cmで、最も浅いのは27.8cmである。平均すると43.1cmの深さとなっている。根石などは認められない。住居に対して大きな規模となるが、住居の側に設けられた倉庫の可能性が強い。

(4)出土土器

蔵骨器

須恵器。高台部と口縁部を欠損。焼成は良好で、胎土は堅級、砂粒をわずかに混入する。色調は灰色、頚部と体部の一部に自然釉（暗灰色）がかかる。ロクロの回転は右まわり。高台部と、肩部突帯は貼り付けによる。その他の部分の接合痕は確かめられない。

第４節　墓壙の調査

(1)出土状況

Ｄ－６グリッド及びＥ－５グリッドから２基の墓壙を検出している。畑や植林のための整地作業が行われているため、遺構の上部を大きく削平されており２基とも底の部分だけが残されていたものである。

(2)墓壙

第１号墓壙　第73図

Ｄ－６グリッドで検出ができた墓壙で形状は方形を呈している。長軸93.5cm×短軸68.0cmの規模で、主軸はＮ－32°－Ｅである。深さは最深部で15cm程度が残されていたにとどまっている。底から焼土があるが均一的ではなく、著しく焼土が厚いところ、焼土の中に木炭が混じるところ、黒色土の中に焼土が疎らに混じるところなどがある。東西、両サイドに大きめの木炭を敷いており、この上にのる焼土も厚くなっている。中央部には、焼土や木炭に混じって、わずかながら骨粉が確認される。そして、焼土や木炭の上に乗せられたようにして灯明皿が４点出土している。いづれも上向きであった。

第２号墓壙　第74図

Ｅ－５グリッドで検出ができた墓壙で形状は方形を呈している。長軸119.0cm×短軸83.5cmの規模で、主軸はＮ－30°－Ｅである。第１号墓壙と主軸方向はほぼ同じくしているが、やや規模は大きい。深さは最深部で15cm程度が残されていたにとどまっている。ブロック状に焼土や木炭が固まり、骨粉も西南部分にやや固まっている。木炭を敷いた痕跡は認められない。焼土や木炭の上に乗せられたようにして灯明皿が数点出土している。いづれも上向きであった。

(3)出土遺物　第75図

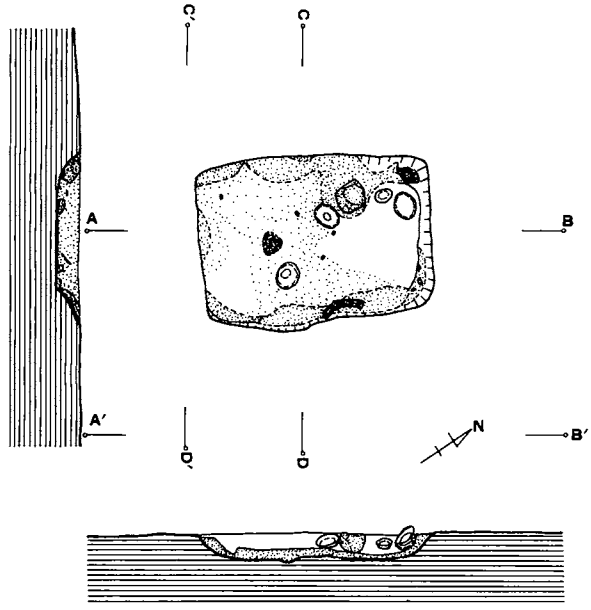
（１～５）第１号墓壙出土、（６）第２号墓壙出土

（１）土師器　皿　赤褐色。胎土に絹雲母片岩、石英片を含む。右廻りのロクロで成形・調整。底部に糸切り痕をとどめる。

（２）土師器　皿　赤褐色。胎土に絹雲母片岩、石英片を含む。右廻りのロクロで成形・調整。底部は糸切り痕が顕著。内面に灯明に使用した芯の痕跡あり。

（３）土師器　小皿　赤褐色。胎土に絹雲母片岩、石英片を含む。右廻りのロクロで成形・調整を行う。底部に糸切り痕が見られる。

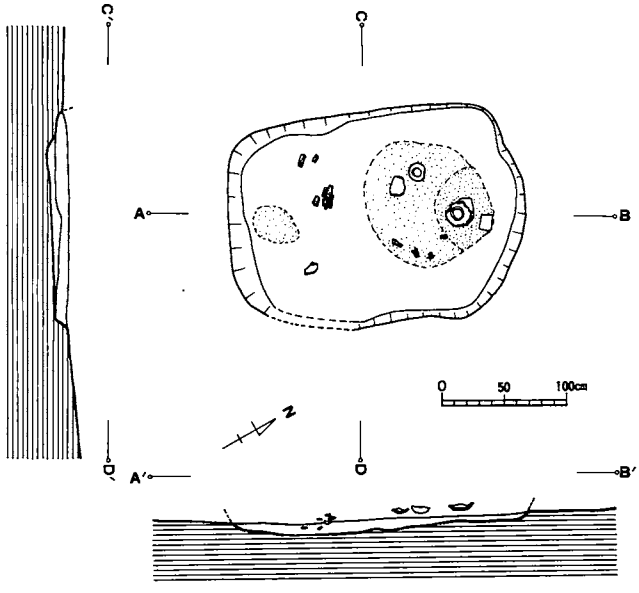
（４）土師器　皿　赤褐色。胎土に絹雲母片岩、石英片を含む。右廻りロクロによる成形・調整を施すも、粗雑なつくりで、ロクロの引き上げ痕を内面にとどめる。底部に糸切り痕あり。



第73図　第１号中世墓壙実測図

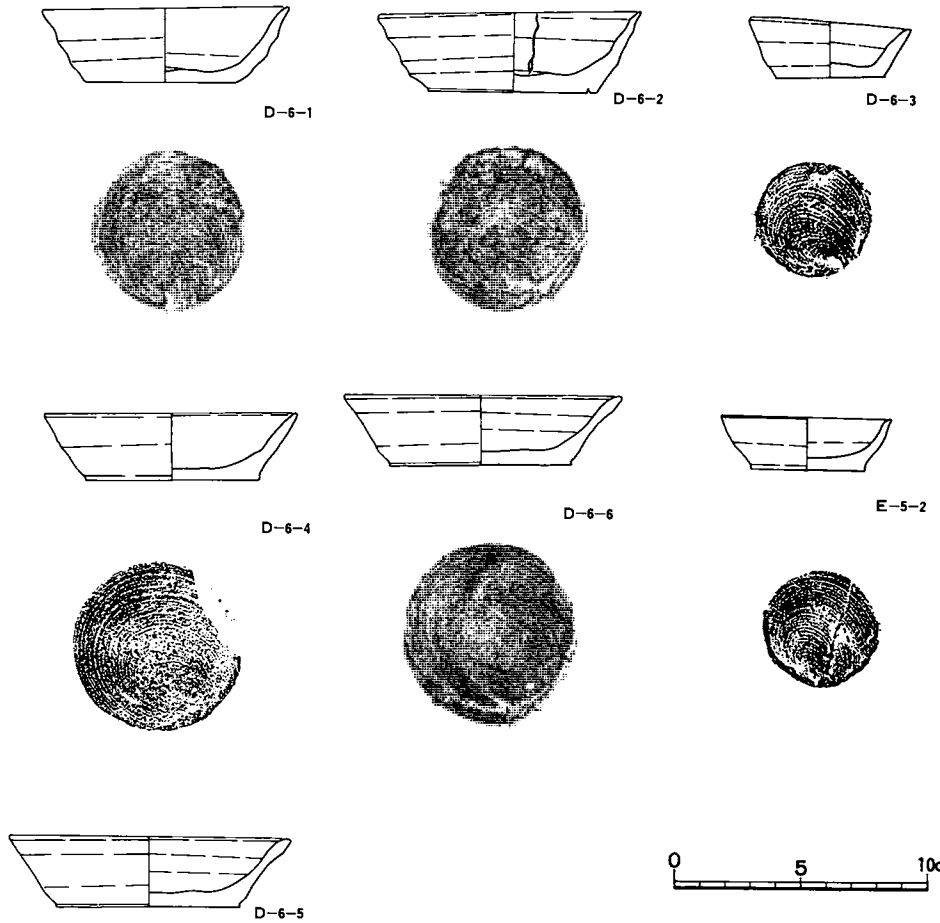
0　50　100cm

水糸レベル76.30m



第74図　第２号中世墓壙実測図

水糸レベル75.00m



第75図　燈明皿実測図

（5）土師器　皿　赤褐色。胎土に絹雲母片岩、石英片を含む。右廻りロクロで成形・調整を施す。

（6）土師器　小皿　黄褐色。胎土に絹雲母片岩を含む。ロクロによる成形・調整を行う。底部に糸切り痕をとどめる。E－5－2は採集資料である。

第1号墓壙出土の土師皿（灯明皿）は基本的に同じ胎土、焼成をしており、同一時期のものと想定される。土師器皿のなかには底部に煤を残すものもあり、あるいは皿が重ねられて副葬されていたものであろうか。南北朝ころの遺物であろう。

（江本・山下）

第５節　その他の遺構と遺物

今回の調査で出土した遺構や遺物について縄文時代包含層の調査、甕棺墓、甕棺、住居跡・掘立柱建物、墓壙の調査について報告してきたが、ここではそのほかに検出できた遺構や遺物についての報告を行っていきたい。

(1)集石遺構　第76図

Ｃ－６グリッドで検出された不整形の集石遺構である。最大幅は2.48ｍ、最深部0.28ｍをそれぞれに測る。堀りくぼめられた中に縄文土器、石器、自然石が入っている土器は接合資料は少なく、自然石もさほど多くはない。床面に顕著な硬化面や焼土は認められない。縄文早期に見られる集石遺構に比べると、大変まとまりのない状況を示す遺構であるが、一応遺構として取り上げたものである。中期土器群に何らかのかたちで伴った可能性はあろう。

(2)土壙遺構第77図

Ｃ－2グリッドで検出された不分明な土壙である。ほぼ円形の形状で最大幅は2.48ｍ、最深部0.60ｍをそれぞれに測る。堀りくぼめられた底にはさらに柱穴状の掘り込みが５穴見られる。埋土はほとんどが赤褐色を呈する焼土であり、炭化物や土壌を含んでいない。中央部付近に僅かに縄文土器片や自然石が入っていた。床面に顕著な硬化面や焼土は認められないが焼失した住居跡の可能性があろうか。

(3)溝遺構　第29・30・31・53・54・55図

第１～３号の３本の溝遺構が検出されている。

第１号溝（Ｃ．Ｄ－５Ｇグリッド、Ｃ－６グリッド）に交差するように第２号溝（Ｂ．Ｃ－６グリッド、Ｃ－７グリッド）があり、これに続き第３号溝（Ｃ－７．８グリッド）が南斜面に落ちこんでいる。深さに変化があるが溝の断面はほぼ一様にＵ字形を呈している。近世陶磁器片が含まったものがあり、近世遺構に設けられたものと判断される。

(4)柱穴群　第29．30．42．49．50．51．52．53．54．56図

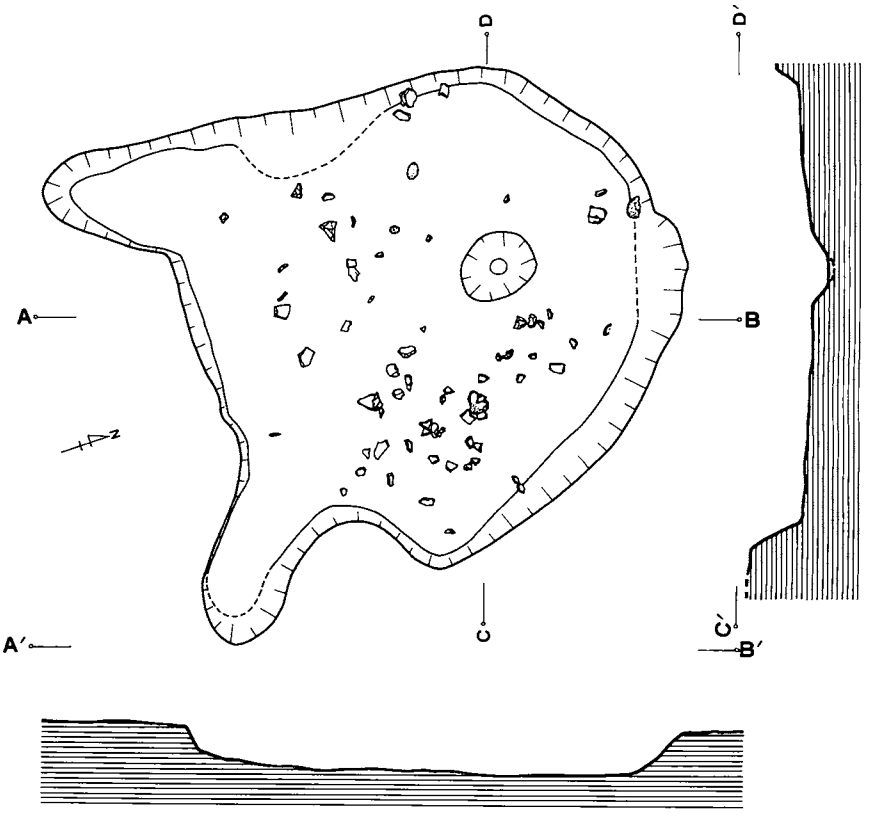
建て方が明確にできた掘立柱建物については先に報告ができたが、このほかに建て方を明確にはできないが、柱穴として検出できたものは数多い。（Ｂ．Ｃ－３～６グリッド）に検出数が多く、特に（Ｂ．Ｃ－５．６グリッド）に集中化が見られる。

(5)土壙群

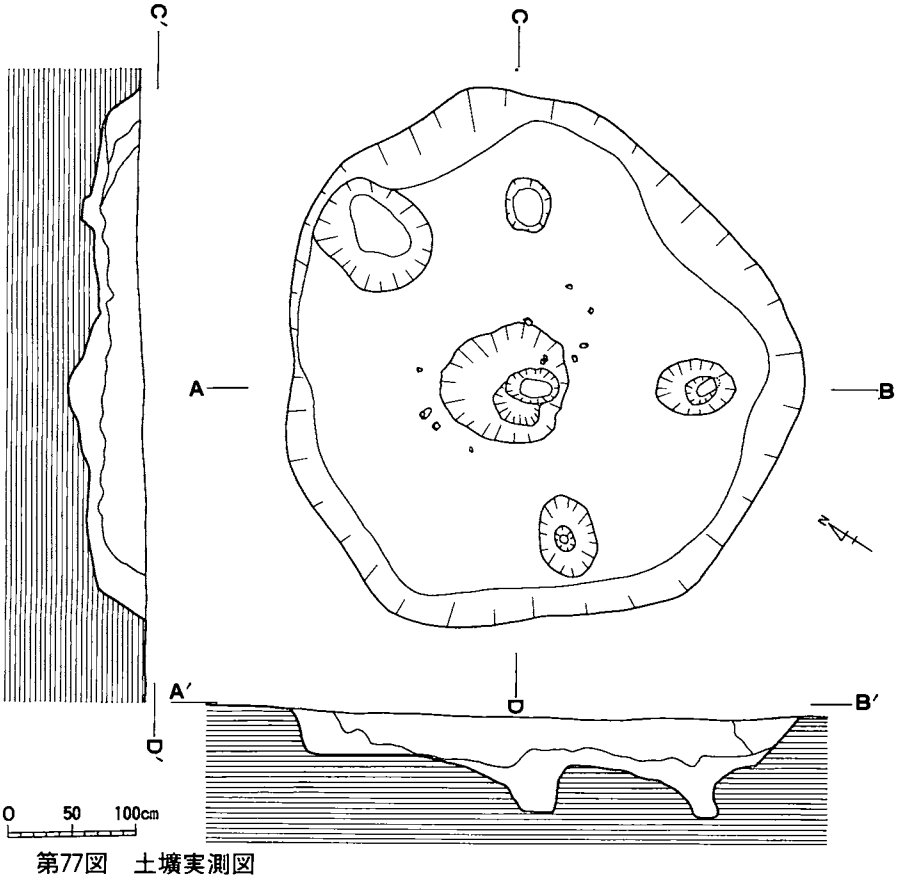
時期を明確にできないが数多くの土壙が検出されている。中には近世・近代の掘り込みも含まっている可能性もあろうがおよそＡ～Ｄのグループに分けて報告しておくことにしたい。

土壙群Ａ（第30図）

（Ｂ－７グリッド）を中心にしている。15基の土壙がある。円形、長楕円、方形の形状が見られる。いづれも墓穴と思われるがＡ－15土壙から須恵器の壺が出土している（第45図(3)。

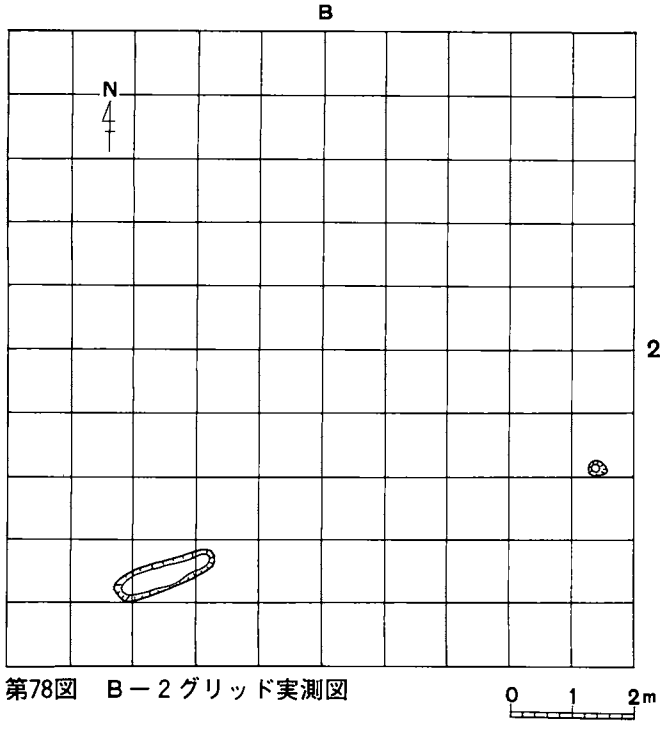


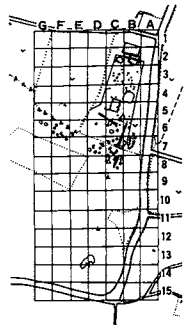
第76図　集石遺構実測図　　水糸レベル75.60m



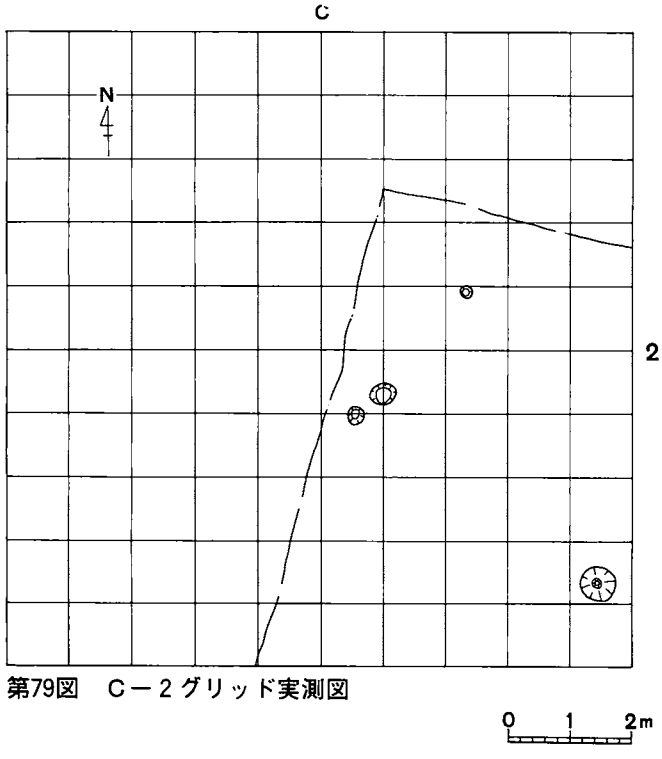
第77図　土壙実測図

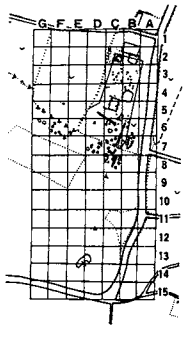
水糸レベル78.30m



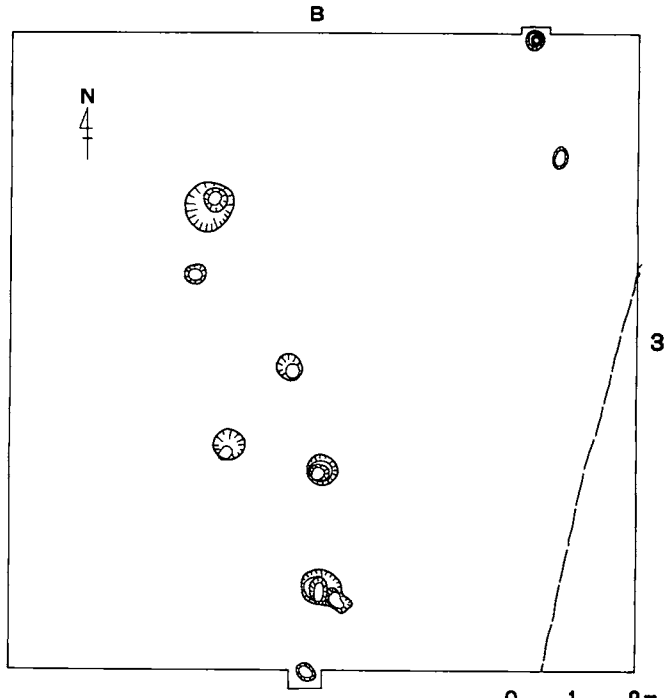


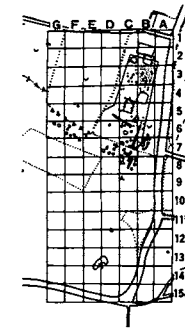
第78図　B－2グリッド実測図



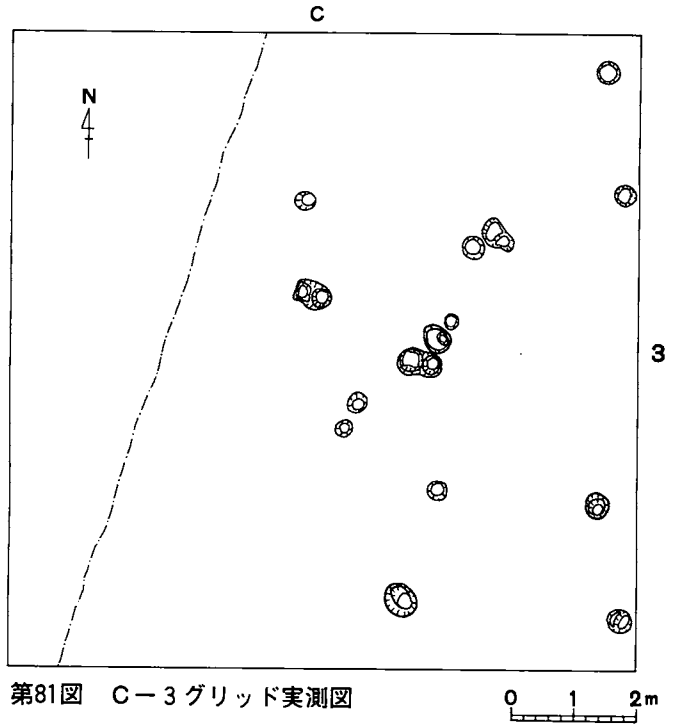


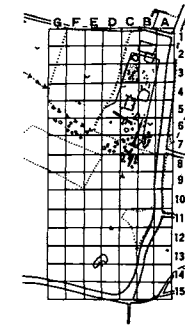
第79図　C－2グリッド実測図



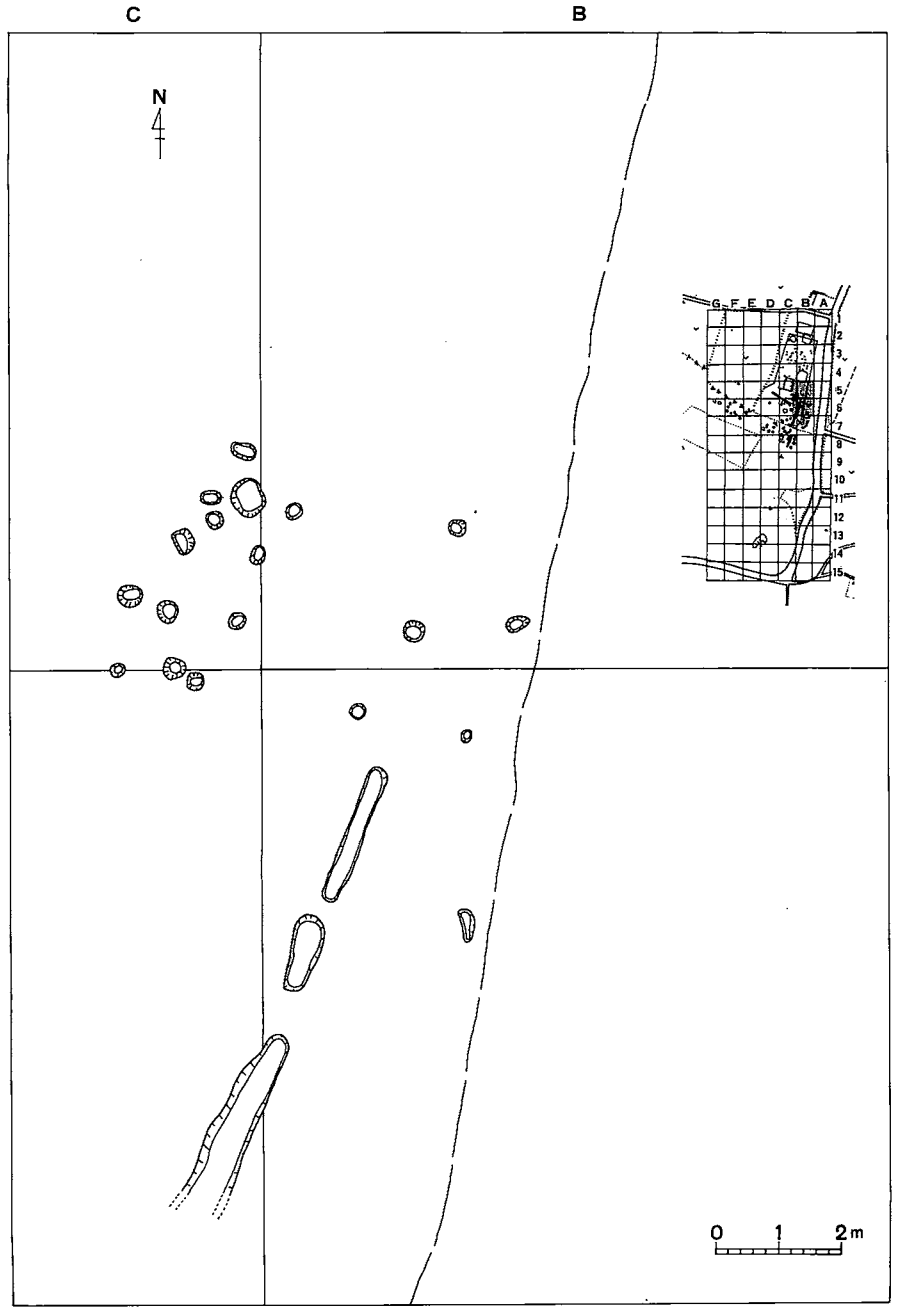


第80図　B－3グリッド実測図

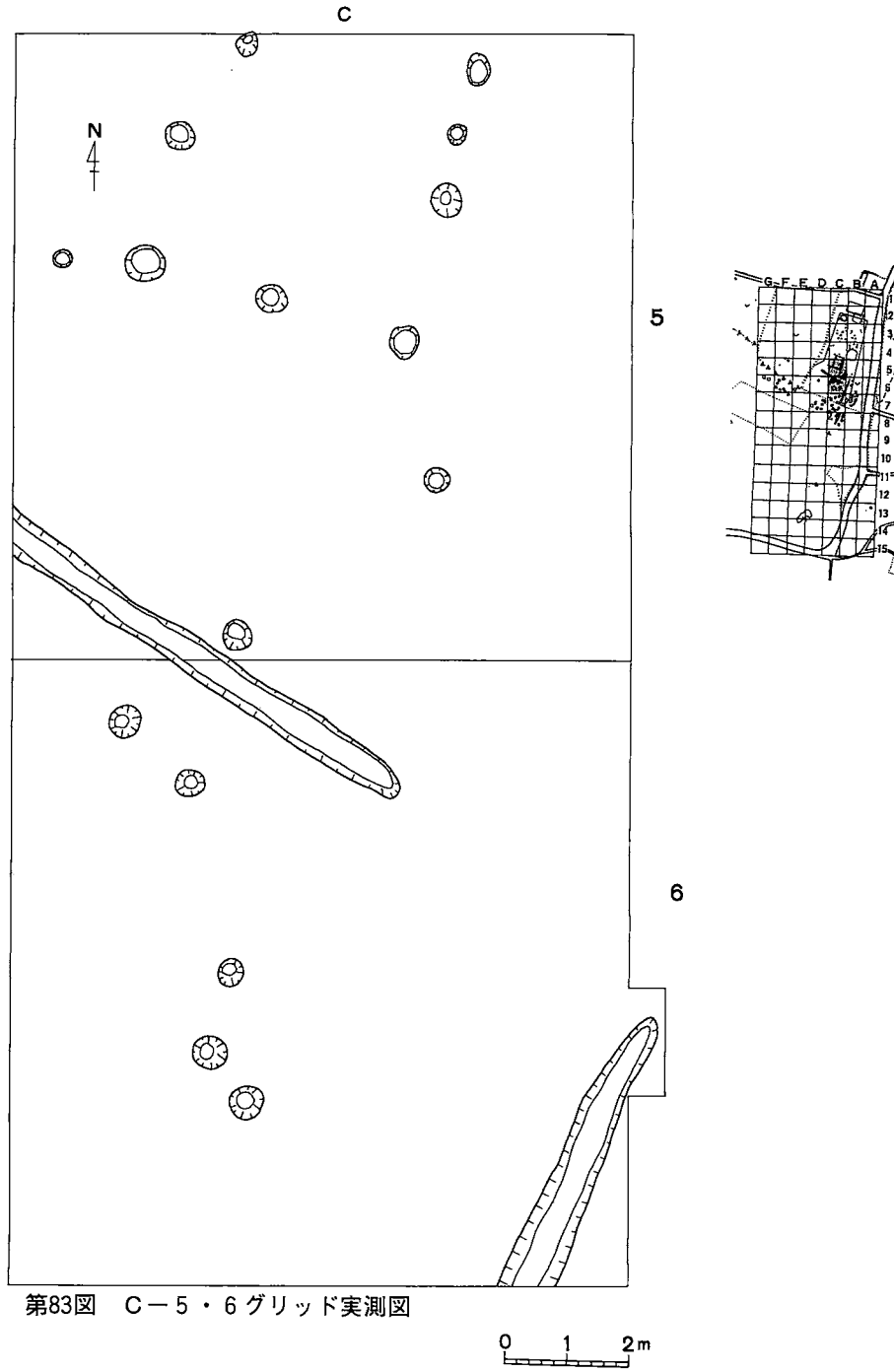




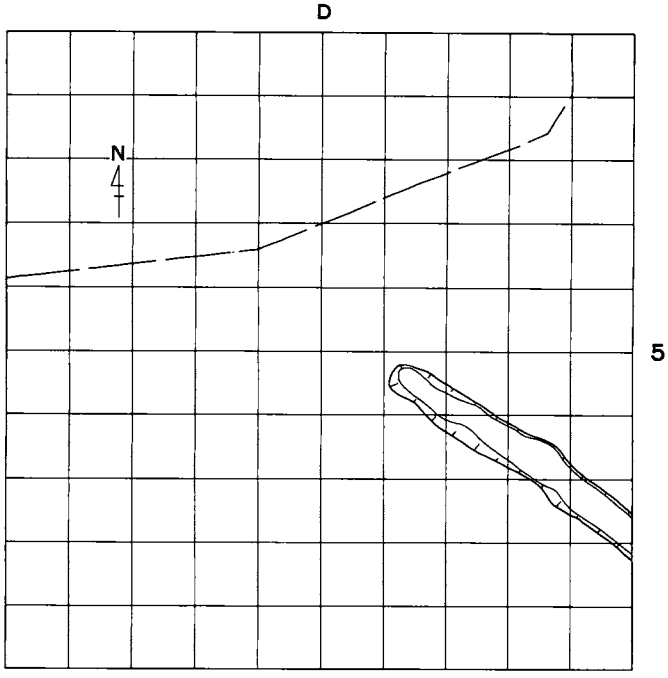
第81図　C－3グリッド実測図

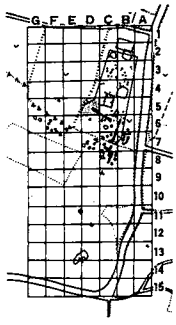


第82図　B・C－5・6グリッド実測図

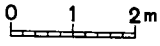


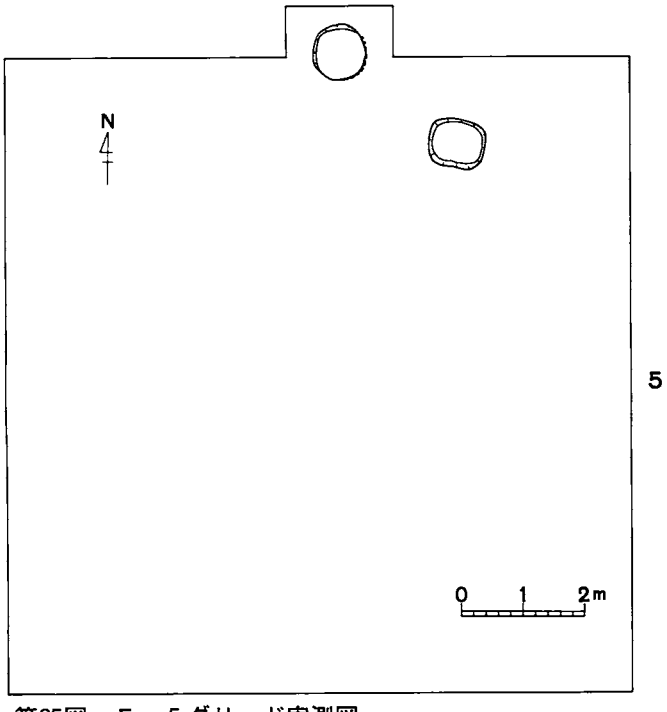
第83図　C－5・6グリッド実測図

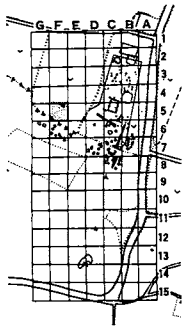




第84図　D－5グリッド実測図







第85図　F－5グリッド実測図

この壺は高台部と口縁部を欠損。焼成は良好で胎土は堅緻、砂粒をわずかに混入する。色調は灰色、頸部と胴部の一部に自然釉（暗灰色）がかかる。ロクロの回転は右まわり。高台部と肩部突帯は貼り付による。その他の部分の接合痕は確かめられない。この須恵器の出土からおよそ9世紀代の土壙群と判断できよう。

土壙群B（第30図）

（C－7グリッド）を中心にしている。19基の土壙がある。円形、長楕円、方形の形状が見られ大小さまざまである。いづれも墓穴と思われる。B－2土壙の東南地点には第1号甕棺墓が所在している。第1号甕棺墓の規模がやや小さく土壙群とは区別される。19基の土壙群は土壙群Aと時期及び性格を同じくするものと思われる。

土壙群C（第32図）

（D－7グリッド）を中心にしている。8基の土壙がある。円形、方形の形状が見られる。円形の同一形状で1号から3号が南北に並んでいる。いずれもオーバーハングしており、他の土壙群と性格を異にしているよう。明確な出土遺物がなく時期を明らかにしないが、オーバーハングの状況から貯蔵穴の可能性がある。他は土壙群A・Bと時期や性格を同じくするものであろう。

土壙群D（第31図）

（C－8グリッド）を中心にしている。西側に5基の甕棺墓が所在している。第3号溝をはさみ8基の土壙がある。西側は円形を主にして、東側は方形の形状をとっている。南側は傾斜が激しくなるので土壙群の南端であろう。円形と方形で時期的な変化を有している可能性があるが他の土壙群と性格を同じくしているものであろう。

（江本）

第Ⅲ章　まとめ

岡田遺跡は大きくは菊池川中流域北側の台地縁に位置しており、菊池盆地内の沖積平野を一望することのできる眺望に豊かな場所を占領している。現在の集落は台地下に営まれているが、菊池川支流の迫間川流域に沿う水田耕作地の開発と集落跡の形成は弥生時代にその萌芽をみて古墳時代以降に大きく形成されたものと思われる。しかし、岡田遺跡と同様の立地状況を示す近くの「うてな遺跡」では大規模な弥生時代の環壕集落跡や古墳時代集落跡が見事に検出されており、依然として台地上に大集落が営まれている状況を強烈に示している。通常的には水田耕作の開始と発展に従い水田地帯に近い低丘陵地に集落や生活域が移動するものと考えられるものであろうが、一方的には移り変わらない複雑な遺跡の存在状況を呈示している。

そのような中、今回の岡田遺跡は例えば、弥生時代や古墳時代の大集落跡などを認めることはできず、いわば丘陵上に位置する通常的な性格を示す遺跡と見ることができようか。その足跡は縄文早期に始まりおよそ中世の墓壙の形成に至るまで、細い痕跡とはしながらも連綿とひき続いて残されている。各々の時代、時期の特徴をおおむね記していくことにより今回の報告のまとめとしたい。

縄文時代は第Ⅰ類土器で示される早期土器があり、この遺跡の開始を示すことになる。口縁部がやや外反し、膨らんだ胴部と平底が想定される深鉢であり、器面には山形押型文の施文がある。押型文土器との分離には困難を有するが、口縁の外反の明確さなど「手向山式土器」として早期に位置づけられるものであろう。

前期の時期と判断される土器は散在した状況であり少量の資料にとどまる。Ⅱ－Ａ～Ｃ類土器とした土器群である。Ａ・Ｂ類は内外面に特徴的な条痕が認められる。Ａ類(1)の器面には貝殻腹縁圧痕文を横に繋ぎ、横走する沈線文様としている。口唇部にも刺突文を施している。あえて求めれば南九州の「石坂式土器」などに近い土器である。(2)は口唇部及び器面に大形の爪形文を連続させている。中国地方の前期土器に類似土器が認められる。それぞれに県内には類例の少ない土器である。Ｂ類は「轟式土器」の範疇におさめられる土器であろうが、(4)は断口三角形の隆帯に刻みが入れられている。Ｃ類は半截竹管状の施文具による沈線文内面は撫でられている。なお、時期を明確にしない土器として分類したⅢ－Ａ類（１．２）は貝殻条痕を残しておりⅡ－Ａ類の土器とすべきであろうか。Ｄ類は断口が三角形の隆帯を巡らし、Ｅ類は器面に指頭圧痕文が認められる土器である。Ｄ類には縄文の施文と重なり、口唇部を摘まみあげたり斜行する隆帯文も見られる。このＤ・Ｅ類には今後の時期分類の確立を待たねばならないが、多分に前期とできる土器も含まっていよう。

Ⅲ類は中期土器と考える土器群である。A類は器面と口縁部内面に縄文を施し、隆帯文の上に半截竹管状の施文具により連続爪形文を施した土器を原則としている。器形はキャリパー状の口縁を持つ深鉢である。波状口縁と平口縁とが有り、口唇部に2条の綿密な刺突文を施したものが多い。波状口縁が途中の山形部分で分離して作られたものがあり、双方の口唇部に小穴を設けているのも見られる（3．5）。口縁部内側は段を持ち肥厚したものが多い。地文の縄文は節が整った圧痕が縦に走る。

B類は器面に沈線文が見られる土器である。2条の沈線が原則的である。口縁部や頸部に施されている。

C類は縄文の施文にとどまり隆帯や爪形文、沈線文などの文様が施されていない土器群である。明確な波状口縁を示すものは少なく、キャリパー状口縁部で膨らみの浅いものも見られる。縄文もやや不規則で幾分粗いものが見られるが、口唇部に綿密な刺突文を施したものも見られる。

D類は器面だけの縄文で内面には施文が行われていない土器である。この土器は完形に復元ができており、キャリパー状口縁部を有する深鉢形土器の器形を明確に示している。底部は5角形をなし、それぞれの角が突出し脚をなしている。

E類は貝殻殻表圧痕文が認められる土器である。頸部に隆帯を巡らせ、その上に重ねたものが多い。縄文地に直接に圧痕したものも認められる。

F類はE類の貝殻殻表圧痕文ではなく太い指頭状の圧痕を施した土器、それに連弧状の沈線文や刺突文が見られる土器である。口縁部は波状と平口縁があり、キャリパーの膨らみに差異が見られる。（5～7）は縄文の施文がなく細沈線のなかに2条となる刺突文を走らせている。

G類は胴部片である。縄文原体の幅、節の大小や施文方向などに差異が見られる。

H類は底部資料である。上げ底状で円形を呈するものが含まっているが、殆んどが5角形を呈する角底であり、角が著しく突出し5脚を呈するものも多い。

I類は時期を明確にしない土器であるが、前述したように（1．2）は前期とできる可能性が強く、（3．4）は細沈線文の地文でⅢ類の一種類をなすものであろう。

以上のようなⅢ類土器は熊本県地域では非常に資料の少ない土器群で、従来示されていた縄文中期「竹崎式土器」の枠を大きく越えるものである。総体的な特色を述べればキャリパー状口縁部を有する深鉢形土器の器形で、底部は殆んどが角底をなしそれぞれの角をつまみあげ5脚を呈するものが多い。口縁部は波状口縁と平口縁とが有り、口唇部に2条の綿密な刺突文を施したものが多く、分離する波状口縁の口唇部に小穴を設けたものも見られる。地文の縄文は節が整った圧痕が縦に走る。そして隆帯を巡らせ半截竹管状の施文具により爪形文を綿密に施したものや、口縁部や頸部の隆帯の上に貝殻殻表圧痕文を重ねたものがあり、

一方では隆帯を変化させたような沈線文も見られる。

中国・近畿地方での鷹島式土器や船元Ⅰ式土器の特色と大きく類似することが述べられようが、角底と5脚状底部との差異が著しいことや、隆帯を変化させたと思われる沈線文が存在したり、口唇部の猪口形突起を有しないことなど形態や施文に異なった様相も指摘される。また、Ⅱ類D・E類に示される断口が三角形を呈する隆帯文を巡らしたり、縄文の地文がない無文のものがあり、縄文の地文がなく単に細沈線を施したものなど、バリエーションの拡大として捉えられるべき土器の存在もある。いわば従来示されていなかった土器群の様相を拡げるとともに、土器群の地域化的特色を示すものと捉えることができよう。

鷹島式土器は最近、近畿地方において中期初頭に位置づけることが呈示されている。県内では下益城郡小川町大坪貝塚や天草島本渡市大矢遺跡で層位的に良好な状態での検出の成功例が知られ、前者では阿高式土器の下層から並木式土器が出土し、後者では阿高式土器の下層から並木式土器、さらにその下層から船元式土器が出土することが知られている。これらの事実によってⅢ類土器を中期前半に位置づけておくことは可能なことであろう。

Ⅳ類土器は後期土器である。沈線文、羽状文、擬似縄文などを特色としている。北久根山式土器を中心としている。ただし、(15) は無文で口唇部にかえしがあり、類例を見ない土器である。キャリパー状を呈することなどⅢ類土器に入る可能性を有している。

縄文晩期は甕棺墓が検出された。この時期に生活域と離れた場所に集団墓を形成することを明らかにしている。合口として用いられた土器は壺と甕、それに小壺とがセットとして捉えられる良好な資料であり今後の指標土器となりえよう。副葬されていた管玉は朝鮮半島で製造された可能性がもたれる。菊池郡大津町無田原遺跡や水ノ山遺跡に類例資料の出土が知られており、菊池川流域に集中して分布する傾向を示している。

弥生時代は台地南裾部に中期の甕棺を1基検出できたにとどまり、顕著な遺構・遺物には恵まれていない。現在の集落が営まれている台地南側の平坦地に営まれていた可能性が強く、背後となる台地斜面が墓域として選定されたものであろう。

古墳時代の遺構・遺物はほとんど恵まれておらず、古代になって数軒の住居が営まれた後は中世から近世にわたり小規模の墓地が形成されていたにとどまっている。　　(江本)

参考文献・事項

間壁忠彦編	里木貝塚　倉敷考古館研究集報第7号		1971
巽　三郎編	鷹島遺跡発掘調査報告書	広川教育委員会	1969
泉　拓良	船元・里木式土器様式　『縄文大観』4	小学館	1992
大坪貝塚	熊本県教育委員会発掘調査　島津義昭氏教示		1992
大矢貝塚	本渡市教育委員会発掘調査　山崎純一氏教示		1992
田邊哲夫他	竹崎式土器の有脚底部について	肥後考古2号	1982

乙益重隆	九州西北部　日本の考古学Ⅱ	河出書房	１９６５
前川威洋	九州縄文文化の研究		１９７９
東　和幸	春日式土器の形式組列	鹿児島考古第23号	１９８９
藤尾慎一郎	九州の甕棺　国立歴史民俗博物館研究報告第21集		１９８９
田邊哲夫	竹崎貝塚発掘調査資料		１９５１
塩山則之	讃良川遺跡出土縄文土器	寝屋川市歴史シンポジウム資料	１９９１
泉　拓良	縄文土器　西　東	寝屋川市歴史シンポジウム資料	１９９１
鎌木義昌他	瀬戸内　日本の考古学Ⅱ	河出書房	１９６５
西住欣一郎編	うてな遺跡　熊本県文化財報告書第121集		１９９２
天加部和幸編	大矢遺跡　熊本日日新聞1992.10.5記事		１９９２
橋口達也編	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』25	福岡県教育委員会	１９７８
山崎純男	「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『古文化論改』		１９８０

報告書抄録

書名	岡田遺跡
副書名	県営畑地帯総合改善事業(菊池うてな地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第135集
編著者名	江本　直
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862　熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	西暦1993年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード	調査期間	調査面積	調査原因
岡田遺跡	熊本県菊池郡 七城町 大字岡田	市町村：434019 遺跡番号：18-2-16	19890515 19901210	4,400㎡	県営畑総合 改善事業

主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
縄文時代	遺物包含層	早・前・中・後期土器	中期土器
	甕棺基　6基	晩期土器	管玉
弥生時代	甕棺　1基	中期甕棺	
古代	住居跡　2基	須恵器	
中世	墓壙　2基	土師器	

写　　真

写真１　上：岡田遺跡調査風景　下：岡田遺跡調査風景

写真２　上：Ｄ－６グリッド縄文石器出土状況　下：Ｄ－６グリッド石斧出土状況

写真３　上：Ｃ－２グリッド土壙出土状況　下：Ｃ－６グリッド集石遺構

写真４　上：Ｄ－４グリッド縄文石斧出土状況　下：Ｂ－６グリッド黒曜石原石群

写真５　上：黒曜石原石出土状況　下：甕棺墓群

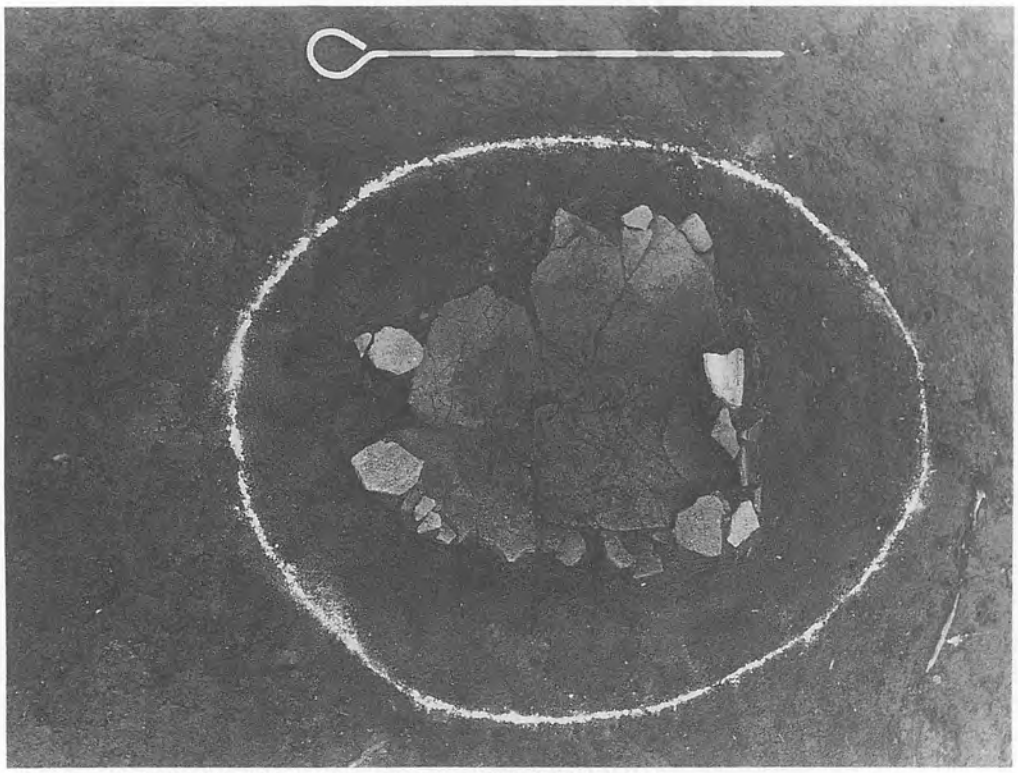


写真６　上：甕棺墓群出土状況　下：第１号甕棺墓出土状況

写真７　上：第２号甕棺墓出土状況　下：第２号甕棺墓出土状況

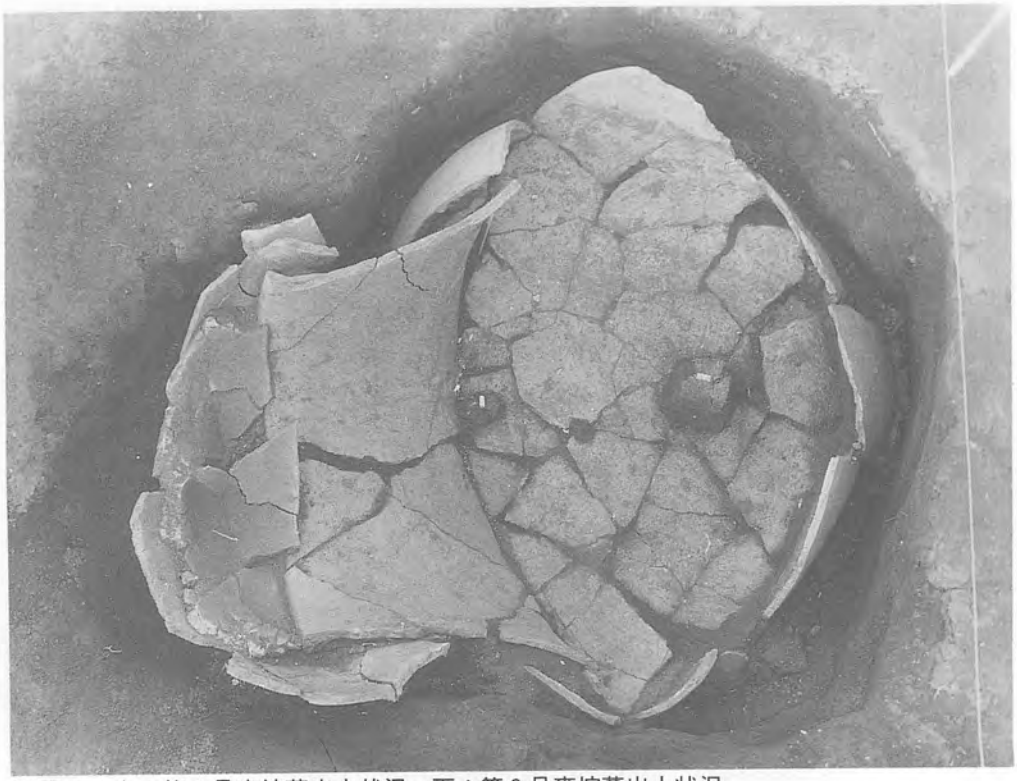


写真８　上：第３号甕棺墓出土状況　下：第３号甕棺墓出土状況

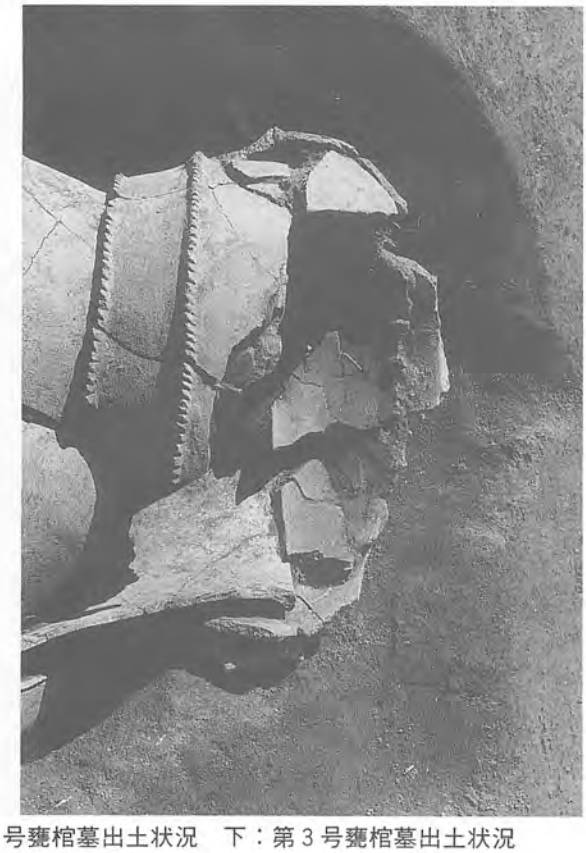


写真９　上：第３号甕棺墓出土状況　下：第３号甕棺墓出土状況

写真10　上：第３号甕棺墓管玉出土状況　下：第４号甕棺墓管玉出土状況

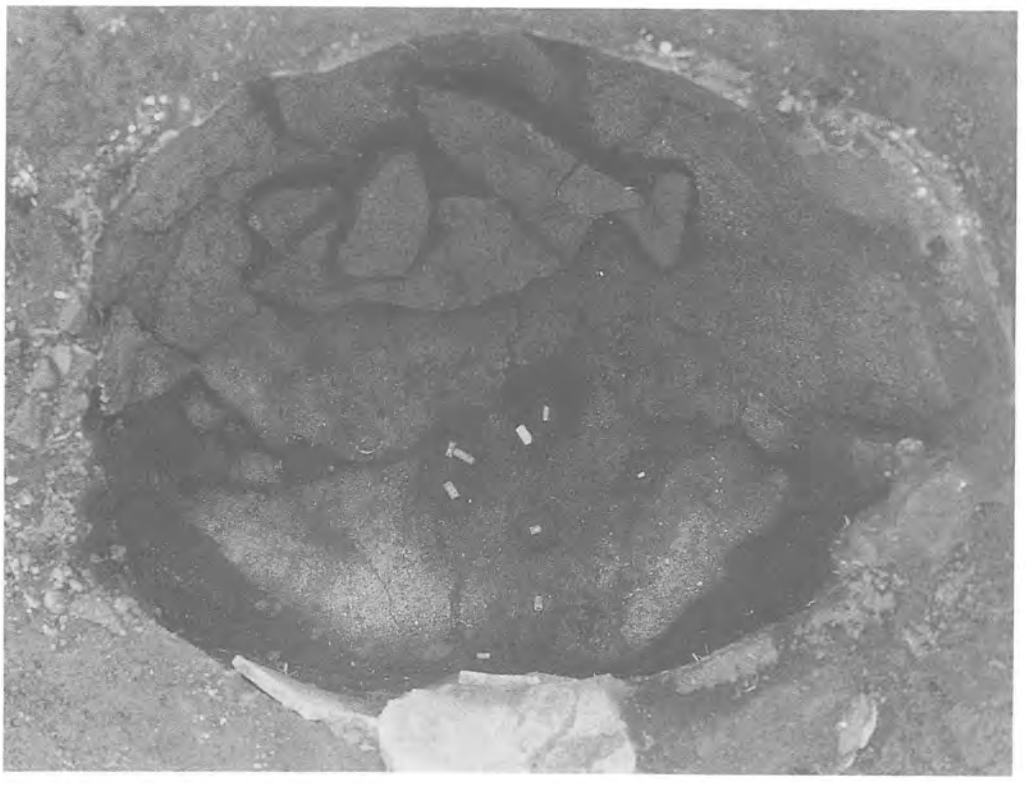


写真11　上：第４号甕棺墓管玉出土状況　下：第４号甕棺墓管玉出土状況

写真12　上・下：第５号甕棺墓出土状況

写真13　上：第５号甕棺墓・小型壺出土状況　下：第５号甕棺墓管玉出土状況

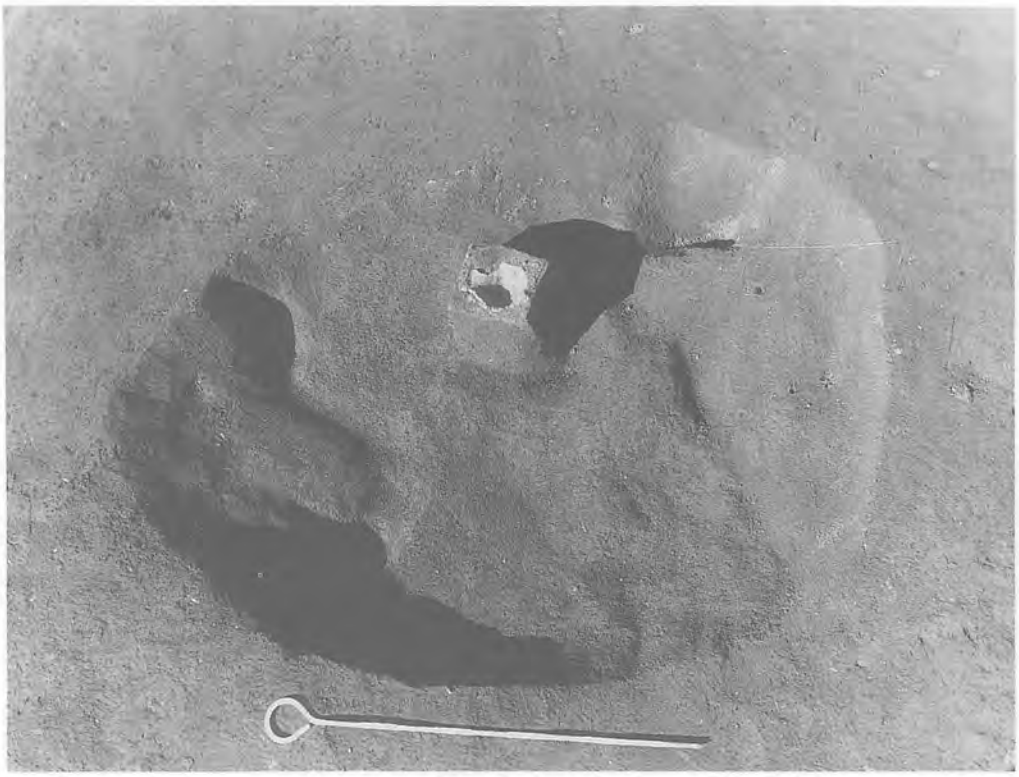


写真14　上：第６号甕棺墓小型壺出土状況　下：第６号甕棺墓小型壺出土状況

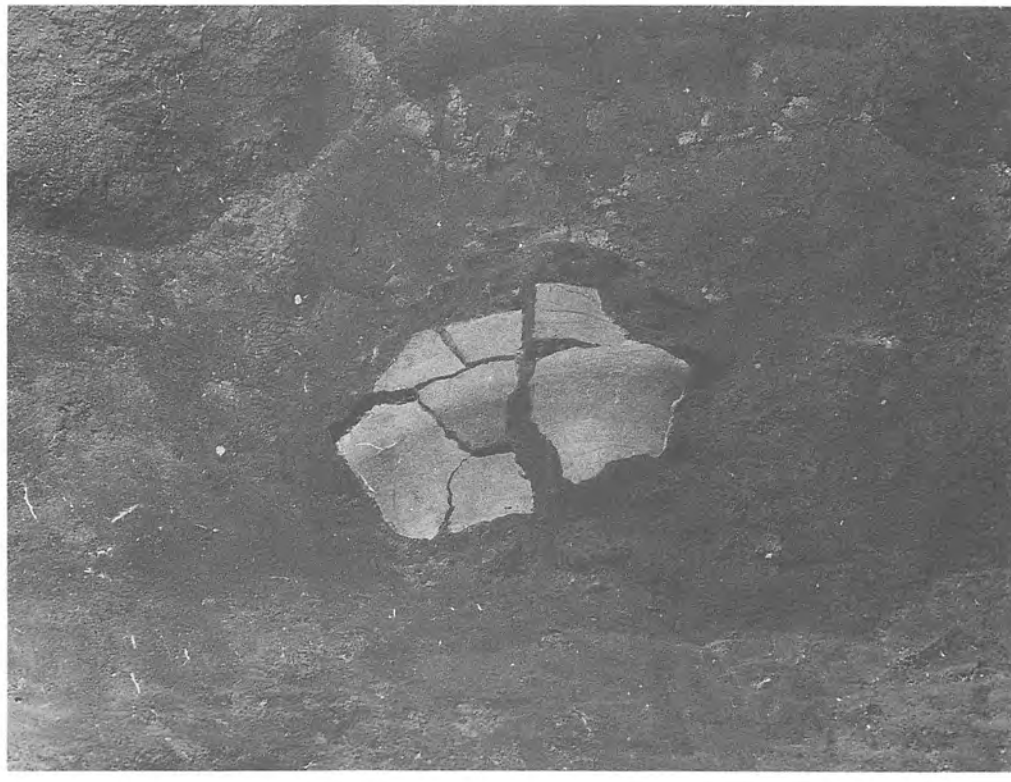


写真15　上：Ｂ－７グリッド甕棺墓出土状況　下：中期甕棺墓出土状況

写真16　上：中期甕棺出土状況　下：中期甕棺出土状況

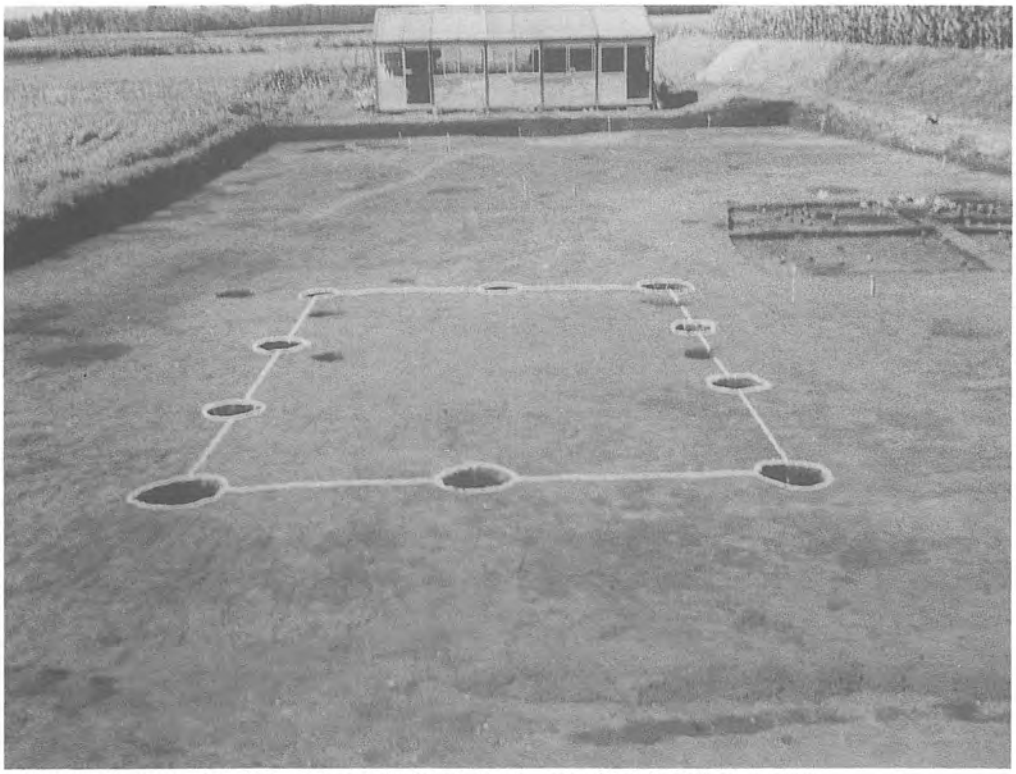


写真17　上：C－13グリッド中期甕棺出土状況　下：掘立柱建物出土状況

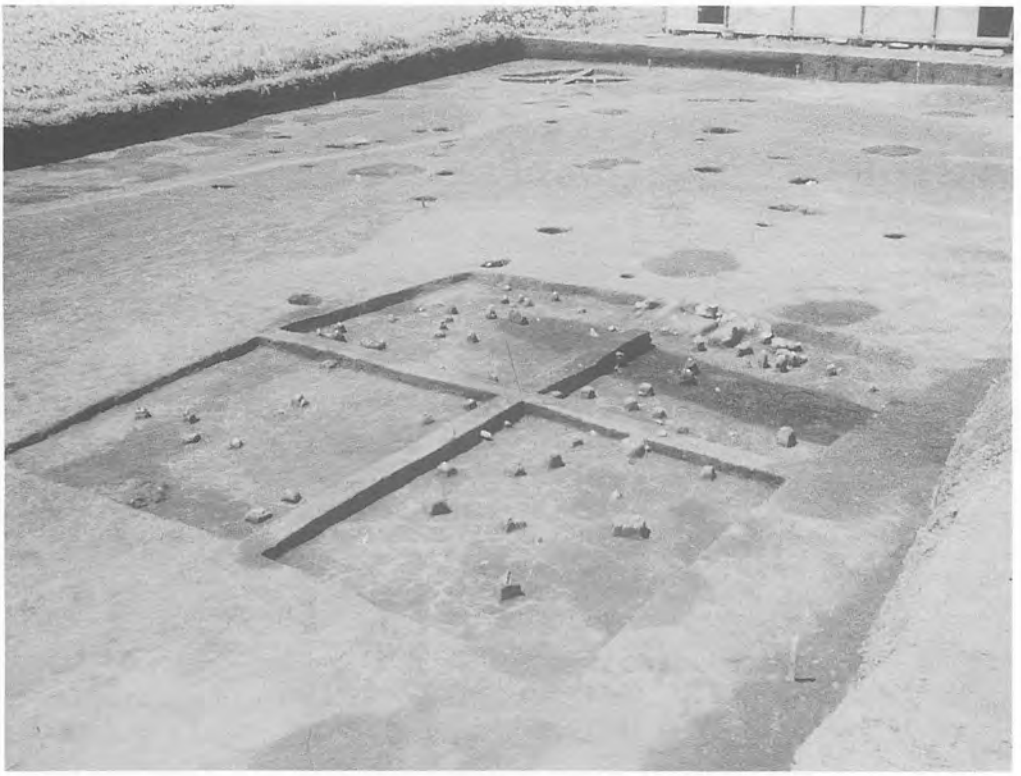
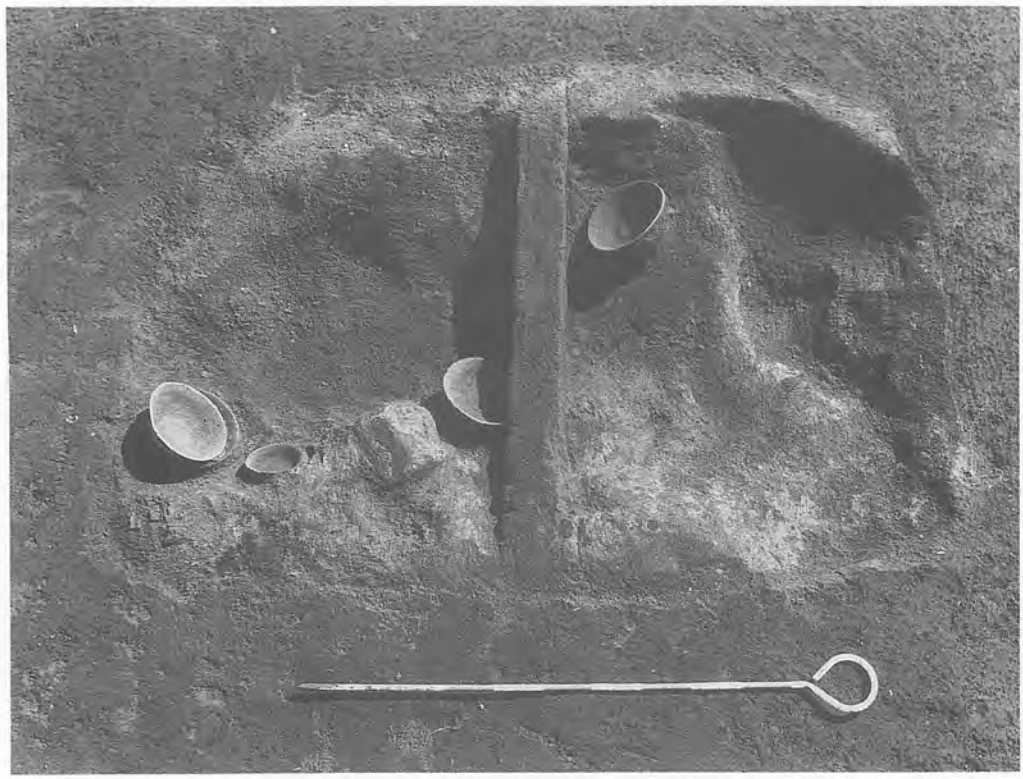


写真18　上・下：古代住居跡出土状況

写真19　上：F－6グリッド中世墓壙出土状況　下：D－6グリッド中世墓壙出土状況



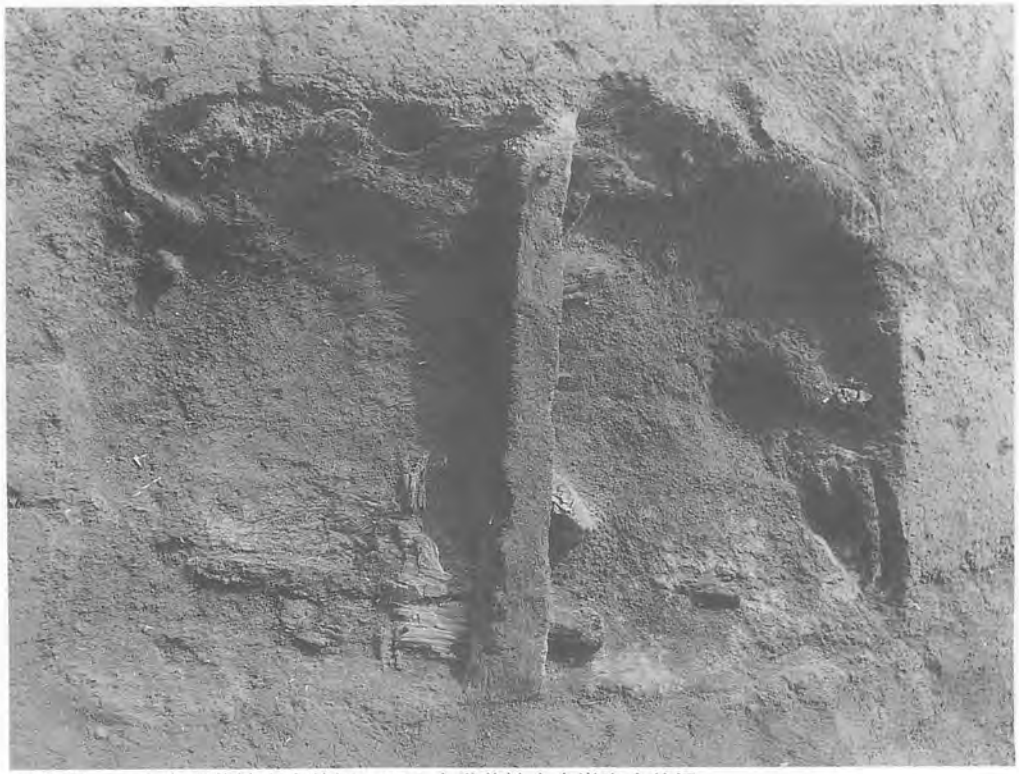


写真20　上：中世墓壙出土状況　下：中世墓壙内木炭出土状況

写真21　上：中世墓壙群出土状況　下：D－7グリッド中世墓壙内木炭出土状況

写真22　縄文Ⅰ類土器　(上)表　(下)裏

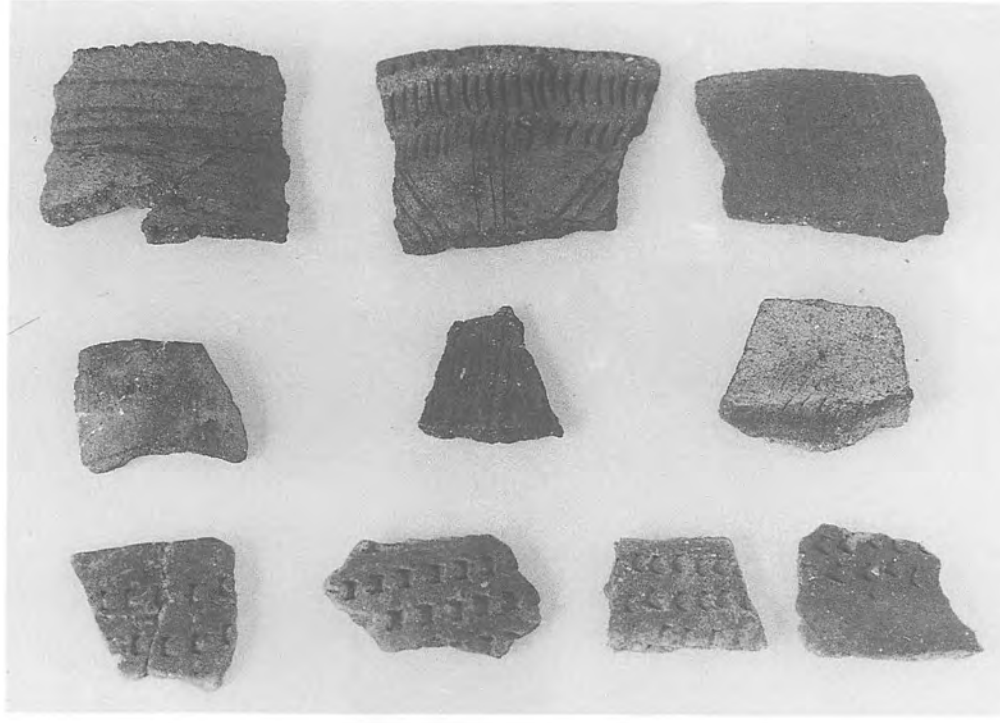


写真23　縄文Ⅱ類土器(１)　(上)表　(下)裏

写真24　縄文Ⅱ類土器(２)　(上)表　(下)裏

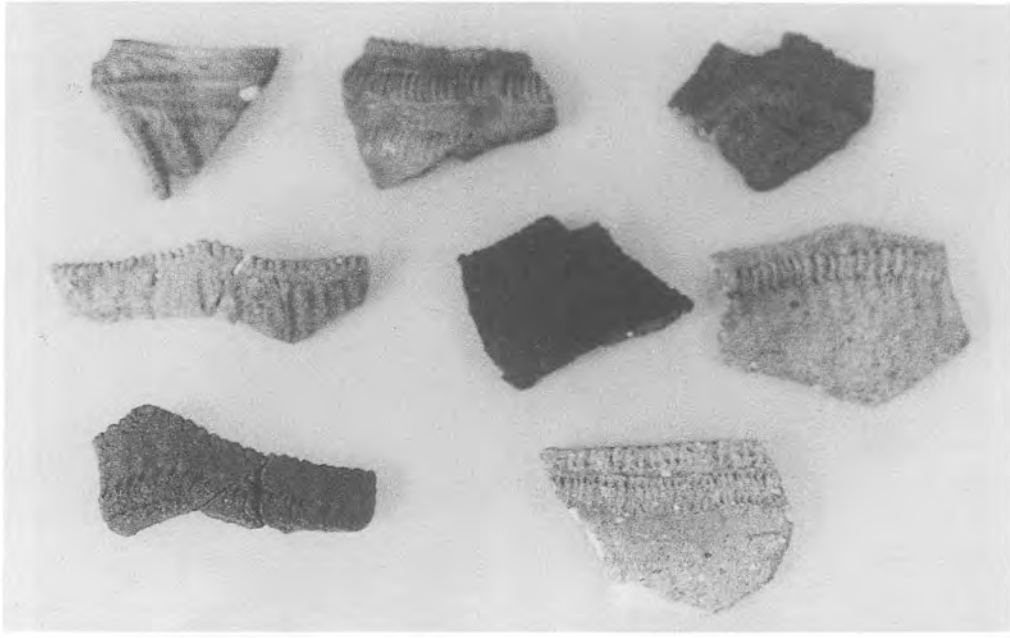


写真25　縄文Ⅲ－Ａ類土器（１）（上）表　（下）裏

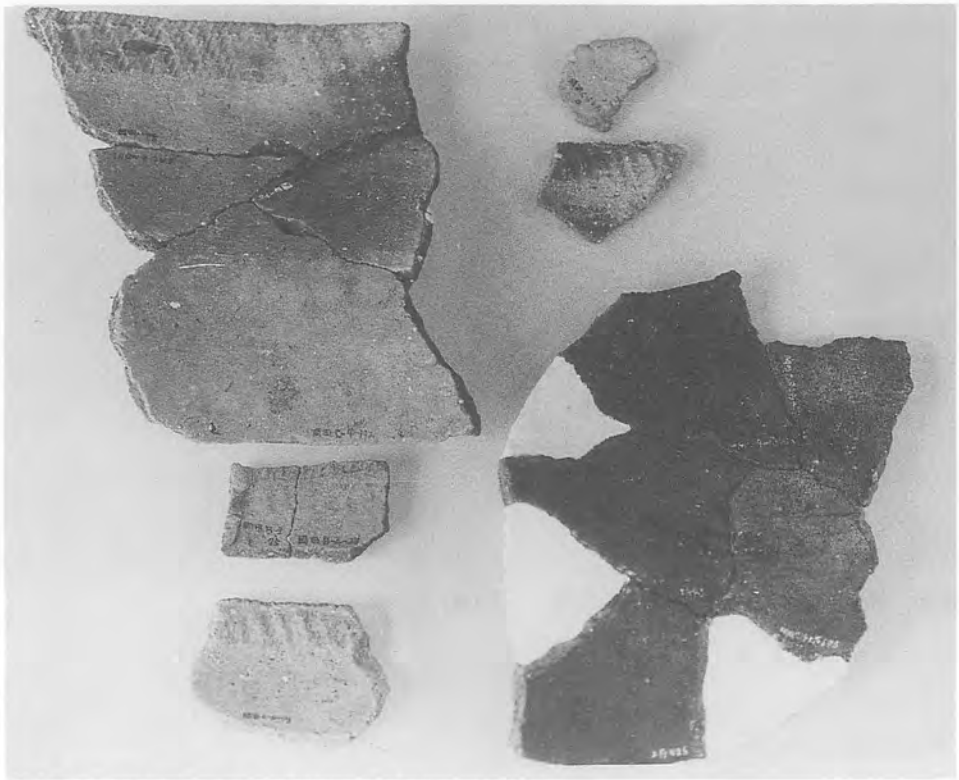


写真26　縄文Ⅲ－Ａ類土器(２)　(上)表　(下)裏

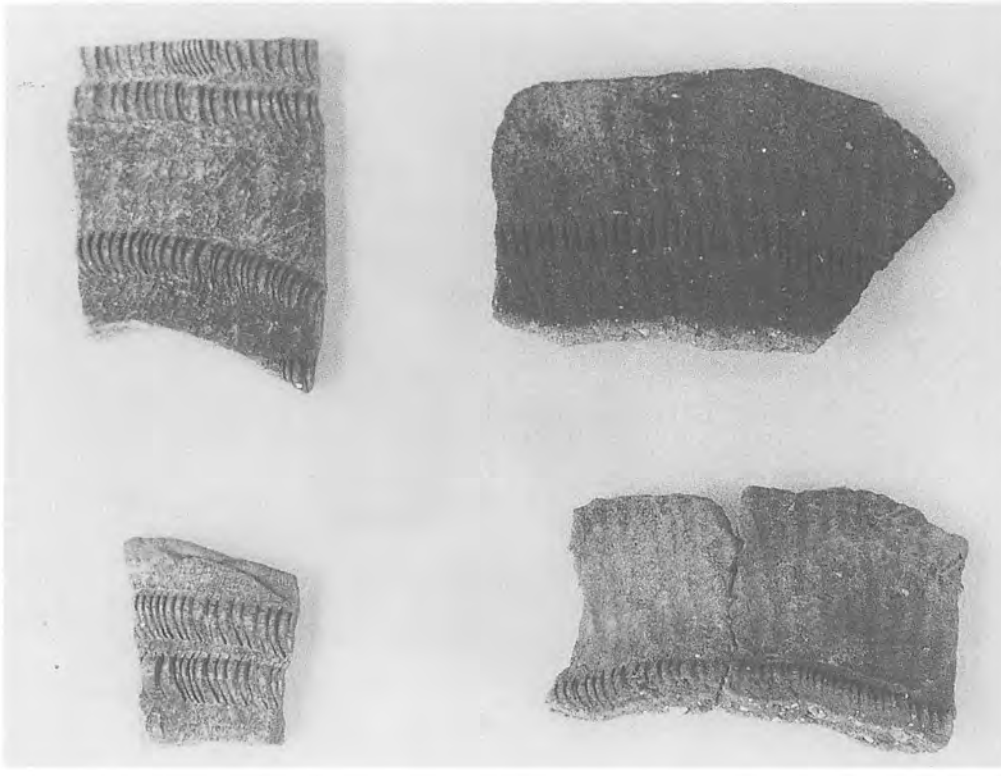
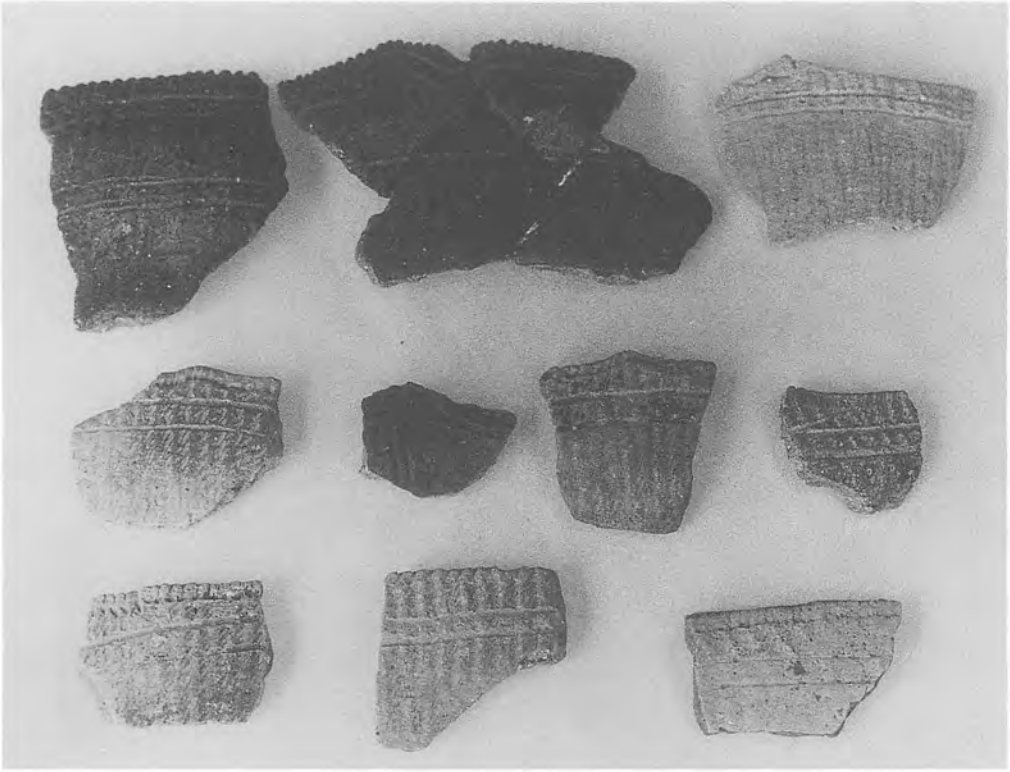


写真27　縄文Ⅲ－Ａ類土器（３）（上）表　（下）裏



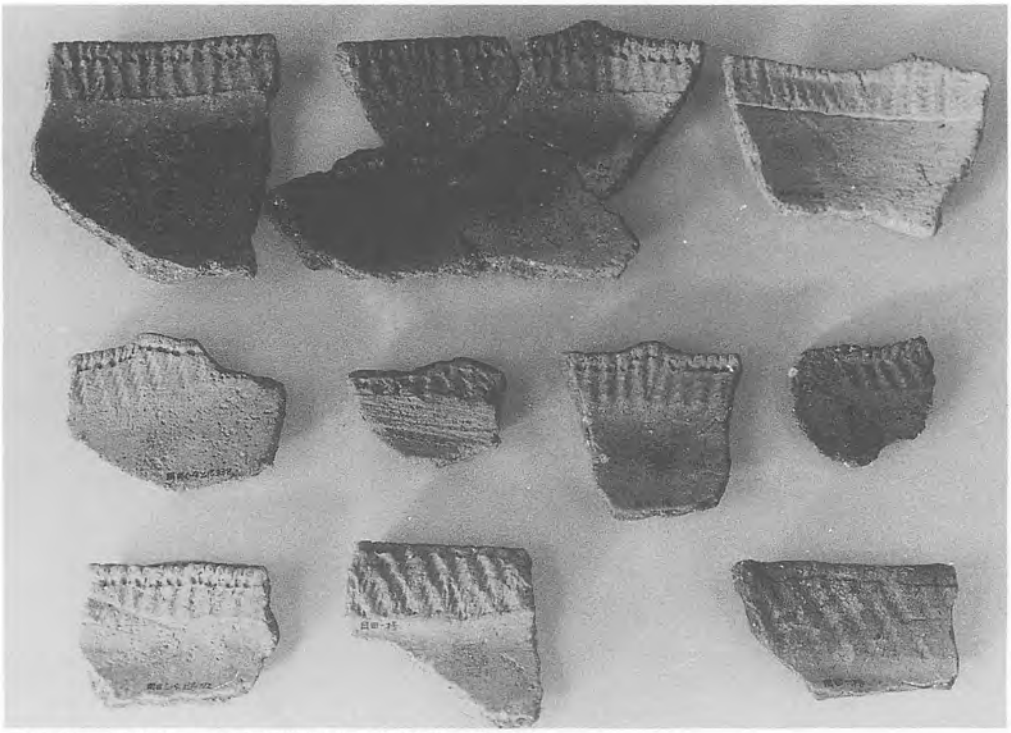


写真28　縄文Ⅲ－Ｂ類土器(１)　(上)表　(下)裏

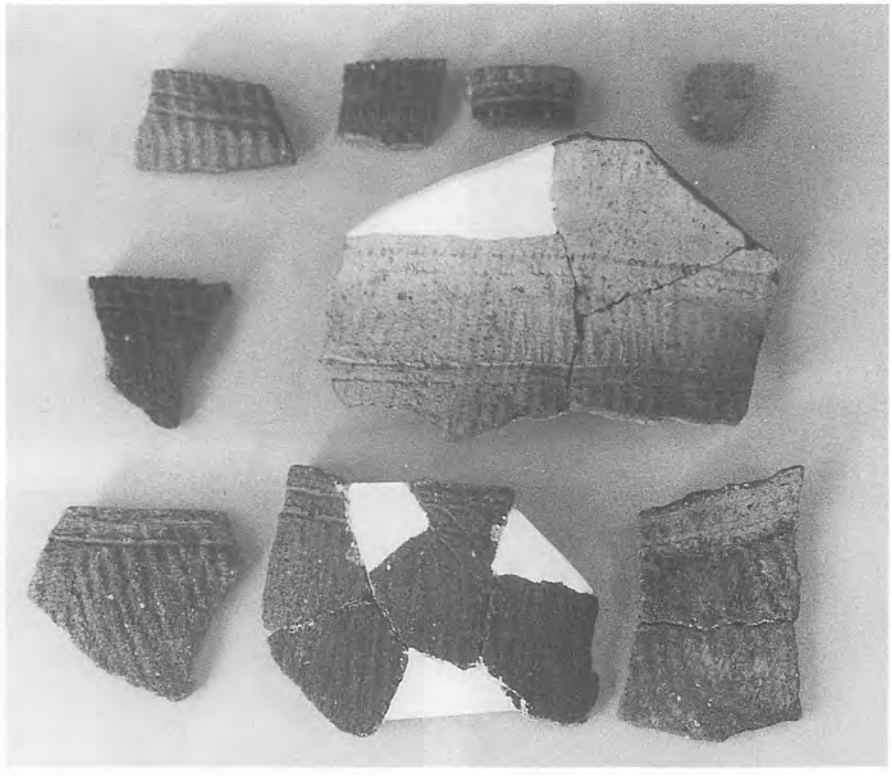


写真29　縄文Ⅲ－Ｂ類土器(２)　(上)表　(下)裏

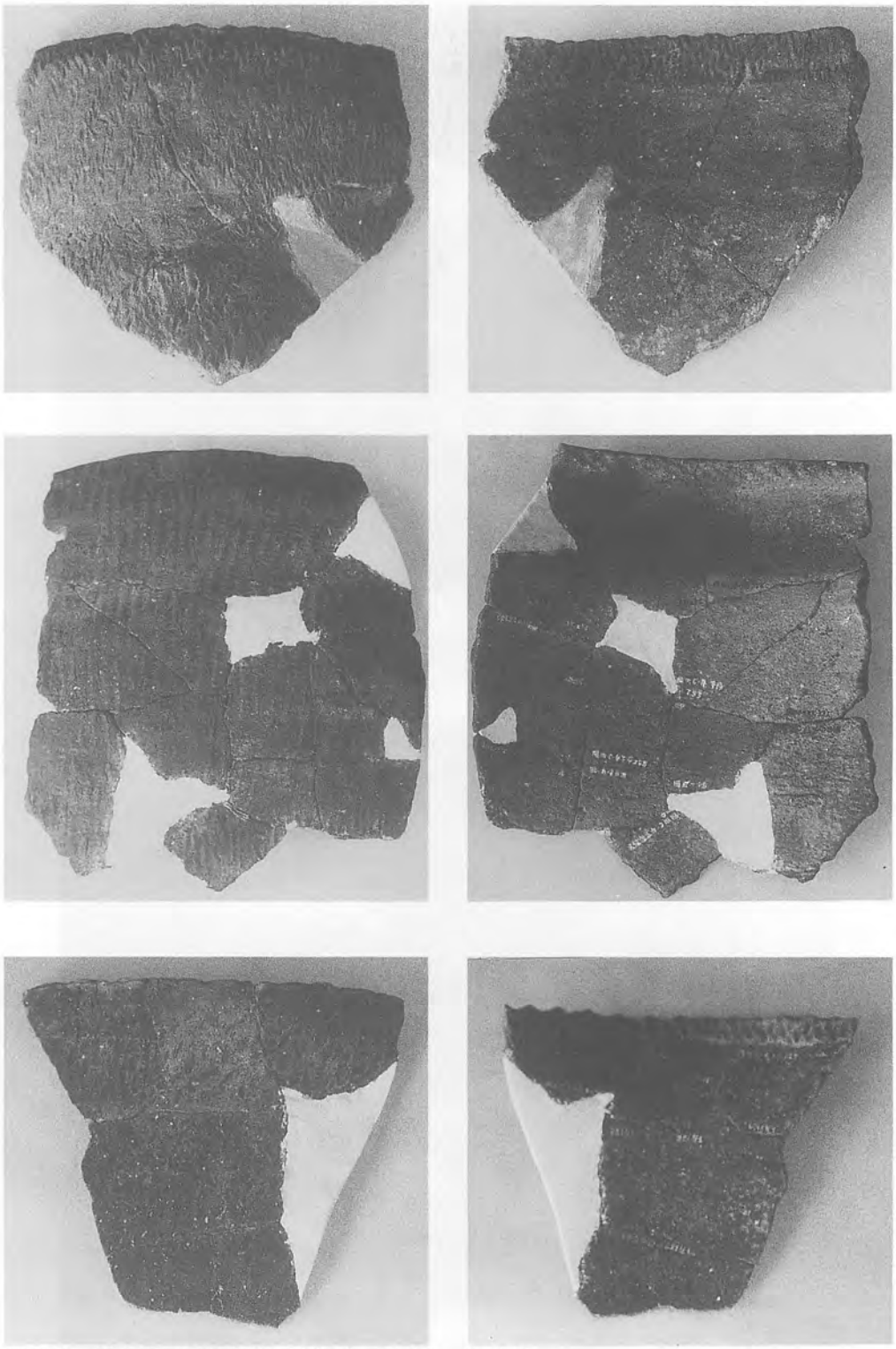
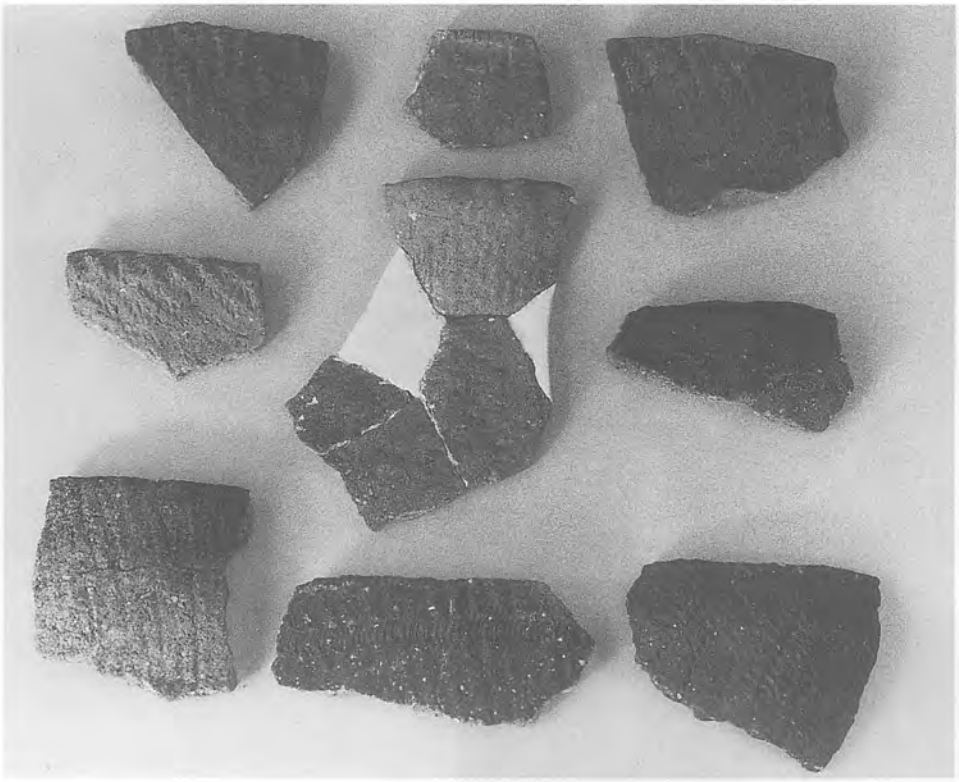


写真30　縄文Ⅲ－Ｃ類土器(１)(２)　(上)表　(下)裏

写真31　縄文Ⅲ－Ｃ類土器（３）　表　裏



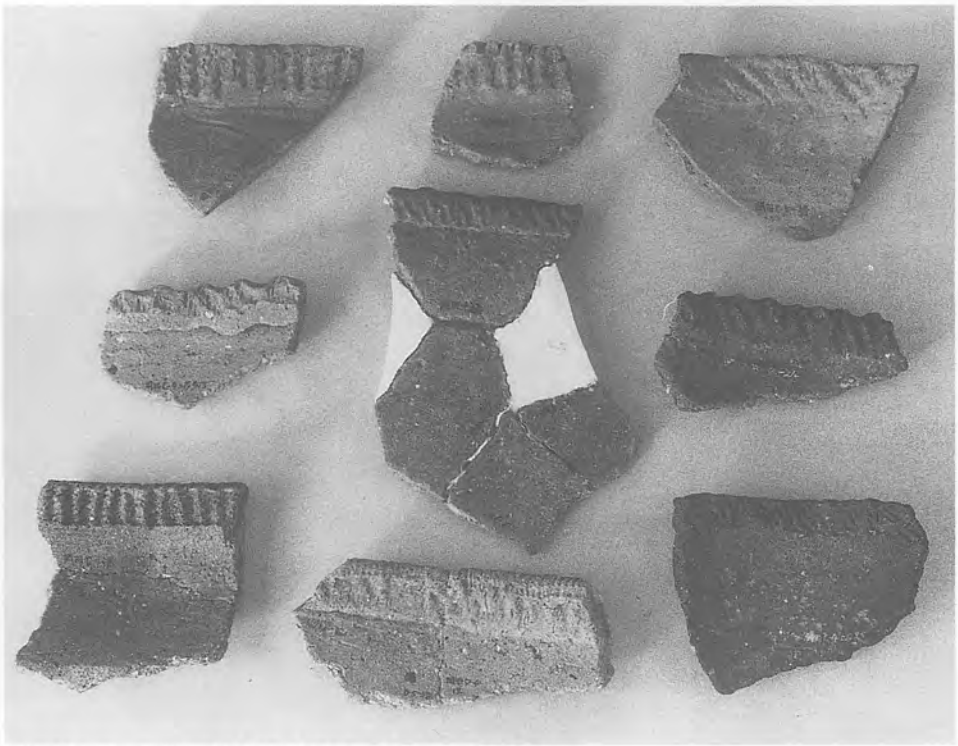


写真32　縄文Ⅲ－Ｃ類土器（４）（上）表　（下）裏

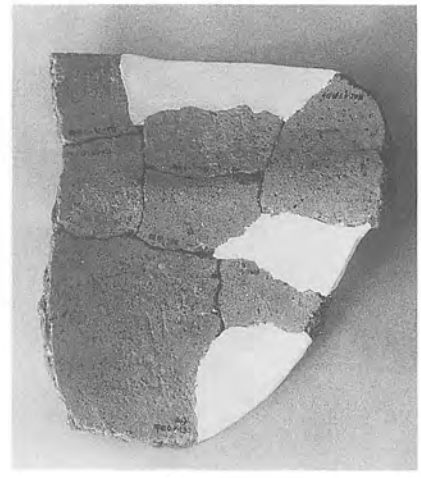
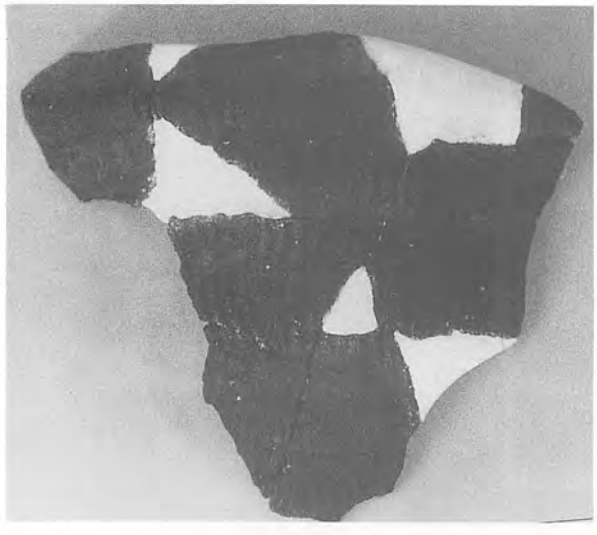
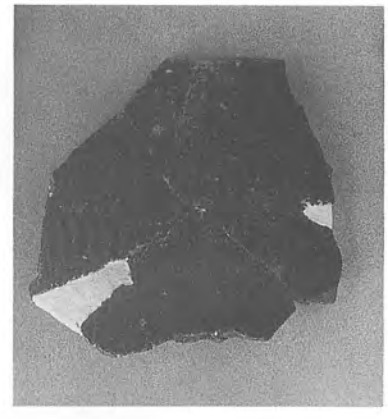
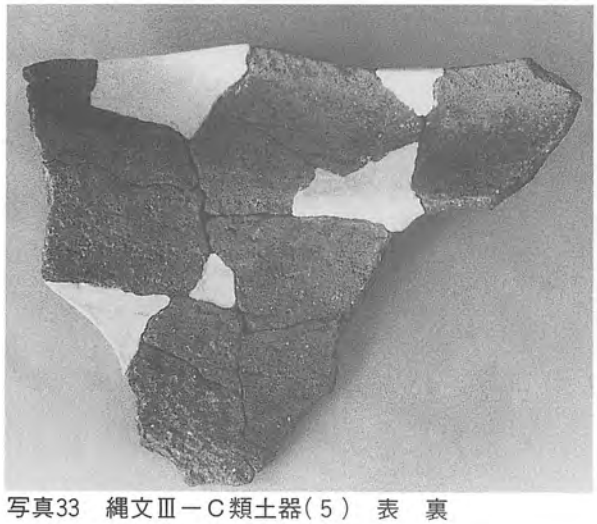





写真33　縄文Ⅲ－C類土器(５)　表　裏

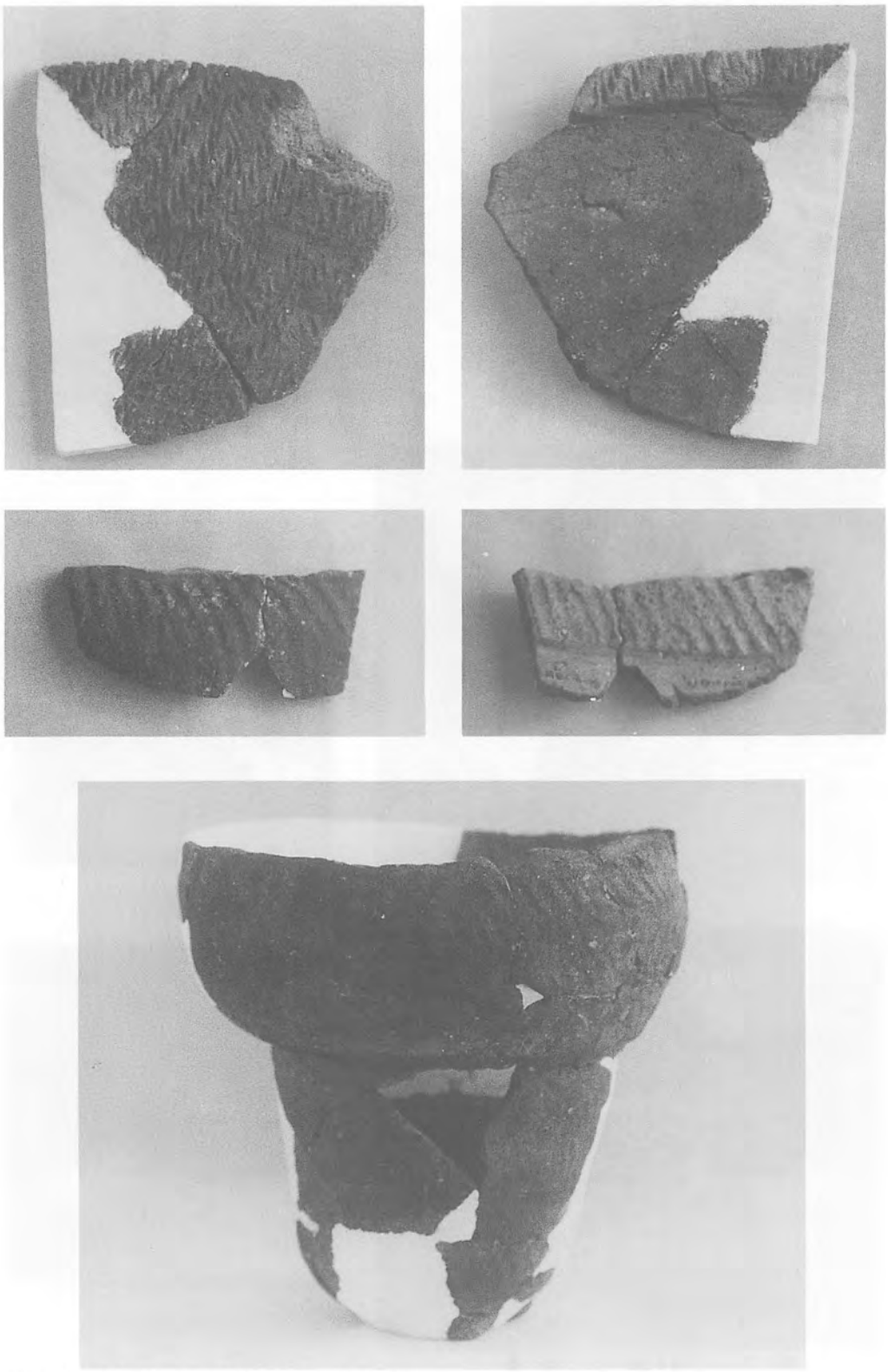


写真34　縄文Ⅲ－C・D類土器　表・裏

写真35　縄文Ⅲ－Ｅ類土器　（上）表　（下）裏

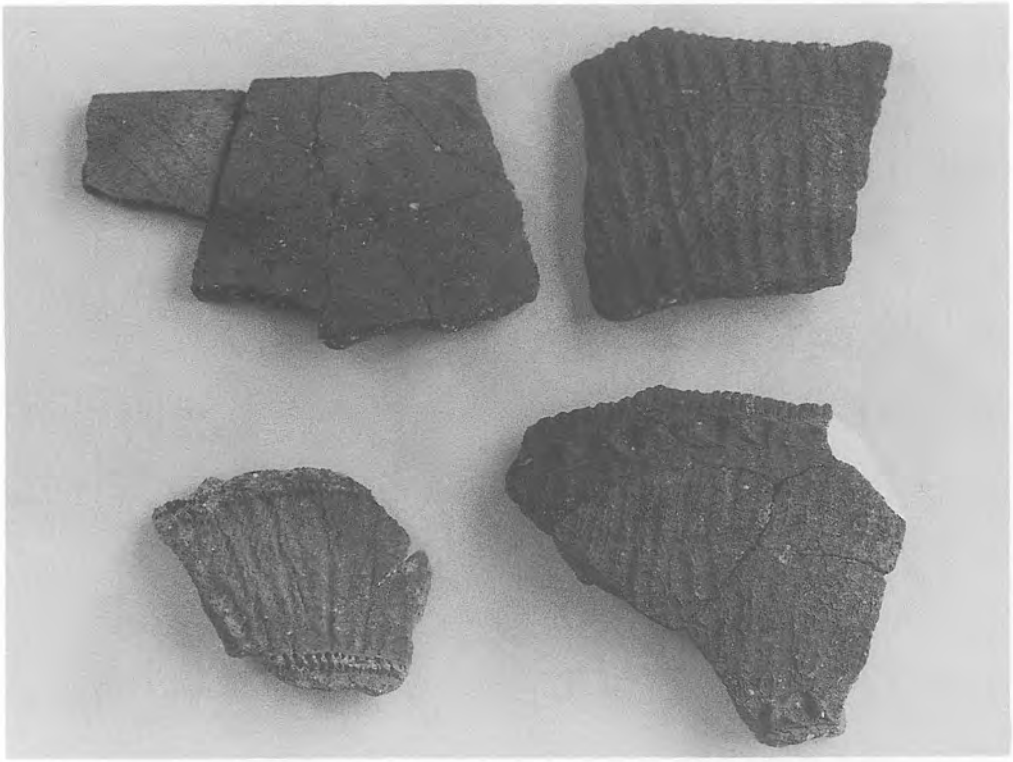


写真36　縄文Ⅲ－Ｆ類土器(１)　(上)表　(下)裏

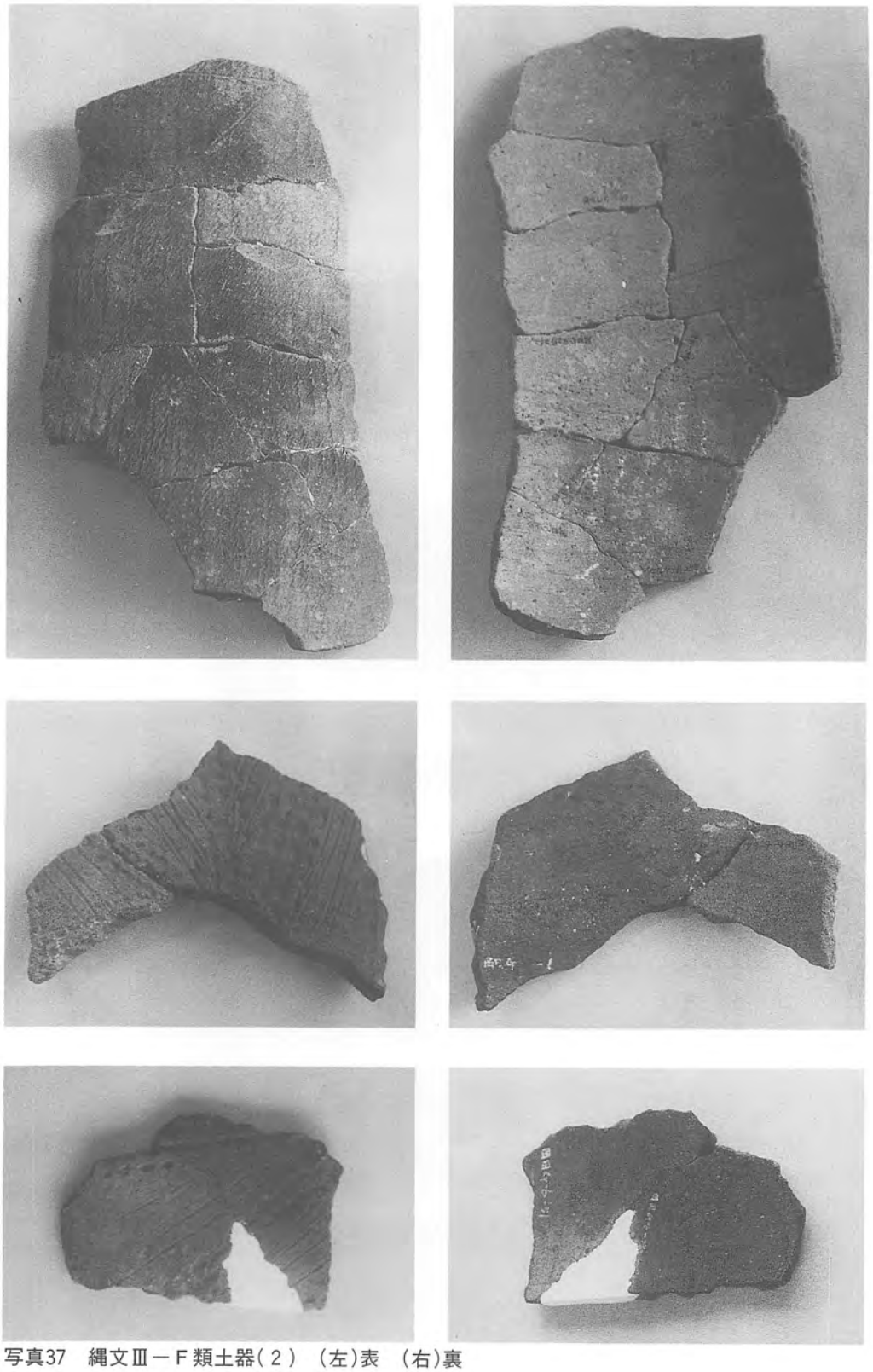
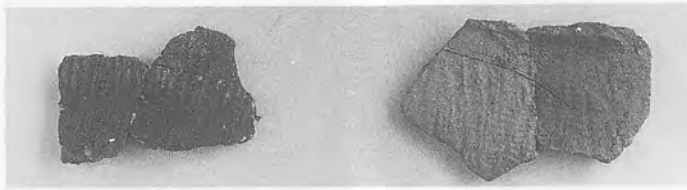


写真37　縄文Ⅲ－Ｆ類土器(２)　(左)表　(右)裏



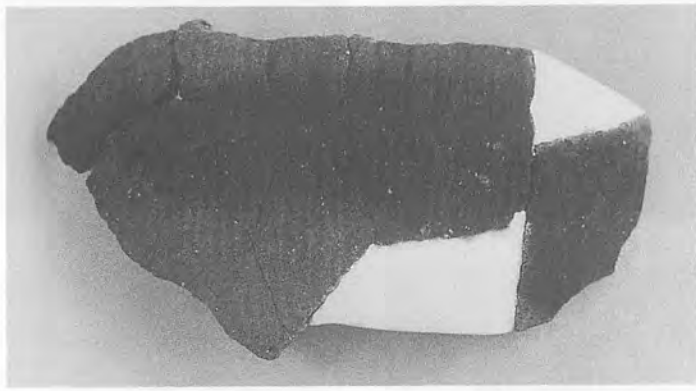


写真38　縄文Ⅲ－G類土器　表

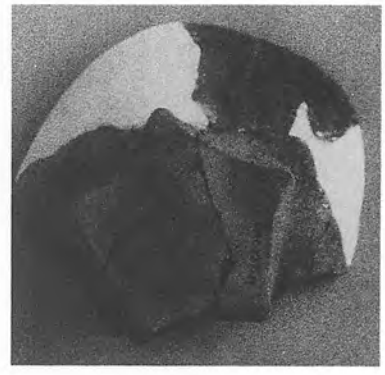
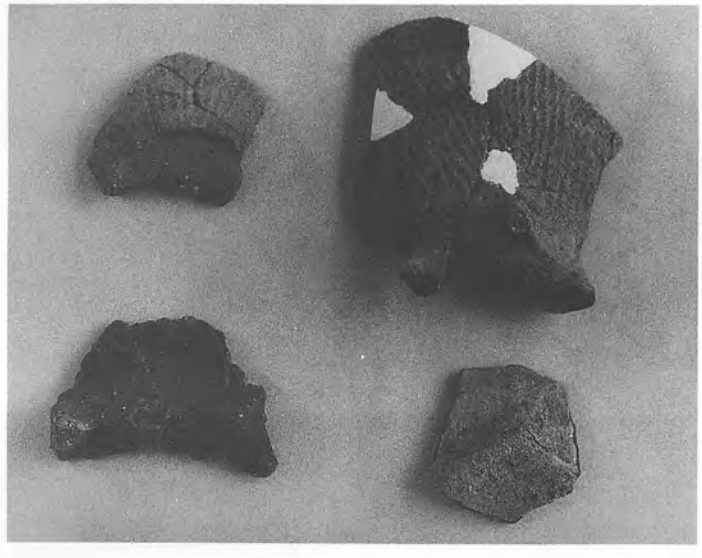
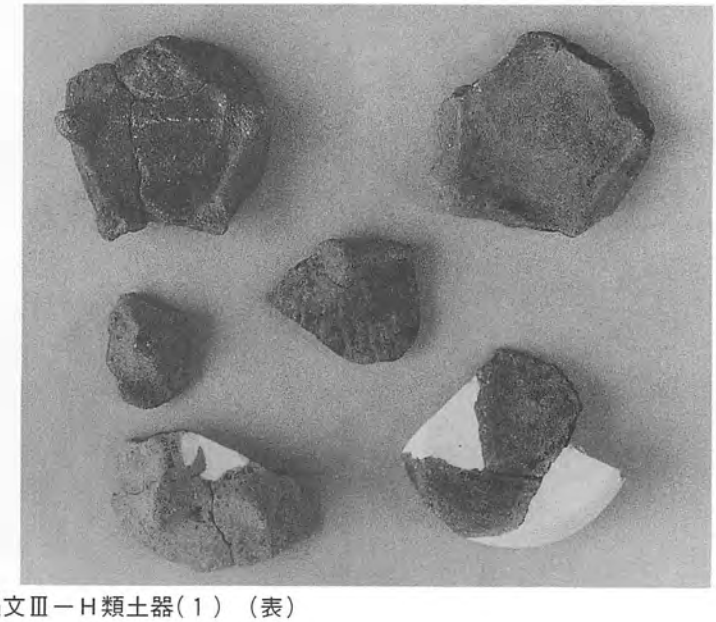




写真39　縄文Ⅲ－Ｈ類土器（１）（表）

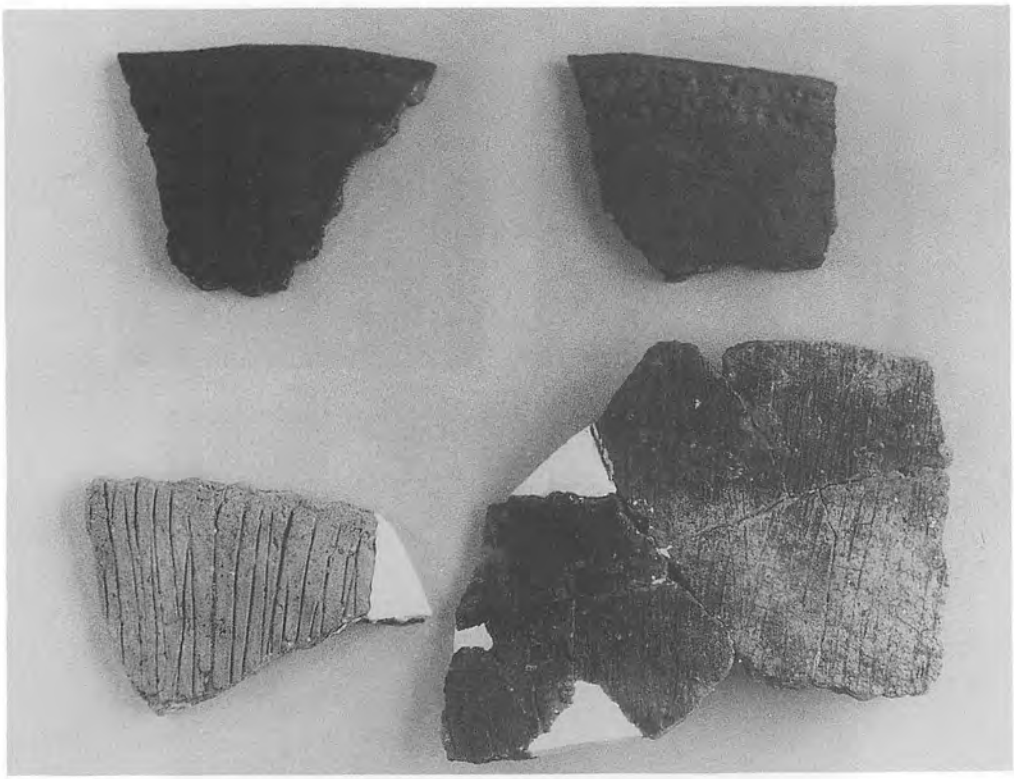


写真40　縄文Ⅲ－Ⅰ類土器　(上)表　(下)裏

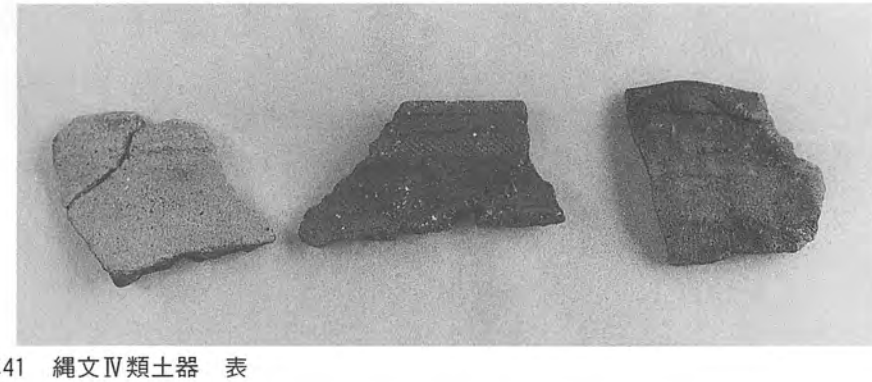
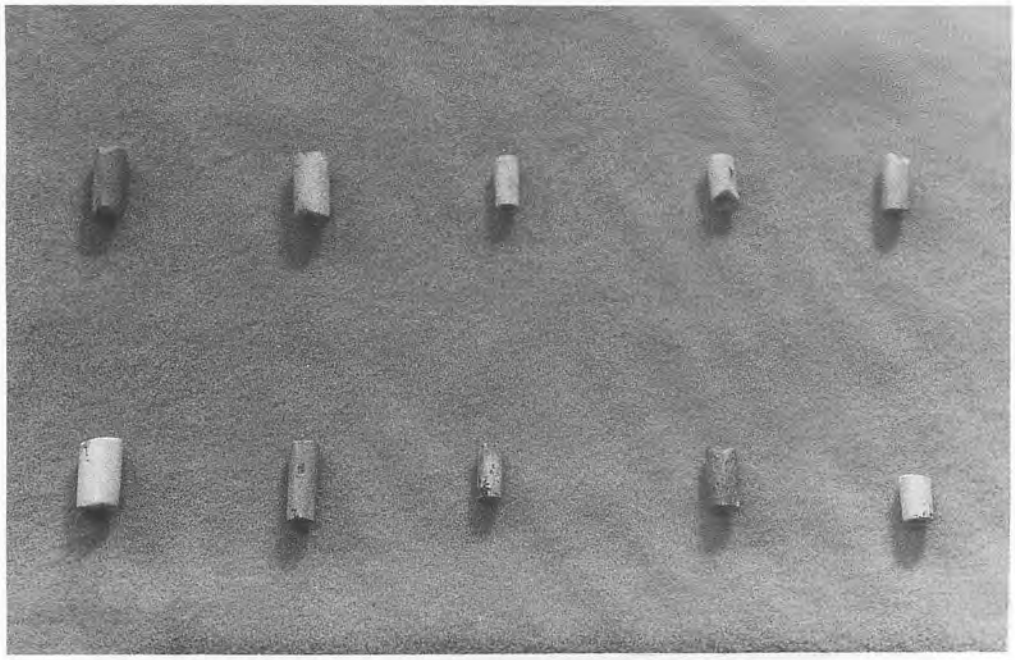


写真41　縄文Ⅳ類土器　表



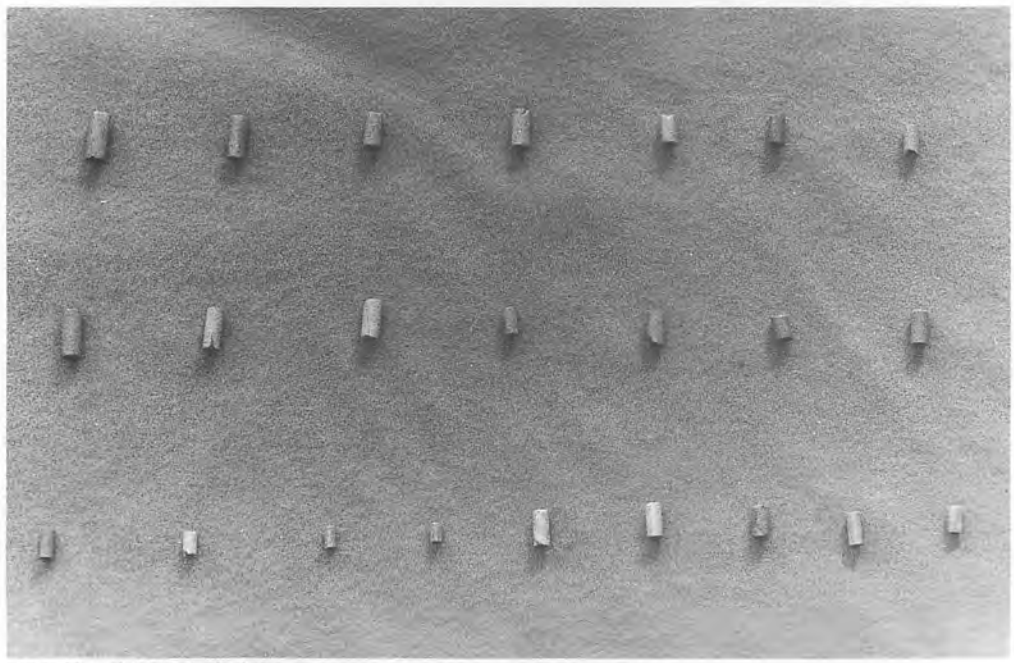


写真42　甕棺墓出土土器

写真43　甕棺墓出土管玉

写真44　弥生中期甕棺

熊本県文化財調査報告第135集

岡　田

—県営菊池うては台地地区畑地帯改良工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査—

発行年月日	平成５年３月31日
発　　行	熊本県教育委員会 〒862 熊本市水前寺６丁目18番１号
印　　刷	中央印刷紙工株式会社 〒860 熊本市田崎２丁目５－38 ☎096-354-4191

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 135 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：岡田
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/